
千冬と束は似た者同士

彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千冬と束は似た者同士

【Zコード】

Z0576Z

【作者名】

彩

【あらすじ】

千冬と束がひたすら仲良しな話。そして千冬の性格が全く別人な話。とりあえず、親友仲は恋仲にシフト?姉弟、姉妹仲は良好です。そして束はやっぱり天災のままでした。どことなく空っぽな千冬と、千冬への愛が最初から最後までMAXな束による、百合物語です。構成成分は千冬への愛と、千冬と束の百合への愛。ただ今、千冬と束の学園生活編。

似た者同士たちの出会い

「ああ、嫌ね。面倒だわ」

よる、めをやましたら、おかあさんの「えがき」でした。

「今更、そんなこと言つても仕方ないだら」

コレングでおかあちゃんと、おとうさんがはなしてた。

「でも私、言つたわ。結婚するとき」

なにをはなしていのかな?わたしはドキドキして、ひつかから
おかあさんとおとうさんのはなしを、きいてみた。

「私、子どもは絶対にこらなって、言つたわ

わたしは、いらな」「どもなんだつて。

とある幼稚園の、入園式。一クラス三十人あまりで、計三クラス。
クラス名はあさがお、たんぽぽ、ひまわりと幼稚園らしい可愛らしいもの。

全体を通しての入園式が終わり、クラスごとの部屋に来て数十秒。
イスに座つたままはしゃぐ子、緊張したように周りをキョロキョロ
と見ている子、立つて歩き回る子として早くも注意されている子。

少しだけ見慣れてきた毎年毎年の光景と、子どもたちの騒ぎ声に、部屋に入ってきた今年で二年目の若い女の先生が、笑顔で口を開いた。

「はい、みんなー！こんにちわー」

「こんにちわー……」

元気に挨拶をすれば、殆どの子どもが元気よく、中には恥ずかしそうに小さな声で、返事をしてくれる。彼女はそれに笑みを深めて、大きな身振りで自分を示して子どもたちを見渡した。

「今日からみんなの先生をする、佐々木加奈です。加奈先生って、みんな呼んでねー」

「かなせんせー！」

「はーい！」

上々の反応に、加奈はうんうんと頷く。出だしは好調に見えた。にこやかに笑顔を浮かべたまま、加奈は子どもたちを見回す。笑顔の子、おどおどした子、隣の子に話しかける子、たくさんいた。

「（…………あれ？）」

その中に、加奈は予想しない存在を見つけて、少しばかり驚いて目を瞠る。

見つけたのは、どういうわけかパソコンを持ち込んでいる女の子。周りを一切気にせずにカタカタとキーボードを打ち鳴らす姿は、子どもとは思えないほどに異様に映る。

加奈が特に気になつたのはこの子ども。けれどその疑問も、次々に消化しなければ無い恒例行事の為にすぐに思考の外へと追いやられた。

「それじゃ、まずは自己紹介をしましょ。お友達に、自分の名前を元気よく教えてあげてくださいね」

一番は、相田君。そう彼女の言葉で順調に始められた自己紹介に、またも彼女が少しばかり目を見開いたのは、あ行が終わる直前の事。

「織斑千冬です」

席を立ち、名乗り、また座る。僅か三秒の出来事に、加奈は何も言えずにあんぐりと口を開けた。

どの子どもも、もじもじと照れたり、元気よく名乗つたりと子どもらしさが見えるのに、たった今名乗つた女の子にはそれが無い。ただの事務作業のように、それを終わらせてしまった。

「……あ、そ、それじゃ次は、川内藍ちゃん」「ひや、ひやい！」

思わず呆けてしまつた彼女は、慌てて次の女の子を促した。今は順調に自己紹介を終わらせることが第一とされ、一人だけを気に掛けるわけにはいかないのだ。

そのまま、彼女の思うところの子どもらしい自己紹介が続き、さ行に差し掛かったところで、順番は、彼女が気にしたパソコンを持ち込んだ女の子の番となつた。

「それじゃ、お名前を言つてくれるかな?」

「……」

「あ、あれ……？」

促しても、女の子は彼女を見ようとしない。ただ無表情に、――

切の顔を遮断しているかのようにパソコンを打ち鳴らしていく。

「えっと、お名前、言つてくれるかな？」

再度、困惑しながら聞いて、初めて女の子がパソコンから一瞬、視線を加奈へと向けた。その視線はまたすぐにパソコンに戻されたが、ほそりと小さな咳きが一つ。

「…………篠ノ之束」

これで良い?とばかりに響いた名前に、加奈は思わず頷いてしまつて、自己紹介は次へと進む。

「(えい、どうこう事かしら……?)」

子どもたちの自己紹介を聞きながら、加奈は困惑に頭を悩ませた。自己紹介前半にして、既に問題児候補が一人。それも、やんちゃで困るといつのとはまた別の意味で困りそうな、そんな問題児候補。これから彼女は、そんな問題児たちがいるクラスを受け持たなければならぬ。

「(…………がんばれ、私!)」

心中で激励して、じつをりと握った握りこぶしは、じつと汗ばんでいた。

入園式のみで終わったその日の翌日。
大きな部屋ではあちこちで遊ぶ子どもたち。鬼ごっこいやまわらわ、

積み木遊びとジャンルは幅広い。

先生である加奈が声をかけるのもあって、人見知りで混ざりたくても混ざれないでいる子どもは、すぐに何かしらのグループに入れられる。そのおかげで、一人で遊んでいる子どもは残すところ一人だけだ。

「千冬ちゃん、皆と遊ばないの？」
「いいです」

千冬は、二人のうちの一人だった。誰とも遊ぼうとせず、ただ眺めているだけ。加奈が声をかけても、淡々と素つ気ない返事をするだけだ。

「（厳しいわね……）」

実は彼女、千冬に声をかける前にもう一人、パソコンを持ち込んだ女の子にも声をかけている。が、女の子には返事さえしてもらえず、その存在を認識すらされずに終わってしまったのだ。

「あつ……」

困惑する加奈を前に、千冬はてくてくとその場を離れる。放つてはおけないが、扱いに困つてしまつて、触れるに触れられない。

「かなせんせー！」
「あ、はいはーい」

他の子どもに呼ばれて、加奈はそちらへ向かう事にした。

一方、加奈から離れた千冬は、折り紙や絵を描く為に用意された机のある一角に座つていた。

椅子に座つて、他の絵を描く子どもたちからは十分すぎるくらいに距離を取つてゐる。そしてただぼんやりと、遊び回る子どもたちを眺めていた。

「（うるさい……）」

沸き起つるのは子どもらしからぬ感情のみで、千冬は椅子の背もたれの寄りかかる。

静かな場所で、一人になりたい。それが少女の望みだつた。けれどその望みとは裏腹に、少女の周りは騒がしさに溢れていた。すぐそばを走りまわる子どもたちの足音とはしゃぐ声に、少女は椅子を飛び降りてまた歩き出す。

「（……静かな場所は、どこだ？）」

一人でいると、先生が声をかけてきた。子どもたちの近くにいると、そこはいつも騒がしかつた。

出来るなら一人でいたかつた。静かな場所にいたかつた。
それが無理でも、せめてこの騒がしい空間で一番静かな場所は、
と千冬は壁沿いに部屋を歩いて探し回る。

そうして辿り着いたのは、もといた部屋の角の対角線にある部屋の角。そこは他の子どもたちも距離を置き、たつた一人の子どもだけが占有する空間。部屋の騒がしさから僅かに離されたそこで、女の子がパソコンをカタカタと打ち鳴らす。

千冬は、この騒がしい部屋でようやく見つけた空間に、静かに静かに息を吐き出した。

「邪魔、する」

一応は、先住者である少女にそう声をかけて、千冬はすとんと座

つて壁に寄りかかった。それに驚いたように顔をあげたのは、先住者の少女だ。

少女はカタリとパソコンを打つ手を止めて、座り込んだ千冬を眺める。じっと見つめてくる眼差しに、千冬はただ無言で見返して、やがて面倒くさがりうな様子で田を開じた。

「……………」、束さんの場所なんだけど」「
「そうか」「
「邪魔なんだけど」「
「少しだけ、いさせてくれ」「
「なんで」「
「……………」、千冬は静かなんだ」「

あつちは煩いと、千冬は思つたままに告げる。それから、少ししたらすぐに出て行くからとも言つて、体育座りで立てた膝に額を押し付けた。

小さく縮こまつたその姿は、邪魔だとう少女の邪魔にならないようにしているかのようだつた。

「……………ねえ」「
「……………なんだ」「
「名前、なんていうの?」

少女は千冬の名前を覚えていなかつた。けれどそれは千冬もまた同じで、千冬は少女の名前を知らなかつた。過去形なのは、つい先ほど、少女が自分で名乗つたからだ。束さんと。

「織斑、千冬」「
「千冬……」

縮こまつた体から発せられた声はぐもつていた。少女は千冬の名前を繰り返して呟くと、今までの無表情が嘘のよつた笑みをパッと浮かべる。

「ちーちゃん」

「……なんだ、それは」

「束さんはちーちゃんと呼ぶことに決めたよ。いいでしょ？ いいよね！」

「…………好きにしや」

一転して騒がしい少女に、千冬は投げやりに肯定の言葉を返した。のそのそと近づいてくる音に顔をあげる。すぐ隣で少女が千冬を見ていた。

「ちーちゃん」

「…………」

「私はね、篠ノ之束だよ。束さんだよ」

「…………そうか」

「そうなんだよー」

意味も無く強く頷いて、束は千冬の隣でまたパソコンをカタカタと打ち鳴らし始めた。

一人のいる部屋の角は他の子どもから距離を置かれて、子どもたちの遊ぶ騒がしさからは少し遠い。

入園してから翌日に千冬が見つけたのは、パソコンのカタカタと鳴る音が響く、束という先住者のいる空間だった。

似た者同士たちの出会い（後書き）

転生者が千冬と束と同じ幼稚園で出会い、一次創作では、束はともかく、千冬がとても子どもらししいです。

それを見て、思ったこと。千冬が束みたいな性格だったら、どうなんだろうと。

そんな千冬の、変わった話。ぶつちやけこれが書きたかっただけとか、言えない。

問題児は問題児

翌日、空は晴れ渡る青空だった。

当然のように外で遊ぶことになつて、千冬は照りつける太陽から逃げる様に日陰に入つて座つていた。

遠目に砂場で遊ぶ子どもたちや、時折視界を走り去る鬼ごっこをする子どもたち。

千冬のいる日陰はそんな彼らから遠く、先生の田の届くギリギリの範囲だつたため、子どもたちの騒ぎ声は遠かつた。

「ちーちゃん、嬉しい？」

「……ああ

静かで嬉しいか、と聞いた束に頷いて、千冬はぼんやりと木の葉を眺める。当然のように束がいるけれど、気にはならなかつた。

「見て見て、ちーちゃん！」

軽く目を開じた千冬に、束は身を寄せてパソコンを差し出す。横に細長いノートパソコンの画面に表示されている数式と何かの設計図に、千冬は首を傾げた。

「これは？」

「束さん特製の最新パソコンだよー・空中投影型ディスプレイ&キーボードでいつでもどこでも大画面で大容量だよー・すついこいんだよー・」

「へえ

「…………信じてない？」

「いや

軽い返事に不安そうに瞳を揺らした束に、千冬は首を振る。そしてじっとパソコンの画面を眺めて、もう一度首を傾げて答えた。

「理解は出来ないが、凄いのはその説明で分かつた」

「本当！？」

「ああ。束は頭が良いんだな」

「うんっ！！」

千冬のその肯定は、束にとつて初めての肯定だった。

子どもの身でありながら、大人ですら完成させることのできない理論を完成させる束を認める大人は、束の周りにいなかつた。両親ですら、束を腫物のように扱う。

同じ子どもでも、束の傍には誰も寄らない。無表情でただパソコンを打ち続ける少女は、幼い彼らにとつて理解できない不気味な存在だつた。

「えへへっ、ちーちゃん！」

「……？」

そんな束に近づいてきたのは、千冬だつた。

昨日一日、束は千冬と一緒にいた。千冬は何にも興味が無いようだつた。子どもたちが遊び回るのを、煩そうに見たりはしていたけれど。

それは、まるで束と同じように思えた。束は興味が無いものに一切の関心を抱かない。それは物だけではなく人間にも同様である。

ただ無関心に世界を見る束にとつて、千冬は初めて興味を抱けた人間だつた。いや、もしかすれば既に、それだけでは無くなつているのかも知れないけれど。

「千冬ちゃん、束ちゃん」

「……」

「……」

抱き着いてくる束を、千冬が首を傾げながら受け止めてこねり、先生が声をかけてきた。

途端に表情を消す束。千冬もまたチラリと視線を向けて、けれどすぐに視線は先生を越えて空へと向く。ぽんやりと眺めた空は、雲一つ無い青空。

「みんなと遊ばないの？」

「いいです」

「……そんな」と言わないで、遊びましょ？」

「……いいです」

「あ、ちーちゃん待つてーー！」

何度も誘いをかける先生に、千冬は一言告げると立ち上がり、日陰から出て行く。それを追つて束もまた日陰を飛び出し、千冬の隣を並んで歩いた。

「ちーちゃんちーちゃん」

「……なんだ？」

「束さんを置いて行かないでほしーんだよ。泣こわいよ~」

「……そうか」

「ああっ、待つて待つてーー！」

束がふざけて泣き真似をしてみせると、千冬はまったく気にした風も無く歩いて行つてしまつ。それを慌てて追いかける。

やうして辿り着いた次の日陰は、少しばかり隠れっこに近い場所だつた。

「ちーちゃん、ご機嫌斜め？」

「いや」

千冬は、煩くは感じても不機嫌になつてはいなかつた。昨日の騒がしさに比べれば、まだずっとましである。

一人はそのまま日陰の中で、束が千冬に寄りかかるようにしながら、座つていた。パソコンを打ち鳴らすカタカタという音が、千冬の耳を刺激する。その音を聞きながら、少女は目を閉じていた。

「…………」

自分の周りに溢れる子どもたちに、千冬は困り果てていた。
切欠は偶然。日陰でぼんやりとしていた千冬たちの元に、ボールが転がってきたことだつた。

ボールで遊んでいたのは、二人から随分と離れた場所にいた子どもたちで、千冬は仕方なしにボールを持つて子どもたちに渡しに日陰を出た。投げ返すには遠すぎたからだ。

束は行かなくてもいいと言つたが、目の前にボールが転がつたままの子も千冬にとつては鬱陶しくて、それゆえの行動だつたのだが。問題は、その帰り道。先ほど撃沈した先生が、砂場を通りかかつた千冬と一緒に遊ぼうと誘つたことだつた。

子どもの一人が先生の真似をして、千冬を遊びに誘つた。そうしてそれが広がり、砂場の子どもたちから揃つて遊ぼうと誘われ、囲まれた。

「（…………煩い）」

せつかく騒ぎの外にいたのに、気づけばその中に連れてこられた、千冬は不機嫌だつた。表情には一切の変化を見せないが、その実、早くこの場から立ち去りたい気持ちでいっぱいだ。

「お城作るうー！」

「作るーー！」

そんな千冬の心情など知ったことじやなこ子どもたちは、えつさえつさと砂を盛り上げお城を作ろうと奮闘する。しかし、全員が全員、好きなように作るうとするものだから、出来上がるのはぐしゃぐしゃの砂の山。

できなーいとたくさんの方声が上がつて、騒がしさが増す。それに耐えかねて、千冬は砂に手を伸ばした。

「みんなでいつしょに作ればいいよ。といしょは、おじろのかべを作ろう」
「うんーー！」
「ほくもくほくもくーー！」

千冬の真似をして、子どもたちがお城づくりを再開する。といひで千冬が指示を出して、皆で同じものを作り上げた。結果として、小さいながら先ほどの砂の山とは泥雲の差のお城が出来上がつた。

「できたーー！」
「ちふゆちゃん、すーーーー！」
「……」

尊敬のまなざしで千冬を見る子どもたちに、本人はどういえばもう良いだらうかと考えていた。

遊んだのだから、もう良いだろ？か。もう離れても良いだろ？か。楽しそうな子どもたちを前に、千冬は小さな笑みを浮かべて見せると、緩慢な動きで立ち上がり歩き出した。

「あ？」

「ちふゅちゃん、どこに行くの？」

さながらハーメルンの笛吹が如く、歩き出した千冬の後ろをぞろぞろと歩いてくる子どもたち。砂場をいったん離れて、他の子どもたちの様子を見ていた先生は、それを見てあんぐりと口を開けてしまった。

昨日一日、東以外の子どもと話す姿を見なかつた少女が、子どもたちを引き連れている。それに驚いたのだ。

引き連れている本人は、全くの無表情で楽しそうには見えなかつたけれど。

「千冬ちゃん」

「せんせい、なんですか？」

「皆、千冬ちゃんともつと遊びたいんだって。一緒に遊びましょ？」

「……」

千冬が振り返ると、そこには田をキラキラさせた子どもたちがたくさんいて、加奈の言葉が嘘ではないと肯定しているようだった。

「……つかれ、ました」

「え、もう……？」

言つた千冬が、疲れるほど遊んでいたようには見えなくて、加奈は思わず聞き返してしまつた。それに返つてきたのは無言の頷きで、うーんと頭を悩ませる。

子どもたちは、千冬の事情などまるで気にした風も無く、立ち止まつたその周りを囲んで遊ぼうと誘いをかけてきた。

「（……煩い、な）」

騒がしいのは嫌いだった。千冬は加奈を見上げるが、彼女は困ったように笑うだけ。

助けは期待できない状況に、千冬は子どもたちを見て一つ提案をした。

「かくれんぼをしよう」

「かくれんぼ？」

「やひーやひーーー！」

否は無く、その提案に全員が乗つてくれる。千冬は加奈を見て、小さく首を傾げて聞いた。

「せんせい、おにやつてくれませんか？」

「あ、私？ええ、いいわよー」

「じゃあ、ひやくかぞえて。みんな、かくれて

「わーー！」

千冬が言つと、一斉に子どもたちは散り散りに走つていく。加奈はその無邪気な様子に笑みを浮かべて、それからふと、千冬がその場に立つたままなのに気づいて首を傾げた。

「千冬ちゃんも、早く隠れないと

「私は、いいです」

「え？」

「私は、遊ばないです」

呆氣にとられて固まってしまった加奈に、千冬はぐるりと背を向けて歩き出す。向かったのは束が座る日陰で、加奈が見送る先で少女はそこに座り込んだ。

「……困った、わねえ」

人気者になつたけれど、少女にその気は無いらしい。視界の中で、束が千冬に抱き着いていた。

「ちーちゃん、おかえりーー！」

「……ただいま？」

首を傾げて言った。束はギュウッと千冬を抱きしめて、体全体で喜びを表現するかのようにしながり笑っている。

「ちーちゃんがいなくて束さんは寂しかったんだよー」

「……束もくればよかつたんじやないか？」

「え、嫌だよ。束さんにはちーちゃんだけがいれば、それでいいのー！」

「わづか……」

皿慢げに言う束に、千冬はただ小さく返しただけで、視線は晴れ渡る空へと向けられた。首に回った腕に軽く手を添えて、軽く目を閉じる。ここには、束の声は聞こえるけれど、他の音は遠くて静かだ。

「束の傍が、一番落ち着くな」

「えつ、本当？本当ちーちゃんーー？」

「……静かで、いい」

「うれしいな、東さんもう一ちゃんの傍が一番いいよーー。」

ギュウウと抱きしめられる腕に力が籠められる。少しばかり苦しくなつて、ポンポンと軽く腕を叩いて知りせると、慌てたように東が力を緩めた。

静かなこの空間で、千冬はのんびりと目を閉じて微睡んでいた。

問題児は問題児（後書き）

初投稿なので、一話連続で。あとはのんびり更新です。
ちなみにこの作品、束の千冬へのテレ度は常にMAXです。

正反対の少女たち

日曜日、千冬は自分の部屋でぼんやりとしていた。朝食は食べ終えた。両親はリビングにいたが、千冬は食べ終えてそつそつと部屋に戻つて来ていた。

「……」

静かで、自分一人の部屋が、千冬の好きな場所。誰の存在も、声も、視線も、何も気にしなくて良い場所。千冬はここが好きだった。千冬の両親は、そんな千冬に何も言わない。ある日、何の前触れも無く部屋に籠る事の増えた我が子に、何も言わない。千冬は、これが本来の姿だったのだと受け入れた。

「……」

置物のようにじょんやりと、ただそここにいる。それだけ。

「ちゃん！」

「ん？」

「ちーちゃん！ちーちゃんちーちゃんちーちゃん！……」

「……束？」

立ち上がり、からりと窓を開けて身を乗り出す様に外を見ると、束がいた。一階の窓から顔を出した千冬に、束が満面の笑みで大きく手を振り飛び跳ねる。

「おひはよー。ちーちゃん！」

「おはよう……何をしていいんだ?」

「遊びに来たんだよ!!」

「……ちよつと待つてろ」

トントと窓を開けるために乗っていた机から下りて、パタパタと玄関へ向かつて扉を開ける。部屋を出る直前に見た目覚まし時計は、八時を指していた。

開けた扉に手をかけたまま、千冬は考える。一度、家中を見ていから束に首を傾げた。

「うひ、入るか?」

「いいの!?」

「……たぶん、構わない。どうぞ」

「わーいわーい!」

大喜びの束を家に招き入れて、千冬は扉を閉める。一階への階段を上るうとしたところで、トイレから出てきた母親と目が合つたけれど、何の言葉も無かつた。

自分の部屋へと連れて行き、そうすると束はキラキラと目を輝かせて室内を見回し始める。

「ちーちゃんの部屋!」

「そうだな」

興奮する束に、千冬は何が面白いのかと首を傾げた。

千冬の部屋には、特に目新しい物は無い。何の変哲も無いベッドに机、本棚はあるが、あまり本は置いていない。プラスチックのタنسも普段から着るような服があるだけで、玩具と呼べるような物は何も無かつた。

「ちーちゃんの匂いがあるよ~」

「あまり嗅ぐな」

ボスッとベッドにダイブした束が枕に顔を埋めて言ったのには、ベッドに腰掛けで返す。

遊べるような物も無い部屋で、一応はどう歓迎すべきかと千冬は頭を悩ませたが、答えは出なかつた。

「束」

「な~に? ちーちゃん」

「したいことはあるか?」

「したいこと?」

問われて、束ははてと首を傾げる。したいこと、したいことと感いて、パツと笑つた。

「特に無いね!」

「……なら、何をしに来たんだ?」

「ちーちゃんに会いに」

「……会いに?」

「うん」

最近は楽しみになつてきた幼稚園が、今日は休みだつたから。楽しみの理由である千冬に会えないとなつて、束はそれならと会いに来たんだといつ。

たつたそれだけ。ただそれだけ。自分に会いに来たという束に、千冬は心底不思議そうに聞いた。

「なぜ私に会いたがる?」

「束さんはちーちゃんにフォーリンラブ!」

「ふおー、りん……？」

「ちーちゃん愛してるーーー。」

「…………愛？」

ますます分からぬ、と田をパチパチと瞬かせた千冬に、束は笑う。

「ちーちゃんは、束さんと一緒にいればそれでいいんだよ~

「一緒に、か?」

「わづだよ。それでいいんだよ」

「…………わかつた」

今度は単純な答えに、千冬はあっさりと頷いた。束の笑みが深まる。

腰かけていた体勢からベッドに倒れ込んだ千冬は、同じように横に寝転んだ束に、思つたままに伝えた。

「束の傍は落ち着くから、一緒でいい」

「その返事は最高だよちーちゃん!」

ギュウシと抱きしめられる。柔らかなベッドの上で抱きしめられて、千冬はそのまま目を閉じた。

幼稚園の子どもたちの千冬と束への評価は、正反対なものだった。千冬は、子どもたちの人気者だ。見た目は目つきが鋭く恐い印象を与えるも、一度触れてしまつと、不思議なほどに子どもたちは千冬に懐く。それはもう、先生以上に子どもたちを統率してしまつくなつて。

「…………」

束は、子どもたちに距離を置かれている。話しかけても見向きもされず、それ以前に常に無表情でただパソコンを弄り続ける束が、子どもたちには異質で恐かつた。そう思うのは子どもだけでは無く、大人までもそうだった。誰もが束を扱いかねて、近寄ることが出来ない。

そんな正反対の評価を受ける千冬と束だが、当人たちはとても仲が良い。遊び始めると、子どもたちは拳つて千冬を誘おうとするが、千冬本人はその前に既に束の傍にいる。それによつて、子どもたちは千冬を誘うことが出来ずにやきもきする羽目になる。一人にとつて、それは全く関係の無い事らしいが。

「ちーちゃんどう? これすつごいでしょ!!」

「……よく分からないが、何をするためのものなんだ?」

「空を飛ぶんだよ! 着るだけで飛べるんだよ、びゅーんつて!!」

「それは、確かに凄いな」

束の見せる設計図は、相も変わらず千冬には理解できない数式や言葉でいっぱいだが、彼女は嫌な顔一つしない。束の単純明快な説明を聞き、言葉少なに思つたままの感想を言う。その繰り返し。千冬と束は、いつも一緒にいる。幼稚園に来ると束が千冬に突撃し、それから基本はずつと一緒にいる。時々、千冬が先生に引っ張られて、他の子どもたちの輪に入れられることがある。その際に束は絶対に一緒に行きはしない。無表情に不機嫌なオーラを出しはするが、けれど千冬は、子どもたちの遊びに一度付き合つと、もう良いいだらうとばかりに束の元に戻つていく。そうなると誰かが引き留めようとも、全くの興味を示さなくなる。そうして千冬はまた、束の話を聞きながら時間を過ごすのだ。

「ちーちゃんは、笑わないね」

「……なんだ、突然」

話しの最中、束は何を思ったのか呟くように言った。千冬が首を傾げて見ると、彼女は拗ねたように唇を尖らせて返す。

「あの子たちには、ちーちゃん笑うのに。束さんにはちーちゃん笑つてくれないんだよ」

子どもたちと遊んで、遊び終わると千冬は決まって小さな笑みを浮かべる。そうしてから、束の元に戻る。

けれど束にそうした笑みを千冬が向けた事は無くて、束はそれが不満で仕方が無かった。

むうっと説明した束に、千冬はパチクリと手を瞬かせて聞く。

「…………笑つてほしいのか？」

「笑つてくれるの？」

「別に、それくらいなら」

笑えというなら、笑えると。千冬は、束の願いに答える様に小さな笑みを浮かべて見せた。

じつと見つめてくる束の目を、笑みを浮かべたままで見返す。喜ぶかに思われた束は、とても不思議そうな表情をした。

「ちーちゃん、無理してる？」

「…………どうしてだ？」

「だって、楽しそうじゃなことよ。面白そうじゃないよ。笑つてるけど、泣きやうだよ」

「…………」

矢継ぎ早に言われた言葉に、千冬はふっと笑みを消して束を見る。そうすると、束は何処か安心したように千冬と入れ替わりで笑みを

浮かべた。

「ちーちゃんは、そっちの方が楽なんだね」

「……そう見えるのか？」

「見えるよ。束さんにはなんでもお見通しなのぞー。」

「……どうか？」

「あれ、なんでそこで首傾げちやうのへーそこは、凄いねって言いつとこるだよー！」

「……」

「ちーちゃん、黙っちゃ嫌だよー。何か言つてーー。」

「……束は、凄いな」

呟くより言われたそれは、普段とはどこか違う響きを持つていた。

「べつに、楽しくて笑うわけじゃない。ただ、笑った方が楽に離れられるから、笑うだけだ」

「ふうん……束さんは、あの子たちと遊ぶことがよく分からぬいけどねー」

「私も、興味は無い」

なのに連れて行かれてしまうから、困るのだ。千冬は一度として、自分から子どもたちの輪に入つて行つた事は無い。連れて行かれ、置かれ、穩便に輪を離れるためにその場を一度満足させてから、次が始まる前に離れる。

それは千冬が徹底して子どもたちとの間に壁を作つてゐる、何よりの証拠だった。

「わざわざ、関わる氣にもならん。騒がしいのは好きじゃない」

「束さんはちーちゃんに関わるの大歓迎！」

「……束の傍は、一番落ち着く」

「ねむつ、殺し文句だよー。束さんはそんなちーちゃんの愛に溺れ
そうだよー」

「そつなんのか?」

「そつなんだよー。」

全身全靈の肯定を前に、千冬はもう一度、そつなのかと呟いた。
よく分からぬままに納得したらしかった。
基本的に、千冬は束の言葉を否定しない。ところどころも、束だけ
では無く誰の言葉も否定しない。

全てを受け入れる。まるで千冬の中には何も無いかのように、何
かの器のようにその言葉を受け入れて、受け止める。言葉にすれば
簡単だが、実際に出来るかとなるとそれは難しい事だった。

「束さんもちーちゃんの傍が一番だよー」

「そつか」

「……むう、嬉しいとは言ひてくれないねちーちゃん

「嬉しい?」

束の言葉に、不思議そつに千冬は聞き返した。

「束さんはちーちゃんに、落ち着くつゝ言わると嬉しいんだよ」

「……?」

「あ、嬉しいじゃなくて愛してるでも良いんだよーむじゅわらの
方が嬉しいんだよー。」

「……愛してる?」

「ぐはつ」

それは、束の想像を絶する破壊力を持っていた。

歓喜のあまりに血を吐き出していくと倒れた束の体が、ぴくぴ

くと痙攣する。その顔に至高の笑みが浮かんでいるのを確認して、千冬はあまり気にして風も無く床を眺めた。

「（…………煩いのは、嫌いだけれど）」

唇を指でなぞる。笑おうと思えば、すぐに唇が曲線を描いた。そこには千冬の感情など、関係が無い。

ただ事務的に、必要だから千冬は笑える。笑みを浮かべて見せる事が出来る。やつするのが楽かと言われれば、全く樂じやないと言えたけれど。

「束」

「んんっ？なにかなちーちゃん。束さんはちーちゃんの愛に溺れて溺死寸前救援求だよ」

「私は好きじゃない相手の傍に、いたりしない」

「…………」

「笑つてなくとも、たぶん私は、束の傍にいるのが　　楽しいと思つ」

「大好き、ちーちゃん！――」

千冬の告白は、いつものように無表情だ。それでも束を喜ばせることは十分すぎた。

笑いかけはしなくとも、千冬も束も互いを想ひ気持ちは、同じだった。

正反対の少女たち（後書き）

課題、いかに干冬と束を百合江ができるか。

束の秘密基地

興味が無いものに興味を示さないのって、普通でしょ？

「～～～」

カタカタとパソコンを打ち鳴らす。三つの画面に三つのキーボードが、今私の目の前にある。

次々と画面に表示させていく数式も、図形も、全部分かる。だって考えたのは私だから。

「～～～～～～～～～」

見かける人間は皆同じ人間に見える。違ひなんて無い、皆同じ。唯一、ギリギリでうちの両親を身内だつて判断できるくらい。

誰だつて、ただ街ですれ違つただけの人間を覚えていたりしない。

私にとってはそれが、興味の無い人間や物だつただけ。

考えようと思えば何でも考えられた。一から十まで完璧に、とてもあつさりと理解して考えられた。

「～～～～～～～～～～～～～」

私の興味を惹くものは何も無かつた。両親が私を気味悪く見ていたのも知つてゐけれど、まったくもつてどうでも良かつた。興味がないから。

考えたものをパソコンに打ち込むのだけ、ただ考えを外に出すだけで楽しくない。だって私の頭の中に既にあるものなんだから。でも、最近はそれが凄く楽しくなっている。

「~~~~~」

「これを見せて、きっと分からないんだろうな。
それでもいいんだけどね。

分からぬなら分かるように私が説明してあげる。それだけの事
なんだよ。

ちーちゃん、私が初めて興味を持った女の子。ちーちゃんの傍は
いつも落ち着いて、心地よくて、離れる事なんて考えられない。
なのにちーちゃんつてば人氣者だから、他のに連れて行かれ
て束さんはいつもジョラシー。
でもすぐに戻つて来てくれるちーちゃん。そのちーちゃんの愛で
束さんは常に溺死寸前だよ。

「~~~~~」でーきたー

ちーちゃんはこれを見て、なんて言つのかな。束さん的には愛
してゐて言つてほしいな。言つてくれないかな。

「待つてね、ちーちゃん」

うぶつこ束さんは、今日もちーちゃんまつじぐひー。

時が少し経ち、千冬と束は小学生となつた。

一学年二クラスと、少子化の昨今にしては大きい方といえるかもし
れない。

「見て見てちーちゃん!」

いつものように、束は席に座っていた千冬の前にパソコンを差し出した。そこにはまた、千冬には分からぬ数式や図形が表示されている。

「いろんな物を量子変換…ど」でもいつでもなんでも取り出し可能！これで鞄要らずだね…！」
「へえ。それは便利だな」
「でしょでしょ？ つてなわけでさつそく作ってみるんだよ…」
「駄目だ」

「わざわざわくわくとする束を、千冬は首を振つて止めにかかった。

「えー、なんでなんでなんでー？」
「束の考える物は凄いからな。誰かに見つかつたら、きっと煩くなる」
「ちーちゃんは煩くなるのが嫌いだねー」
「……でも、そんなに作りたいなら、作ればいい」
「ううん、作らないよ。ちーちゃんが嫌ならやらなーい」

おおよそ、小学生になつたばかりとは思えない会話をする一人は、クラスでも浮いていた。幼稚園の頃から何も変わらない光景だ。ちなみに、束がなぜ千冬と同じクラスにいるのかと言えば、簡単な話で同じ小学校だつたからである。偶然にも二人の住所から見ると通う小学校は同じで、クラスについても束が何かする前から同じクラスに振り分けられていた。

そして、偶然はさらに続き席は一人とも隣同士だ。千冬の席が廊下側の一番後ろで、束は一列目の一番後ろ。さとしで始まる苗字が随分と多いクラスだったようだ。

「はーい。おはよー」わざとまーす

「おはよーひざわこまーす」

千冬と束が、こつものよつて話してこるひちに、彼女らの担任となる教師が教卓の前に立っていた。

そうして、一人の小学校生活の幕が開いた。

学校からの帰り道、束は千冬に言った。

「ちーちゃん、うち来ない?」

「束の家?」

「そつそつ。ちーちゃんに見せたいものがあるんだよー」

見せたいもの、と言われて千冬は僅かに首を傾げる。思いつくようなものは無かった。

一瞬、今日の今後の予定を考えてみる。家に帰るだけだったから、頷いた。

「えっへへへ、ちーちゃんがうちに來るのは初めてだね!」

「ああ……そりいえば、そうだな」

幼稚園の頃から、休みの日は束が千冬の家を訪れたので、千冬は束の家に行つたことが無かつた。束も、こんな風に誘つたことが無かつた。

ここにこと満面の笑みで千冬の手を握つて、束は家へと帰る。こんな風に笑顔で家に帰つたのはおそらく初めての事だった。

「ああ、ちーちゃん。どんどん入るとこによ

「お邪魔します」

奥へ奥へと進める束を前に、千冬は常識を捨ててはいなかつた。儀礼的に玄関で挨拶をしてから、靴を脱いで中へと上がる。

束の家は神社のすぐ傍にあつた。千冬は前に一度、束の家が神社で、他にも剣道の道場を開いていると聞いていたが、神社と道場とはまた別の場所に、家があるらしい。

一戸建ての家はどこにでもありそうな、普通の家だ。小さな庭もある。それは千冬の家と大差なかつた。

「いじりちだよー」

「……？」

束は千冬を庭へと連れて行つた。靴を脱いでいたので、置かれたままのサンダルを押借する。

庭に下りた先で、束はトントンと地面を二度、つま先で蹴つていた。そうするとどうという仕組みか、土に丸い円が描かれ、それを二つに分ける様に縦に切り込みが入り、半円になつた土がウイーンと左右に開かれていつた。

ぽつかりと、庭に出現したのは人間の子ども一人が通れるサイズの縦穴で、その内側は鉄板で覆われ梯子が設置されていた。

「さあさあ、入つて入つて」

「束、これは？」

「見てからのお楽しみだよーすつーいんだからー！」

千冬は、束に促されるままに梯子を使って穴を下りていく。穴は五メートルほどの深さで、下りた先には広い部屋があつた。

「じゃじゃーん！なんとなんど、束さんは秘密基地を作っちゃい

ましたーー！！

「秘密基地？」

「入れるのは、束さんとちーちゃんだけだよーそれ以外の人が入るうとしたら、電気がバシンッてなる仕組みだから。ま、それ以前に、入口を開けられないんだけどね」

「…………いつ作ったんだ？」

「二〇二〇くらい前かなー。束さんにかかればお茶の子そこそこ、朝飯どじいのが卵を割るより簡単にできちゃうのだよ」

「やうなのか……」

千冬は、きょりきょりと辺りを見回したり、壁となつている鉄板に手をはわしたりと、しばし部屋の中を観察して回っていた。その表情は少しばかり驚きが滲んでいて、それは束を大いに喜ばせる。

「ちーちゃん、楽しい？面白い？」

「…………まあ、少しさはな。束の考える物が凄いのは分かつていたが……実際にこいつのを見ると、驚くな」

「ふふつ、束さんが考えるのはこんなものじゃ無いよー。こんなのがただの部屋でしかないからね」

上機嫌に束は笑うと、鞄を適当に放り投げてパンッと手を打ち鳴らした。すると、何ヵ所かの部屋の床がくるりと回転し、裏返った床からテーブルやベッドといった家具が現れる。

さしそうめ、からくり屋敷というかのよう光景を田の当たりにして、千冬は僅かに目を瞠つた。

「どつ？どつ？本当は量子変換で作らつかなつて思つたんだけど、それはまた今度ね」

といつても、千冬に止められてこらちは作りすこに終わりそうだ

が。

束は千冬の手を引いて、現れたベッドにダイブする。鉄板の壁に覆われていはいるが、そこは一つの部屋だった。

「ijiはね、束さんとちーちゃんだけの、秘密基地なんだよ」

「そのようだな」

「誰も見てないし、気づかないんだよ。ijiここののは、私とちーちゃんだけ」

「……束？」

妖しげな気配に、千冬は自分の首に腕を回したまま寝転ぶ束の方に顔を向けた。

刹那、唇に押し付けられた感触にパチパチと瞬きを繰り返して、次には唇を割つて入つてくるぬるとしたそれに目を見開いた。

「ん、ふつ……」

「んつ、ちーちゃん……」

氣づけば千冬の体にのしかかる様に、束の体が上にあって。押し付けられた感触が束の唇だと、割つて入つてくるのがその舌だと、そう千冬が氣づいたのはその息が絶え絶えになつたことだった。

「っん、ふあ……はつ、ふ……」

よつやく離された唇に、千冬は新鮮な酸素を貪るよつて肩を上下させ呼吸を繰り返す。

その千冬の様子を、束は彼女の上にのしかかつたままで見下ろしていた。じつと、見つめている。

「ふ、は……束……？」

「ちーちゃん……」

見つめてくる束を、千冬はどうしたんだと首を傾げて見上げた。その頬は微かに赤く染まっている。

「……嫌がらないの？」
「何を……今を、か？」
「そう。キス……嫌じゃ、無いの？」
「……どう、なんだろうな」

嫌悪を感じたかといえば、感じず。それ以前に、今の行為に何かを感じたのかといえば、何も感じず。

ただ、幼いながらに千冬も今の束の行為の意味するところは分からぬわけで、彼女が真に求める答えが何かも分かつてはいた。

「……私には、分からないよ。束」

その結果として、千冬の出せる答えはそれだつた。告げられた答えに束は一切の感情を見せず、千冬を見つめる視線を逸らさない。そのままの体勢で口を開いた。

「束さんは、ちーちゃんが好きだよ」「みたいだな」「束さんが興味を持つたのは、ちーちゃんだけだよ」「興味……私以外には、興味が無いのか？」「無いね」

束はあつさりと、千冬以外の他を切り捨てる。それが当然のように、事実彼女にとつてはそれが当然で。

その答えを受けて、千冬は考える様に視線を辺りに彷徨わせて、

そうして束を見た。

「なんで私に興味を持つたんだ?」

「さあ、なんでだらう。何となく……運命?」

「運命か……そういうのも、あるんだな」

気づけばただ、狂おしげほどに求めていた束にとつて、なぜ千冬に興味を持ったのかは、ある意味では興味を惹かれたがそれほど重要では無く。

重要なのは、今回の前に千冬がいる事で。そして千冬が、こつして会話しながら、自分を一切否定してこない事だった。

「…………ちーちゃんは、不思議だね」

「…………束は、なんでもお見通しなのでは無かったか?」

「そうだよ。そののに、ちーちゃんは不思議なんだよ。束さんは、ちーちゃんが分からなくて不思議なんだよ」

「…………それは、そうだらうな」

「…?」

千冬は、何も難しこことなど無こよつこ駆こて、言つた。

「私は私の事をお前にそれほど、話していらないだろ?」

「…………そう、だね」

「知らないのなら、分からなくて当然なんだ。そんなに不思議に思う事でもないだらう?」

「…………じゃあ、教えてよ。ちーちゃんの事」

「いいぞ」

別に隠すことは何も無いのだと、千冬は軽く頷いた。
さつそく話そつ口を開いて、けれどそれからふ、と口を閉じて、

束に聞く。

「何から聞きたいんだ？」

「なんでもいいよ。ちーちゃんの事、たくさん知りたい」

「……と、言われてもな」

こぞ話そうとすると、何から話せばいいのか分からなくなつてしまい、千冬は少々困惑氣味に眉尻を下げた。

「じゃあ、束さんが質問してもいい？」

「ん、ああ。良いぞ」

その方が助かると、千冬は束の提案に賛成して、束の質問を待つた。束の質問は早かつた。

「ちーちゃんの好きなものは？」

「静かなところだな。自分の部屋は、静かだし一人になれて好きだ」

「嫌いなものは？」

「煩いことは嫌いだな」

「一人が好きなの？」

「ああ」

「束さんと一緒にいるのは？」

「束の傍は落ち着くから好きだぞ？」

それは、前にも言つただる、と。千冬の答えに、束はそれまでの表情を破顔させた。

無の表情から一転、いつものように笑つた束に、千冬は何となく落ち着く気分を味わいながら、そのまま投げかけられた質問に答えて行つた。

「家では何をしてるの?..」

「部屋にいるな。寝てることが多いか」

「なんで?..」

「なんで、と言われてもな.....それが、落ち着くからだ」

「ちーちゃんの親は?..」

「親?..」

束の口から飛び出したのは、彼女からは予想もつかない言葉で、千冬は思わず鸚鵡返しにそれを聞き返していた。

「束さんの親は束さんを嫌がってるナビ、ちーちゃんの親は?..
「.....やうだな」

それまですりすりと答えていた千冬の口が、止まった。

「.....」

「ちーちゃん?..」

『』惑つたよつに束が千冬に声をかける。ハッとしたよつに千冬が目を瞬かせて、それから笑みを浮かべて答えた。

「親にとつて、私はいらなくともいいござぞ」

何度も聞いてくるから、間違いないと。そんな確信を持つて千冬は答えた。

浮かんだ笑みはとても綺麗に作られて、それがあまりにも綺麗だったから、束は無性に腹立たしかった。

「ちーちゃん、また無理してゐる
「ああ、そうだな」

「否定しないね」

「嘘じやないからな」

千冬は、素直だった。束が見破ると、それを浮かべたままで肯定してみせぬべからにて。

「笑つちややだ」

「なんだ、前は笑えと書つたのに」

「無理して笑つてほしくないよ」

「マンガみたいな事を書つ」

さながら主人公のようだと、千冬はそう書いて笑みを消した。笑みが消えれば浮かぶのは無で、鋭い目つきがさらに鋭くなつたように思える。

けれど束はむしりその表情に満足して、こいつかのように入れ替わりで笑みを浮かべた。

「ちーちゃんが無理するのは、束さん嫌だよ」

「そうか」

「だから、ここでは無理、しなくていいからね」

「……束と私だけだからか?」

「そうだよ。束さんとちーちゃんだけの、秘密基地。誰にも見られない秘密の場所だよ」

「…………言つておぐが、お前と一緒にいて無理をしたつもつは無いぞ」

「知つてるよ。束さんにはなんでもお見通しー。」

当たり前のよう束が書つた。

束は千冬のすぐ横に体を寝転がせて、まるで抱き枕のよひに千冬の体を抱きしめて、耳に唇を寄せて囁くよひに書つ。

「束さんは、ち一ちゃん」念ねてうれしこよ」

「……そつか」

「束さんは、ち一ちゃんが大好きだよ」

「……知つてゐる」

ギュウッと抱きしめられて、押し付けられた少しだけ柔らかな胸に、千冬は目を閉じた。

閉じられた目から一筋、涙が伝うのを束は黙つて見ているだけだった。

束の秘密基地（後書き）

小学生、彼女たちは小学生、だからまだこころと耳は……と思つていたのに、気づけばどうして束が暴走。どうしてこうなつた。つまりこれはこの小説における一人の方角をすでに示しているということ。つまりはそういうことです。

彼女たちの日常

学校では授業を受けながら束の相手をし、放課後は束の家に招かれ彼女の部屋か、秘密基地で過ごす。

千冬の日當は、入学してから一週間でそんな風に固まっていた。もつとも、その間に早くもクラスメイトに懐かれたり、担任から眞面目で生徒たちの中心人物という評価を貰つたりしていたが。

「今日は何する？何するちーちゃん！」

「束のしたいことで良いが……ああ、そうだ

その日もまた、千冬は束の家に向かっていた。束が後ろ向きで歩きながら千冬に尋ねて、千冬は言つてから少し考え、ふと思いついた事を言つ。

「束の家の……篠ノ之神社、だったか？見てみたい

「神社？ん、いいよいよ。それじゃいこつか！」

「ああ」

それじゃあ近道、と束はくるりと方向転換をすると、脇道に入つていく。束の家と神社は近いけれど別の場所にあって、この道の方が早く着けるのを束は知つていた。

既に近くまで来ていたのもあって、方向転換から十分ほど歩くと、たくさんの木に囲まれた大きな神社が見えてきた。ただし、通ってきた道は神社の裏側に通じていたらしく、まず目に入ったのは建物の後ろ側だったが。

正面へと回り込んで、千冬はまじまじと神社を見上げる。参拝客

の姿も無く、風に揺れる木々の葉の音が静かに響いた。

「これが篠ノ之神社だよ」

「結構大きいんだな。お参りしてこくべきか……」

「ちーちゃんがそんなことする必要無いよ!」

「……神社の娘が何を言つ

「だつて興味無いもん」

あつけらかんと言い放つ束に、千冬はまあいかと思い、気まぐれに辺りを見回してみる。広い境内は見通しが良くて、神社の傍に立つまた別の大きな木造の建物に、千冬は首を傾げて指差した。

「あれは?」

「剣道の道場だよ。見る?」

「いいのか?」

「いいんじゃないかな」

それじゃあ、と千冬は束に導かれるままに道場の扉を少しだけ開けて、中を覗いてみる。

中では、千冬と同じくらいかそれ以上の子どもたちが、師範であろう男性の掛け声に合わせて竹刀を振るっていた。

男性と子どもたちの掛け声が、千冬の耳を大きく揺さぶる。それに溜息を吐いて、千冬は扉を閉めた。

「ちーちゃん?」

「……中、凄いな

「そう? 束さんはこの中を見た事無いからな~

「見てみたらどうだ?」

「いいよ、興味無いもん

「そうか

いつもと同じ束の答えに、千冬もいつものように返して。一人がそろそろ行こうかと歩き出やつとしたところで、道場の扉が大きく開かれた。

「……束、何をしている?」

「何もしてないよ。束さんはちーちゃんをお散歩してただけ」

「君は、束の……友人か?」

「はい。織斑千冬です、束ひやんと仲良くなれています」

「……」

淡々とした挨拶をする千冬に、扉を開けた男性 束の父親、柳韻はじことなく苦虫を潰したような顔をした。

「……先ほど、中を覗いているようだったが、剣道に興味があるのか」

「いえ。何をしているのかと思ったので、覗かせてもらつただけです。」迷惑をおかけしました

軽く頭を下げる、千冬はそれっきり、興味を無くしたように道場に背を向けて歩き出す。束がそれを追いかけてその手を掴み、そのまま歩き出したのを、柳韻はじっと見つめていた。

それから数日が経った頃、千冬と束は秘密基地にいた。

秘密基地は最初に比べて見違えるほどに物が増え、束の「ひづりラボ」に変わっていた。

床のあちこちに伸びる配線を避けながらベッドに辿り着いた千冬は、そこに腰かけて上機嫌でパソコンを弄る束を眺める。

束の使うパソコンは、ディスプレイもキーボードも全て空中に投影したもので、そのスペックは束曰く世界一だった。

「ね、ちーちゃん。今日は何をつくろつか！」

「束の作りたい物で良いんじやないか？お前が作るの、どれも凄いし」

「えつへへへ、ちーちゃんに褒められた～」

嬉しそうに笑う束は、話ながらもそのキーボードを打つ手を緩めていない。

束は、前々から考えていた発明品を続々と作りだしていた。といふのも、今まで全て千冬に止められていたが、お許しが出たのだ。束と千冬しか入れない、この秘密基地で。その中でなら作っても良いだらう、と。

言つておぐが、千冬は束が作るのを無理に止めていたわけでは無い。ただ、束が千冬の言葉に素直に頷いたが為に、作られていなかつただけだ。

束の発明は、世に出れば一躍注目されるものばかりだ。そうなると自然と束の周りに人が群がるのは必須。騒がしくなるのも必須。それを千冬が好まず、また千冬を第一に考える束がそれを望まなかつただけ。

見つからないと言い切れる保証があるこの空間でなら、騒がれる心配も無いからと。千冬が言い、束が頷いたから、この秘密基地は束の発明ラボと化している。

「何から作りうかな～。ちーちゃんセンサーにしてよつかなあ

「……待て、なんだそれは」

「ん？ちーちゃんを探すセンサーだよーちなみに超小型GPSはもう開発済みだから、実はいつでもどこでもちーちゃんを発見出来るんだよー！」

「ちなみに、そのGIRLはどこにある?」「

「言つたらちーちゃん、取つちゃわない?」

「どうない」

んー、と束は少しばかり歎んで見せたが、すぐにパツと笑つてっこ、と首筋を指差した。

言われた千冬はそこに指を這わせ、すると確かに薄っぺらい何かが肌に張り付いているのを見つける。

「こつ之間に……」

「ちーちゃんに抱き着いた時だよ。肌の色と同化するからまず見つけるのは不可能!」

「……」

千冬は無言で、這わせていた指に力を籠めると、パキリと押しつぶした。

「ああつー?」

「とりはしないが、壊す」

「ガガーン……そんな、ちーちゃんへのプレゼントが……」

「プレゼントならもつと平和的なものにして。こんなのがけなくたつて、私はお前の傍にいるだろ?」が

「そうだけど、でもでもー……」

「いいな?」

「……はい」

睨みと共に凄まれて、束はしょんぼりと頷ぐ。どうやらGIRLは千冬の好みでは無かつたらしい。そもそも、こつでもどこでも相手に分かる状態で、喜ぶ子どもの方が少ないだろう。

「ん~、それじゃ、今日は量子変換装置にじょひー。」

「ああ、この前言つていたやつか」

「やつだよ。いつでもどーでも鞄要いらす~」

歌うように束は言つて、タタタッとキーボードを打ち鳴らす。それと並行して、束の座る椅子から伸びた機械の手が何かを組み立て始めて、千冬はそれを眺めていた。

千冬は束のように天才的な頭脳は無く、未だに彼女の作る物の仕組みは一切分からぬ。分かるのは、束が噛み砕きに噛み砕いて単純にした説明で聞いたことのみだ。

「ふんふふ~ん」

「……楽しそうだな」

「ん~、楽しいよ~。ちーちゃんがいるからね~」

「うしてまた、一つの発明が生まれて、彼女たちの一日は終わりに近づいていく。これが彼女たちの日常だった。」

そろそろ帰る時間だと、千冬が秘密基地から出た時。普段ならばまだ道場にいる柳韻が、道着姿のまま縁側から千冬と、続いて出てきた束を見下ろしていた。

「剣道を、やつてみないか」

「…………はい?」

唐突なその提案に、千冬は彼女にしては珍しくぽかんとした顔で、何とも間の抜けた返事を返す。

柳韻は縁側から庭に下り立ち

何も履かずに裸足で

千冬に

竹刀を差し出した。

千冬は差し出された竹刀を間近に見つめ、首を傾げて不思議そうに柳韻を見上げて聞く。

「なぜ、私に？」

「……あまり、言つべき事では無いのかもしれないが、君は私の娘と同じよに思えたからだ」

「束と、同じ？私がですか？」

「ちーちゃん」と束さんが同じだと、なんか文句でもあるの？」

不機嫌を露わに千冬の隣に並んだ束が、柳韻を睨み付けた。柳韻が何とも言えない複雑な顔をして、一、二度首を横に振る。

「そうでは無い。だが、お前にも言つただろう。もつと物事に興味を持つてと」

「別に何にも興味が無い訳じゃないよ。すぐに飽きちゃうだけ」

「それがいけないと言つてているんだ。何にも興味を持たず、それを受け入れずにいるなど、決して

「どうでもいいよ」

束が、ギュッと千冬に抱き着いた。

「ちーちゃんがいるもん。他はどうでもいい」

「束……」

「興味を持てないものにどうやって興味を持つて言つの？完璧に理解できるものにそれ以上どう理解を示せつて言つの？面白くないものを面白くないとと思う事の何がいけないの？」

「だからといって、全てを拒絶するのはいけない」

「別に拒絶なんてしてないよ。ただ興味が無いから気にしないだけ」

「……」

取りつゝ島も無いとせ、このことだらう。柳韻は娘の答へに頃垂れた。

束の中には既に束なりの考えが根付いており、それが間違つていると分かつていても柳韻には正すことが出来ずにはいる。正すことが出来ないから、柳韻は束に触れる事が出来ないままでいた。

「……剣道のお話、お受けします」
「ちーちゃん……？」

重苦しこともいえる沈黙の中、千冬はそれまでの会話などまるで無かつたかのように、答えを紡いだ。それに驚いたのは束だった。

「束と私が似てゐるかどうかは、お話しするつもりはありませんが……剣道については、お教えいただけるなら、教わりたいと思つています」

「……そうか」

「なんで? なんで、ちーちゃん?」

淡々と、紡がれる言葉に柳韻は顫き、束は疑問を投げかける。千冬はそんな束を見て、なんのこと無ごように答へを告げた。

「教えてくれると喜うのなら、教わるだけだ。他意は無い」
「そうなの? やつてみたかつたんじゃないの?」
「さあ……少なくとも、誘われなければやらなかつたと思ひ」
「やつかあ……じゃあじやあ、束さんが誘つたら、ちーちゃん束さんにつき合つてくれる?」
「私の出来る事ならな」

あつやつと叫びてのける千冬に、束は約束だよーと笑みを浮かべ

た。それに顎を返した千冬に、柳韻はやはり、と内心で苦い思いを抱いていた。

「（レの子は、束と似ている……）」

誘われなければ、やらなかつた。けれど誘われたから、やる。束は誘われてもやろうとしないが、千冬は誘わればやるとこいつ。そこは決定的な違いがあつたけれど。

やると言ひながら、そこに一切の千冬の感情が無い。彼女は束同様に、他の事に興味を抱いていないのが分かつた。

「（ビリビリ、レハモ）」

笑顔で千冬に話しかける束と、それに無表情ながら答える千冬を見つめて、柳韻は竹刀を握る手に力を籠めた。

彼らたちの日常（後書き）

束につづきをつけるか、それが問題です。

束が秘密基地を作つたり、千冬が剣道を習つたり、束が発明をしまくつたり、千冬が人気者になつたりしながら、三年が経つた。束と千冬は九歳になり、七月になつて束に妹が産まれた。

「筹ちゃん」

「……デレデレだな、束」

「だつて可愛いんだよ！見てよほりー」「はいはい……」

両親への冷淡な態度がどこへ消えたのか、束はキャッキャとベビーベッドで寝転んで笑っている妹、篠ノ之箒にだらしない笑みを浮かべている。

それを呆れたように溜息を吐いて見ながら、千冬もその横に並んでベッドの中を覗き見る。伸ばされた小さな手が、束の指を握つていた。

「赤ちゃんって結構力持ちなんだね」

「そうなのか？」

「うん。だつて、ほり」

「うりー」

束は悪戯に手を上へと持ち上げて、そうすると自然と、束の指を握つていた箒の体が少しばかり持ち合がる。

なるほど、確かに力持ちだと、指にしがみ付いたままの箒に千冬は納得した。

「ちーちゃんも、もうすぐ産まれるんでしょう？」
「やつ話しているのを聞いたな。弟、らしい」

束同様、千冬にも姉弟ができる。もつとも、両親から直接言われたわけでは無く、日に日に膨らむ母親のお腹と、両親が話している内容から判断しただけなのだが。

「あ～、う～」

「……そろそろ、私は行くよ。剣道の時間だ」

「むう、最近はちーちゃんが束さんと一緒にいる時間が短くて、束さんは不満だよ」

「幕がいるだろ。終わったら寄るから、許せ」

傍らに置いてあった竹刀の刺さった鞆を持って、千冬は立ち上がる。最近の彼女は、師範と対等に渡り合つだけの力を持つていた。

それから、一ヶ月が経つた。千冬には、弟が産まれていた。

「一夏」

「……」

ベッドで眠る弟、一夏に千冬は少しばかり目を細める。

最近になつて家へと来た一夏を、千冬はよく眺めていた。可愛くて仕方が無い、とでも言おうか、束の気持ちがよく理解できた。

自分と同じ血を持つ、血を分けた家族というのは、千冬には一夏が初めてだったのかもしれない。家族と言つては、千冬と両親の間には壁があり過ぎた。

「……お前は、私が守るからな」

姉としての義務感か、それとも千冬の持つ感情ゆえか。
彼女は一夏の頬を撫でながら、誰にも見せたことの無い笑みを浮かべて呟いた。

気温も下がり、すっかり寒くなつた十一月。ぱらぱらと雪が降る
帰り道を、千冬と束は歩いていた。

「明日から冬休みだねー、ちーちゃん」
「そうだな。宿題、やらないとな」「あんなの一時間あれば終わるよ。束さんに任せなさい。」「……分からないとひむな」

束にかかれば、宿題などあつてないようなものなのだらつ。

「そつこいえば、篠ちゃんはどんな様子だ?」「可愛いよ。既に束さんの心を掴んで離さない小悪魔さんだよ。」「……小悪魔はともかく、元気みたいだな」「いつくんはどうなのさ?見たいー。」「一夏も元気だぞ。来るか?」「行く!久々ちーちゃんのお家だね」「確かにそうだな」

千冬が剣道を習っているのもあって、束の家に行くことの方が多くなつっていた。一夏見たさに何度も来たことはあったが、比率的には束の方方が圧倒的に多い。

「ただいま」

「いつくーん！ 束さんだよーーー！」

待て

「」

ぐきり、と束の首のあたりから嫌な音が鳴つた。というのも、千冬がさつそく玄関を上がるうとした束の襟首を掴んだからである。

「挨拶くらいは、しろ」

「おはようございます。」

「三、四」

「よし」

ハツと離された束が、そのままバタンと廊下に倒れ込んだ。

入ろうとすると、実力行使で止めに入っている。

倒れた束を溜息を吐きながら跨いで、千冬はそのまま一夏の眠るベッドが置いてある両親の寝室へと向かつ。

「夏」

一夏は眠つていた。その寝顔に頬を緩めて、千冬はふ、と部屋を見回して首を傾げる。

「ちーちゃん？」

見たところ 大きく変わったことは無い
けれど感じる違和感
に、千冬は鞄をその場に置いて部屋を漁り始める。

「……」

千冬は険しい顔つきで、開けたタンスの中を睨み付けていた。首を抑えながらやつて来た束が、その様子に気づいて名前を呼ぶと、タンスを閉めて振り返る。

「どうかしたの？」
「服が無くなつていた」
「服？」

開けたタンスの中身は空っぽだつた。だがさすがに、これだけの情報では束にも事態を把握することは不可能で、首を傾げるばかりだ。

千冬は寝室を出てリビングを覗いた。こちらもまた大きな変化は見られなかつたが、細かな物が無くなつているのに気付く。正体のわからない違和感の中で、千冬はテーブルに置いてある封筒を視界に収めた。

「……」

真っ白の封筒に入つていたのは、手紙だつた。

たつた一枚の手紙に目を通して、千冬は静かに目を閉じる。手紙を握る手に力が籠つて、ぐしゃりと皺が出来た。

「ちーちゃん、どうしたの？」

リビングに入ってきた束は、そんな千冬の様子に心配を露わに声をかけた。目を開けて振り返つた千冬が、手紙を握った手をだらりと下げて束を見る。

こつものように無表情で、束の良く知る彼女の表情のままだつた。

「私と一夏は、捨てられたみたいだ」

「……なにそれ」

「ああ。常々、子供もは欲しくなかつたと言つていたし……要らなくなつたんじやないか?」

それは一夏が産まれてから更に増えた、両親の陰での言葉。いつなる日が来るのを、千冬はどこかで分かつっていたのかもしない。知らず知らずに覚悟を決めていたのか、手紙に書かれた両親の言葉を読んだ後も、然したる衝撃を受ける事は無かつた。

「……ちーちゃん」

「なんだ?」

「ちーちゃんが望むなら、ちーちゃんを捨てた人たちを見つける事は出来るよ?」

「……凄いな。そんなことが出来るのか」

「束さんに出来ない事は無いよ」

「ああ、そうみたいだな。でも、必要ない」

「……いいの?」

「いなくなつた人たちよつも、これからどうやって暮らすかのほうが大事だからな。親がいないとなると、まあはどうぐべきなんだろ?」

千冬の中であつたと、全てが処理される。消えた両親に一切の感情を抱かず、興味も無く、ただ、必要となることを考えるその姿は、子どもと云つてしま、奇妙過ぎた。

「……ん?..どうかしたのか、束」

「……ちーちゃんは、泣かないんだね」

束はジッと、興味深そうに千冬を見つめている。見えないその奥を探る様な視線に、千冬は困ったように眉尻を下げた。

「……最近になって、思つんだが

「ん？」

「私はどうにも、あまり感情が動くタイプでは無いらしい」

人や物を問わず、特に興味を抱くことも無い。喜びや悲しみといった感情に、左右されることも無い。
千冬は手紙をひらひらと握りしめ、まあそんなことはどうでもいい、と呟いた。

「幸いにも、いくらかのお金は残してくれたらしくからな。すぐこの生活に困る」とは無むれつだ

「なら、どうするの？」

「さあな。両親の親戚など知らんし、このまま場合は何処か施設にでも入るんじゃないかな？」

「ええ、それは駄目だよ……」

考えながら言つた千冬に、束は慌てて首を振つた。

「ちーちゃんが遠くに行くのは、絶対駄目……」

「そうは言つてもな……」

「んむ～～～あつ、そうだーちーちゃん、家に来ればいいんだよ！」

「はあ？」

何を言ひ出すのか、と千冬が田を丸くして驚いて見せると、束はえつへんとばかりに、小学生にしては大きくなり始めている胸を張つた。

「束さんがあちーちゃんといつくんの生活を保障してあげよ。田指せヒモ生活だよ、あちーちゃん！」

「…………ヒモ生活が何かは知らんが、とりあえず却下だ。断る「ええっ、なんでなんであちーちゃん！？」

「一方的に世話になるのは嫌いだ」

とはいえ、実際問題、千冬は手に持ったままの手紙を封筒に仕舞いながら考える。

そうして、一刀両断されて嘆く束を見て、声をかけた。

「頼みたいことがあるんだが」

「なになにー？束さんなんでもするよーーー！」

「……両親の親戚、探せるか？」

「むづちゅうこー！」

束は大きく頷いて、空中にパソコンを起動させる。
とりあえず、大人を探さなければ。千冬の出した結論はそれだった。

「…………あああん」

「ん？」

「うああああああん」

「ありや、いつくん泣いてるね

「のようだな」

封筒をテーブルに投げ捨てて、千冬は一夏が眠る寝室へと向かう。覗き込んだベッドで大泣きする一夏を抱き上げて、その体を揺らしてあやし始めた。

「一夏、泣くな。ほら」

「うああああん」

「大丈夫だ、大丈夫。お姉ちゃんが、守つてやるからな」

「う……」

泣き止んだ一夏に、千冬はくすりと小さく笑った。

「お姉ちゃんは、ずっと一緒にいるからな」

抱いた温かな体を、離さないように抱きしめる。

その日、千冬の家族は一人になった。

家族、一人（後書き）

千冬の両親が蒸発したのっていつだろ？……思いつつ、一夏が誕生してすぐに消えてもらいました。

とにかく、この作品に転生者ってこるのだらうか。

パターンとしては

- 1・まともな転生者（転生物の主人公のような、下心があまりない寧ろ原作にかかるのを最初は拒否するようなタイプ）
- 2・テンプレ転生者（下心満載ハーレム願望の強い馬鹿のタイプ）
- 3・1と2両方が出る
- 4・出でずに原作キャラで頑張る

どのタイプでも、千冬と東が百合で仲いいのに変わりは無し。

1のタイプなら、観察日記にでもなりそつかなあ。なんか俺の知ってる千冬と東と違うみたいな感じです。2はづきくなります。どのタイプも楽しそうですが、さてどうするか……悩みどころですね。

参考までに、皆様の考え方を聞かせていただけると幸いです。数字だけでも、もちろんコメント有りでも喜んで！……あくまで参考までですが。

世界を変えるきっかけは

結果から言つと、千冬と十二歳になり、一夏は二十三歳になつた。束に頼んで探してもらつた親戚は、母方の叔母、千冬の母親の妹にあたる人物だつた。

どうやら姉妹仲はあまりよくなかったようで、会いに行つたはいが歓迎はされなかつた。

ただ、事情を説明して一応は、有事の際の連絡先とことことで承知してもらつた。といつよりも、千冬がそれ以上を望まなかつたとも言ひ。

どうしても大人の手が必要な場合のみだけと、何とも事務的な関係が出来上がつた。

なので、千冬と一夏は変わらず、同じ家に住んでいる。そして今、千冬は一夏を迎えて、束の家に向かつてゐる最中だつた。

「ちーちゃん、今日は晩御飯食べてくの?」といつよりも食べていくと良いと思つむ。」

「……一昨日も」「ちーちゃんになつてゐるからな。遠慮しておく」

「えへ。束さんはちーちゃんに、はい、あーんをしてもらわないと」「飯が美味しいんだよ!……」

「そうか。ならば今後はしないとしよう

「…………あれ? 可笑しいな、最近のちーちゃんの切り返しが冷たいよ?」

「気のせいだ」

じやれ合つよつた会話をしてこひがひに、束の家の田の前までやつて来る。

千冬が学校に行っている間、一夏は篠ノ家に預かってもらっていた。織斑家の事情を知った柳韻が言い出したことである。そのおかげで、赤ん坊の一夏の面倒を見てもひりひりが出来て、千冬としては安心したのも懐かしい話だ。

「お邪魔します」

「ちふゆねえ……」

千冬が玄関に入ると、待ち構えていたようごぶつかつてくる小さな子ども。受け止めた子どもを、千冬はポンポンと頭を撫でて歓迎した。

「一夏、いい子にしてたか？」

「してた！ ほーきちゃんと遊んでたよ」

「そうか。一夏と遊んでくれてありがとうな、篠ちゃん」

「ん、いえ、わたしは……」

「ほーきちゃん束さんがないなくて寂しくなった？ 束さんは篠ちゃんがいなくて寂しくて寂しくてうさぎさんだったよー」

「……束、離してやれ。篠ちゃんが苦しそうだ」

「えつ……ああ、『めんねほーきちゃん！』

「きゅう……」

力いっぱいに、ぐりぐりと抱きしめられていた篠が、束の腕の中でぐつたりとしていた。

束の篠への溺愛は止まることを知らず、未だに上昇中だ。他に興味を持たない分、興味を持った相手に注がれる感情は桁違いなのだから。

「ちふゆねえ、今日はもう帰るの？」

「ああ。道場も休みだしな……もう少し、遊んでいくか？」

「いいの？」

「私は良いぞ。篠ちゃん、一夏と遊んでもらいたいのか？」

「えつ、あ……うん」

束に抱きしめられたまま、篠は千冬の言葉に小さく頷いた。一夏がそんな少女の手を取って、勝手知ったるなんとやらの勢いでリビングに向かうのを千冬は見届ける。

「こつくんにはーれひやんとられたーーー！」

「すまんな」

駄々っ子のように喚く束に、千冬は形ばかりの謝罪をして玄関に上がった。一夏が衝突してきたのは入ってすぐだったので、まだ靴すら脱いでいなかつたのだ。

「さて、一夏がまだ遊んでいるのなら、私はどうするかな……」

「ちーちゃんはもちろん、束さんのお部屋へ『一だよーござー一人の愛の巣へーーー！』

「一夏の情操教育に悪い言葉を言つな

「ついつたあああああいーーーちーちゃん、ちーちゃんの愛が痛い、痛い痛い！！」

ガシツと束の頭を掴んだ手が、ギリギリと力を籠める。束の部屋に置いてあつた本を千冬が読んだことで会得した技だが、早くも千冬の必殺技の一つとなりつつあつた。

一騒動を起こしてから束の部屋へとやつて来て、千冬は定位位置となつているベッドに腰掛ける。束は当然のようすに千冬の隣に座つた。

「ねえ、ちーちゃん。ちーちゃんは中学、びーに行くの？」

「近いところだな。束は、進学校か？」

「ううん。ちーちゃんと同じじと！」

「……お前、頭良いだろ？」

もつたいないぞ、そう続いた千冬の言葉に、束はむつと頬を膨らませる。不満そうに千冬を見ていた。

「ちーちゃんは、束さんと離れ離れになつても良いつて言つの？」
「別に、学校が違つたぐらいでお前と友達で無くなるわけじゃないだろ？」

「それでもやなのー！ちーちゃんは束さんと一緒にいないと駄目なんだよ」

「誰が決めた」
「私が決めた」

ドサリと、千冬の体がベッドに倒れ込む。原因は、千冬の体に覆いかぶさる束だ。

そういえば前にも、こんな風に束がのしかかつて来たことがあったなど。千冬はそう他人事のように思い出していた。

「それとも、ちーちゃんは束さんと一緒にいたくないの？」
「いいや？ いれるものなら、一緒にいたいな」
「それは、どうして？」
「…………どうしてだろうつな」

ただ、一緒にいてくれるというのなら、一緒にいたいと思つ。きっと束がそれを望まなかつたなら、千冬はまた無表情でそれを見送るのだねつ。

束には、それがよく分かつた。自分は千冬が離れていくと行つたら、勝手に着いて行つてでも一緒にいたいと思つの。

「ちーちゃん、大好き」

「ん……知つている」

「ちーちゃんは？」

「さあな。少なくとも、嫌いでは無いぞ」

答えはいつも変わらず、千冬は淡々と束の問いに答えるだけだった。

いつもなら、束も元気に引き下がる。けれど今田は、いつもと違つた。

「ちーちゃんにとって、一緒にいたいのは誰？」

「……束？」

「教えて」

「…………一夏と、束だな」

大事な弟と、幼稚園からの大事な友達。一緒にいたいと思つのは、当然の事だろう。

「離れたくない？」

「ああ」

「一緒にいたい？」

「ああ」

「…………なら、一緒にいよつよ。ちーちゃん」

離さないで、離れないで、一緒にいよつよ、と。

下りてきた唇に唇を塞がれながら、千冬はその願いを受け入れたかのように、目を閉じた。

夕日でオレンジに世界が染まる頃、千冬は一夏の手を引いて帰り道を歩く。

結局、晩御飯を御馳走になることはしなかった。柳韻たちに声をかけられはしたが、またの機会にと丁重にお断りした。

「今日の夜ご飯は、何がいい？ 一夏」

「んと……ハンバーグ！」

「そうか。なら、一緒に作るうか」

「うん！」

無邪気に頷く一夏を見て、千冬の顔は自然と綻ぶ。束の前でも、他の誰かの前でもしない、一夏を見る時だけにする表情。それは、一夏の姉としての顔だった。

「篠ちゃんとは、何をして遊んでいたんだ？」

「鬼ごっこ……それから、かくれんぼと……」

何をしたのかを、一夏は事細かに千冬に話す。鬼ごっこの中には篠が転んで、泣き出したのをおまじないで泣き止ませた、だとか。とても楽しそうに話す一夏の笑顔を、千冬は穏やかな気持ちを抱えて見つめるのだった。

空に輝く星を見ながら、束は彼女にしては珍しく、ほんやりとしていた。

天才の思考が止まることは無い、といつたのは彼女だったが、そんな彼女の思考が止まる 正確には、ある一つの事柄のみに集中する事があった。

「ちーちゃん……」

織斑千冬、愛称はちーちゃん。束にとって初めて興味を持った人間で、その存在は彼女の中で大きくなっている。

「ほーきちゃんも、いつくんも好きだけど……ちーちゃんだけは、違うんだよね~」

もしもこの先、縛が束の傍を離れていくとして。束は向こうが接触を望んでいなかつたとしたら、自分から接触しに行きはしないだろ。一方的に見ているのは別として。それは一夏にも同様である。けれど、もしも、仮に、有り得ないだらうけれど、たとえば、千冬が束から離れて行き、接触を望まなかつたとして。束は、それでも接触するのだろ。千冬が望んでいなかつたとしても。

「離したくないんだよねえ」

離したくないし、離せないのだ。それほどに千冬の存在は、束の中で大きくなりすぎている。

だから、束は千冬の望まない事をしない。開発した物も、世間に発表する気にならない。

千冬が凄いと言つてくれたなら、束はそれで満足していた。

「どうしようかな~」

束が望む限り、千冬は束の傍にいるだろ。縛が切れる事は無いだろう。それならそれで、いいはずだった。

だけど、それだけでは駄目だと思つてしまつた。今の縛とはまた別の、繫がりが欲しかつた。

束と千冬、二人の繫がりが。

「…………あ」

考える束の眺める中、夜空を流れ星が光つて消えた。束はパチパチと瞬きを繰り返して、星を眺める。キラキラ光る星と、ポンと空に浮かぶ月。それら全てを視界に収めて、閃いたそれに思考が一気に加速する。

「うん、いいね。やさしくね」「

誰に言つてもなく、束は満面の笑みを浮かべて部屋を飛び出した。お風呂に向かうといつたらしい篠が、階段を飛ぶように下りてくれる姉の姿に目を丸くするのも気にせず、庭へと出ると秘密基地への扉を開く。

梯子を下りるのがもどかしくなりながら、最後の一メートルをピヨンと飛び降りて、先日作りだした球体の椅子に座った。椅子が、束の体に合わせて形を作り、彼女の後ろの背もたれ部分から、何本もの手が生える。

そうした作業用の椅子に座つた束は、すぐにパソコンを呼び出して空中に現れたキーボードを叩く。六枚のディスプレイと、六つのキーボード。それら全てを操つて、彼女はディスプレイを数式と図形で埋めていった。

「束さんが作つて、ちーちゃんが乗る。うんうん、いいね。完璧だよ」

それは、彼女が求めた繋がり。製作者を自分、使用者を千冬とした、初めての事。

「ちーちゃん専用の、すついこの作つちやおつ

そうして一人で、宇宙へ行こう。まだ誰も知らない事がたくさんある、彼女の好きな静かな場所へ。

天才は、人知れず天災へと変わる。きっかけはとても些細な願いから、けれど彼女にとつては、大きな願いから。

世界を変えるきっかけは（後書き）

束がやりそつですね。天災少女がどうするのか、ご覧あれ。

やうしてそれは作られた

「インフィニット・ストラトス？」

場所は、秘密基地。

空中に投影されたディスプレイに表示された名前を読み上げて、千冬は不思議そうに首を傾げた。

「何をする物なんだ？」

「ふつふつふ、これはね、宇宙へ行く為の物なんだよー。」

「宇宙？」

「うだよ、と束が大きく頷いた。千冬はまた、思いもよらない単語に驚きながら、ジッと別のディスプレイに表示される設計図を見つめる。

今年から中学生となつた千冬だが、やはり束が手掛ける設計図は難度が高すぎて読み取ることが出来ない。

「宇宙へ行くには、訓練が必要だと聞いたぞ？」

「大丈夫だよ。このI.Sは、宇宙空間での作業を前提としてるからね。訓練なしでも自由自在ーー！」

「…………本当に、お前は作る物が現実離れしているな」

「えつへつへー、もつと褒めて褒めて」

「凄い凄い」

ディスプレイを消して抱き着いてくる束を、千冬は受け止めて頭を撫でる。

「ねつ、ちーちゃん。完成したら、乗ってくれる?」

「いいのか?」

「もつちろん!…といつよつ、ちーちゃん専用に作るからね。ちーちゃんが乗らなきゃ意味が無いよ!」

「私、専用?」

「乗り手に合わせて、機体が成長するんだよ。だから、ちーちゃんが乗つたらそれはもうちーちゃん専用だよ!」

「それは、また……」

随分と凄いものを作ったなど。千冬はそう思いながら、束の説明を聞き続けていた。

千冬と束は、地元の中学校に進学していた。

元の小学校の近所に中学校があつたことから、持ち上がるよつてして殆どの生徒が、千冬と束も知つてゐる生徒だつた。もつとも、束の場合は一方的に知られているだけで、彼女は周りに興味が無かつたので知らなかつたが。

ただ困つたことに、千冬は入学して早々に、またもクラスの中心人物という役割を与えられてしまつた。同じ小学校の出身者が、クラスの三分の一を占めていたのが原因でもある。

「織斑さん、相談があるんだけど」

「あ、織斑。ちょっと聞きたいんだけどわ」

「織斑さん」

「織斑」

お手洗いに少し席を立つて、束から離れただけでこれである。普

段は、束の傍にいることから、千冬に話しかける者は少ない。

「ちーちゃん、相手にしなきゃいいのに」

「話しかけられてそれを無視していたら、人間、集団の中でも生きていく不可以ないぞ」

「束さんはちーちゃんがいればそれでいいのー」

特製ノートパソコンを机に置いて、束は拗ねたように言った。
空中投影のパソコンは、千冬以外の人間がいると使われない。騒
ぎになるのが目に見えているからだ。

ちなみに、千冬と束は同じクラスで、席も隣同士だ。入学前日、
クラスを確認しようとした千冬に、束がすぐに情報を教えたことが
ら、彼女が操作したと発覚している。

「束はマイペースだな」

「む……ちーちゃんだってそうでしょ？」

「そうか？」

「そうだよー」

「……そうか」

腑に落ちない、といった表情で、千冬は束の言葉を聞いていた。

「ところで束。今日もHSの調整をするのか？」

「もちろんするよー。機動性とか色々と改良したいからねー！」

「……もつと凄くなるのか」

「当然。だって束さんがちーちゃんの為に作るんだよ？あの程度で
満足するわけ無いよ」

千冬が、束にHSハイインフィニット・ストラトスへの設計図を見
せられてからとこりもの、実際に組み立てられたそれを、千冬は毎

田のよつに起動させていた。

外で試すわけにはいかないので、その為に束が秘密基地を広げた程だ。広くなつたそこで、ISを使い飛び回のを、千冬も少しばかり楽しみにしていた。

「ちーちゃんも、ノリノリだね！」

「まあ、宇宙といつのは面白そつだしな……何よつ、飛べるといつのが面白い」

「なら、今度は外で飛ばつか？」

「煩くなるから駄目だ」

「ふー」

結局は、千冬にとつて静かに過ぐせることの方が重要で。それは束も十分に承知していたけれど。

「ちーちゃん、外で飛びたくないの？」

「……飛べたら楽しい」とは思うが、わざと騒がしくなるだらう？お

前の作る物は、凄すぎるんだ」

「ちーちゃんは気にし過ぎだよ」

「束が気にしなさすぎなんだ……とりあえず、声をかけられたら返事くらいはしる」

「えー」

「いいな？」

「……ふー」

先は長老だ、と。千冬は束の反応に、小さく溜息を吐いた。

放課後、千冬と束は保育園に立ち寄る。一夏と雛も今年で五歳、

二人揃つて同じ保育園に入園したのだ。

「此—也可以——而—」

「一夏」

「ちふゆねえ！！」

- 姉さん

一夏と篠は迎えを待つていたらしく、一人とも玄関にいた。ダダッと駆け出し千冬に飛びつく一夏を追つて、篠も駆け足で追いかけてくる。

「御用」の字は、御用の御用を表す。

「ううん。簞と一緒にだったから！」

「そうか。ありがとう、**第**」

し しえ 別に

少しばかり頬を染めて、筈が首を振る。

相も変わらず束の筈へのテレ度はMAXだった。若干、筈が引いている。

千冬はそんな束に呆れた表情を見せながら、一夏の手を取つて保育園を後にする。置いて行かれかけた束が、騒ぎながら追いかけてきた。

「待つて待つてちーちゃん！！

「煩い、黙れ」

「束さんを置いて行かないでほしいんだよ！あ、それとも篠ちゃん

にじえらしい？大丈夫安心していいよ、何せ束さんのちーちゃんへの愛情は規格外」

「だ、ま、れ」

「ああ、あれれ？ちーちゃんの愛が痛いよ？束さんの頭パーンってしそうだよ？」

「させる気だからな」

「ちーちゃんの愛がいたたたつ……」

「ふんっ……」

「ふぎや」

ガシッと頭を掴みアイアンクロー。千冬の束への使用率がダントンである。

地面に落とされそのまま悶える束を、一夏と筹がおー、と眺めている。毎度毎度見ている光景なので、一人とも慣れ切っていた。

「さて、馬鹿は放つておいて帰るか

「ちふゆねえ、今日は仕事は？」

「休みだ。一緒にいられるぞ、一夏」

「やつた！」

千冬はほほ毎日、生活費を稼ぐために働きに出でている。それは一夏も知つての事だ。

夜を一人で過ごす事が多くなってしまった一夏にとって、千冬が休みで一緒にいられるのはとても嬉しい事だった。

「今日は久々に、私がご飯を作り」

「本当！？」

「ああ」

「へへつ、やつた！」

「う～、いーないーな。いいな～いつくん。ちーちゃんの手料理束

さんも食べたい！！」

「来るなよ」

「あれ？なんでバレタの？ちーちゃんエスパー？」

「さあな」

やはり、乗り込むつもりだったらしい。先手を打たれて、束がむうつと頬を膨らませる。

一夏と篝は、頭上で飛び交う二人の会話に、ふと顔を見合させて首を傾げた。それは一人だけが気づいた違いだった。

「あ、織斑さん！」

「…………？」

なぜか後ろから名前を呼ばれて、千冬は首を傾げつつ振り返る。後ろを歩いていた束の向こうで、同じ制服を着た少女が三人、走り寄つてくるのが見えた。

「奇遇だね、織斑さん」

「ああ」

「織斑さんたち、今帰り？」

「その子、織斑さんの弟？」

「…………ああ、そうだが……私に、何か用事か？」

束の横を回つて来た三人に、千冬は少しばかり体をずらす。一夏が背中に隠れた。

自分を隠した背中を見上げて、一夏はパチパチと瞬き。篝もまた、先ほどまでの楽しそうな表情とは打って変わって無表情の束に、不安そうに瞳を揺らす。

「（まだ）」

「（姉さん、やじったの？）」

子どもは、時に大人よりも敏感に、他人の心を察する事がある。二人は自分の姉たちが、自分たちといふ時と全く違う態度で、田の前の少女たちに対応している事に、不思議な思いを抱いた。

「えつと、用事つていうか……」

「あの、よかつたら一緒に帰らない？」

「私たちも、帰りこっちだから……」

「ああ……」

ようやく少女たちの目的が分かつて、千冬はぱりりと束と、背後の一夏と幕を見る。

「悪いが、弟たちもいるのでな。遠慮させてくれ」

「そ、そつか」

「その、『めんね？』

断られた少女たちが、それくたと退散する。それを見送ることも無く、千冬は一夏に向き直つて小さく笑つた。

「さて、帰らうか」

「ちーちゃんちーちゃん、束さんもちーちゃんの手料理食べたいよ

――――

「また今度な」

「えつ、本当？今度作ってくれるの？」

「……」

「あれ？なんでそこで黙つちやつつの？ねえねえねえ

「煩い、黙れ」

どにか柔らかくなつた千冬の聲音と、明らかに変わつた束の表情。

一夏と篠は顔を見合させて、そんな姉たちの変化に首を傾げるの
だった。

「なあ、一夏」

「んん?」

「姉ちゃんはびっくりして、あんな顔をするんだろ?」

千冬と束の後ろを歩きながら、篠は先ほど姉の変化について首
を傾げていた。

「さあな~。でも、ちふゅねえだつて、なんか違つたぞ?」

「……たしかに」

「それに、束さんと話してゐ時のちふゅねえ、俺と話してゐ時とビ
つか違う」

「やうなのか?」

「うん……でも、よくわからんねえよ

「私もだ」

一人には未だ、自分たちの姉が何を思つのか分からず。

一夏は束にじやれつかれている千冬が、自分に向けるような笑み
を一切浮かべない事に氣づきながら、変わらず首を傾げていた。

「なんでだらうなあ

「なぜだらうな

一人が答えに辿り着くのは、まだ先のようだつた。

もうじてそれは作られた（後書き）

千冬と束ばかりが出るので、その他にに対する彼女たちの反応がなかなか書けない……。ついに作られたエジ。束と千冬がどうなるのか……どうなるのでしょうか。

家族仲は非常に良好

「…………ん、うひ」

「くか～……」

ある日曜日の事。千冬は抱き枕よろしく抱きしめていた一夏をそのままに、目を覚ました。

一夏が赤ん坊の時から一緒に寝ていたのがそのまま続いて、現在も同じベッドで一緒に寝る毎日だ。冬場は温かくて良いくらい。

「…………」

無言でベッドヘッドに置かれた目覚まし時計を見る。七時少し前だ。

今日は珍しく、学校と仕事の休みが被つていた。それを知った一夏がはしゃいだのが昨日の事だ。

「…………起きるか」

それはともかく、朝食を作らねばと。千冬はそっとベッドから抜け出ると、眠り続けたままの一夏の頭をそりつと撫でて、キッチンへと向かった。

一夏が目を覚ましたのは、それから十五分後の事だった。何やら自分を包んでいた温もりが減った気がしながら目を開けると、昨日

の話では今日は休みだと言っていた姉がいない。

驚いた一夏は飛び起きて、バタバタと足音を立てながらリビングへと飛び込み、物音に気付いて姉の名前を叫びながらキッチンへと飛び込んだ。

「千冬ねえ！」

「おはよー、一夏。どうした？ そんなに慌てて」

飛び込んできた一夏を、千冬は顔だけ振り返って首を傾げる。朝食作りの最中だったようすで、野菜や卵といった材料がキッチンに並んでいた。

一夏はそれらを確認すると、ぶんぶんと大きく首を振つて、慌てていた自分を少し恥ずかしく思いながら千冬に答えた。

「な、なんでもない。おはよー、千冬ねえ」

「もうすぐ出来るからな。顔を洗つて来い。あと、着替えもな」

「うん」

とたとたと、飛び込んできた時とは反対に大人しい足音を立てながら、一夏はキッチンを出て行つた。

千冬は止まつていた朝食作りを再開し、出来上がつたものを盛り付けてテーブルに並べる。

箸まで並べ終えたところで、着替えを終えた一夏が戻ってきた。目を輝かせて並んだ朝食を見る一夏に笑いながら、千冬は椅子に座り言つ。

「さ、食べるか」

「うん！ いただきますー！」

「いただきます」

嬉しそうに食べ始める一夏を見つめながら、千冬もまた朝食を食べ進めて行った。

朝食を食べ終え、後片付けは一夏と一緒に終わらせて、千冬はリビングのソファーアに座って考える。

「千冬ねえ、どうかした？」

「ん……いや」

テレビのリモコンを使ってチャンネルを弄っていた一夏が、何やら考え込む千冬に声をかけた。

時刻は八時過ぎ。日曜日放送のアニメのオープニングを聞きながら、千冬は一夏に尋ねた。

「せっかくの休みだし、どこが出かけるか？」

「え、どこに？」

「そ、う、だな……一夏はどこが良い？」

「俺は千冬ねえと一緒に暮らすんだ！」

「……」

一夏の回答に黙り込んで、千冬は頭を搔ませる。

「（遊園地とか、動物園は、金がな……どうしたもんか）」

生活こそできているが、基本は貧乏な織斑家の財布事情。日頃、一人で寂しい思いをさせている一夏を喜ばせてやりたいと思つても、なかなかいい考えが浮かばず千冬は困り果てた。

「……まあ、一夏。本当に行きたい場所」

「ちーちゃん~~~~~ん……」

「無いのか?」

「んー、だつて、千冬ねえと一緒にならびにでも楽しこし」

「やうか……なり、どじが」

「ちーちゃん~~~~~ん……」

「良いだらうな……」

そんな時、ピンポンとこう音が響いた。それに気がついて千冬が立ち上がり、つられるようにして一夏も立ち上がり、一人揃って玄関に向かつ。

扉を開けた先に立っていたのは、簞と束だった。

「おはよー簞」

「お、おはよー、一夏。おはよーわこます、千冬さん」

「ああ、おはよー。遊びに来たのか?」

「あ、えっと……遊びに来た、といこますか……」

「やあやあちーちゃんーおはよーちーちゃんーといあえず朝の挨拶に口づけといこいつかーね、ね、ね……」

ちりり、と簞が戸惑いがちに視線をやつた先では、今にも千冬に飛びつきやうな束がいた。というよりも、既に飛びついとしたのを、千冬に顔面を押されられて止められているのだが。

「とりあえず入るといー」

「はー、お邪魔します」

「お邪魔しまーす……あれ、ちーちゃんちーちゃんーなんで束さんだけ扉閉めちやうの?まだ束さんが中に入つてないよ?なんで鍵閉めちやうの?ちーちゃんちーちゃんかーちゃんかーちゃん」

「近所迷惑だ、やめぬ」

箒が入り、束が入る直前で閉められた扉を前に騒いでいた束だが、千冬が力いっぱいに押し開いた扉に弾き飛ばされて沈黙。千冬は仕方なしに、顔を赤くして倒れる束を家の中に引きずり込んで、引き気味の箒と田を丸くする一夏をリビングに行かせた。

「で、箒は大方お前が無理やり連れて来たんだろうが……何の用だ？ 束」

「遊園地行こつよ、ちーちゃん！..」

廊下に投げ捨てられた束がガバッと起き上がり、千冬に抱き着いた。口づけは諦めてハグにしたらしい。

とりあえず抱きしめられたまま、千冬は束の言葉に首を傾げて見せた。

「遊園地？」

「そうだよ！ 実はね、昨日商店街でくじ引きがあつたんだよ

「ああ、そんなのもあつたな」

「それでなんと！ 箒ちゃんが特賞の遊園地フリー・パスを当てたんだよ！」

「箒がか。それは凄いな」

「そうでしょ？ 憂いよね流石箒ちゃんだよね可愛いは正義だよね。つてなわけで、遊園地行こつよちーちゃん！..」

「……経緯は分かった。とりあえず、一夏にも話さないとな

束をくつつけたまま千冬が話しに行つた時には、既に一夏は箒から話しかけた後だつた。

行きたそうにしている子ども一人を前に、首を振るつもりなど毛頭なかつた千冬は、すぐに準備に取り掛かることになる。

そんな経緯の元、やつて来た遊園地。新しくできたばかりらしいそこは、日曜日といふことも相俟つてたくさんの人で溢れていた。

「おお、ちーちゃんの眉間の皺がいつもの五割増しだよ」

「……久々にいつも煩い場所に来たからな」

学校という人の集まる空間で慣れはしたものの、未だにこうした騒がしさが嫌いな千冬であった。

「千冬ねえ、どちら乗る!？」

「お前と篠で決める。ああ、はしゃぎ過ぎてはぐれるなよ」

「分かった! 行こうぜ、篠!…」

「あ、ああ…！」

先導するよつに歩き出した一夏と篠を追つて、千冬と束も人混みを進む。小さな二人を見逃さない様にしなければならず、大変な道のりであった。ちなみに、束は常に千冬の腕と自分の腕を組ませていたので、はぐれる心配は無い。

「千冬ねえ、束さん。これ乗ろ!」

「おお~、ジエットコースターとは、いつくん王道だね

「う~ん……」

乗る気満々の一夏の隣で、篠がそれを見上げて小さく呻く。その顔は心なしか責めていた。

「…………恐いか? 篠」

「ち、千冬さん……う、はい…」

「ふむ……」

千冬は少しばかり考えて、不意にジユックトコースターを見た。二人掛けの席で八席。コースも一回転があつたりと、なかなかに入りがありそうだ。

「……一夏」

「ん? なに、千冬ねえ」

「篠が恐いらしい。お前、乗るときに手でも繋いでやれ」

「ち、千冬さん! ?」

千冬が言つた途端に、ボンツと篠の顔が真っ赤に染まる。一夏が目を丸くして篠を見て、首を傾げた。

「篠、恐いのか?」

「うつ……!」、「恐くなど無い!」

「んー、そつか? ま、いいや」

「い、一夏! ?」

ギュッと、体の前で組まれていた手を取つて、一夏はジユックトコースターの列に並んだ。それに慌てたように声をあげた篠を、不思議そうに見る。

「なんだよ、どうかしたのか?」

「あ、いや、あのその……て、手を……」

「手?」

「篠」

握られた手と一夏を交互に見て、何事か言おうとする篠に、千冬はポンツと軽く頭に手を置いて制した。

「一夏、離すなよ」

「へ・ひん・」

「あう……」

「……」

更に強く握られた手にギヤギヤする篠戸、千冬は小さく笑った。

「あはは、篠ちゃん温れてるね~」

「やのよつだな

一夏に笑いかけられて、じぶりもじぶりに答えるその様子は、恋する少女そのもの。はたから見ると明らかにその姿を、束は千冬に抱き着いたままで満足そうに眺めていた。

「篠ちやんはこいつくんのお嫁さんで決定だねー」

「ああ、どうだうな」

「むう……ひーちゃんだつて、その方が良いでしょ~」

「それは、まあそうだな」

束は当然ながら、千冬も一人を見て満更でもなさそうに笑っている。見守る瞳は細められ、その笑みはとても優しげだった。

「…………ひーちゃん

「ん?」

いつも無表情で、子どものように口に類を髣りませた。束はその変化で、子どものように笑っていた。

「な～んで、束さんには笑つてくれないのや～」

「なんで、と言われてもな」

「ふーふーふー」

「……煩い、黙れ」

「ふわわや」

溜息と同時に、首に回っていた手を解いてその体を地面上に落とす。潰れたような声があがつた。

「（……笑えと言われてもな）」

一夏を見て笑うのは、愛する弟だから。篠もまた、束の妹といいうことで、また一夏の友達もあるから、妹のように思えて。だから笑うけれど。

他人に向けるような、上辺だけの笑みを浮かべるところなら、浮かべられたけれど。束はその誰とも違う。ある意味では、千冬の中の唯一の存在だった。

「つづく、ちーちゃんの愛情は今日もまた過激だね」

「嬉しいだろ？」

「もつちろんーちーちゃんの愛はこいつでも大歓迎ーー」

バツと両手を広げる束を呆れたように見やつて、千冬はそれに背を向けて列に並ぶのだった。

一頻り遊び終えて、もつそろそろ日が沈みだしそうな頃。
一夏は遊園地を周る間、殆ど篠の手を握ったままだったし（千冬

が、迷子になると困ると言つたのも原因である）、束は千冬に向つたままだつた。

そんな彼女たちが、最後に乗ることにしたのが

「早く来ねえかな～」

「そんなに慌てずとも、すぐに来るわ」

そんな風に話しながら、一夏と篠が見上げているのは、観覧車。ゆっくりとした速度で回る大きなそれは、遊園地の定番の一つかもしれない。

「……そうだ。ねえ、いつくん」

「ん？」

「せつかぐだし、篠ちゃんと一緒に乗つたら？」

「ふえつ、姉さんー？」

何やら思付いたらしく束が、一夏にそう提案して。篠は突然の姉の言葉に驚きを隠せない。

「いいでしょ？ ね、そうしょ。やつあるべきだよ」

「んー、でも、千冬ねえは？」

「ちーちゃんは私と乗るから良いんだよ～。ねえ、ちーちゃん」

「……そういう事らしい。一夏、篠と楽しんで來い」

「……千冬ねえがそう言つなり、まあ、良いけど……」

頷きはするも、決して不満が無いわけでは無いらしく、唇を尖らせてムッとした顔をしている。

意外と早く順番が回つて来て、千冬は先に乗り込む一夏の頭を軽く撫でてやつてから、それを見送つた。

そして、今度は千冬と束が観覧車に乗り込む。ガシャンと閉め

られた扉と、一人つきりとなつた空間に、束が満面の笑みで千冬の対面に座っていた。

「んつふふ～、ちーちゃんといつつきり！」

「……お前、これを狙つていただる」

「まあね！いつくんと篠ちゃんと一緒に良いけど、ちーちゃんと二人つきりの方が束さんとしては超ハッピー……」

「まったく、お前は……」

どこまでも自分中心な束に、毎度ながら溜息は禁じ得ない。ある意味、束の前で最も多い千冬の感情表現だった。

「まあまあ、良いじゃないちーちゃん。せっかくだし」の「一人つきりの密室空間でとくと二人の愛を確かめ合おうよ！手始めにハグからね！」

「……はいはい」

抱き留めるのも慣れたもの。そのまま眺めた窓の外は、綺麗な夕焼けが広がっていた。

「 束」

「ん？なんだいちーちゃん」

「今日は、誘ってくれてありがとうな」

一夏も楽しそうだつた、と。千冬はそう感謝を口にする。それに呆けたような顔をした束だつたが、すぐに感激したように頬を染めて千冬に抱き着く腕に力を籠める。尻尾があれば切れんばかりに振られている事だろう。

「いいよいよ！もうその言葉だけで束さん溺死寸前、ちーちゃん

の愛は底が見えないよ……」

「またお前は、いつも訳の分からぬことを言つたな」

少しばかり苦しく感じながら、千冬は言つて、束の体を僅かに離されさせる。

そうして、もう一度抱き着かんとしてきた束の唇に、自らの唇を寄せた。

「…………！」

「んつ…………自分からすると、結構恥ずかしいものだな」

すぐに離れた唇だったが、千冬は微かに頬を染めて束から視線を逸らす。

「いつもは、お前からだからな……礼だ。たまには私から

「ちーちゃん……！」

「っんん……！」

感極まった声と共に下りてくる唇が、またも千冬の唇を塞いだ。くちゅりと音が響いたのは、千冬の唇を割つて入ってきた舌のせいだろう。

逃げる隙も無く絡めとられた舌に、千冬は強く目を閉じたまま翻弄され続ける。小さな空間に響く水音が、やけに耳を刺激した。やがて息が限界に達して、千冬は束の肩をぐいっと押し退けた。解放された途端に、苦しげに息を吐き出し、深く吸う。

「つは、ふ……」

酸素不足でくつたりと力が抜けた体を椅子に預けて、目を開けた先で間近に迫つている束の顔に、また目を閉じた。

下りてくる唇を千尋は受け入れ、寄せられた温もりに心地よさを感じていた。

家族仲は非常に良好（後書き）

一夏と篠、仲がいいですね。千冬と束は相変わらず～それとも少し進展？

白騎士、完成

束がＩＳを開発してから、千冬が試運転をし、調整を繰り返す日々。早くも一年が経っていた。

中学一年生になったある日、篠の家で遊ぶ一夏を置いて、千冬は秘密基地に下りていた。

「完成したんだよ、ちーちゃん！！」

「完成……？」

共に秘密基地に下りた束が、指差した先には待機状態のＩＳ。

一年間調整を繰り返し、文字通り千冬専用となるようされたＩＳだ。見た目には、普段通りに見える。

「今までのは、未完成だったと言う事か？」

「そういうわけじゃないけど、コアの最終調整をしたんだよ。まあ、乗つてみるのが手っ取り早いかな？ってなわけで、ちーちゃんレッツトライ！！」

「……ふむ」

百聞は一見にしかず、とも言つかと。千冬は束に押されるままにＩＳの前に立ち、いつものように起動させる。

纏うまではほんの一瞬。瞬き一つの後に、千冬は束の言葉の意味を理解した。

「これは、なるほど……」

「ね？ ね？ ゼンツゼン違うでしょ？」

「ああ」

生身のように、H.Uが自在に動く。軽く飛んでみようと思えば、ふわりと浮いた体が高く飛び、天井すれすれまで一気に昇る。慌てて急停止をして、一度考えてからも「一度、飛ぼうとした。今度は思つた通り、飛ぶ」ことが出来た。

「反応が、今までと違うな。驚いた」

「今までのデータをもとに、一切の無駄を省いて効率よく動ける様にしたからね。反応速度その他もう段違いにレベルアップやつたぜブイ！ちなみに、それはまだ初期化中だからね。後で最適化処理もしちゃうからね」

束の前に降り立つた千冬の言葉に、得意げな笑みが返つてくる。これでもまだ、完全では無かつたらしい。

千冬はそれを聞きながら、展開してみた新たに増えたリストに、知らないもの基、物騒な項目を発見して首を傾げた。

「H.Uの、近接ブレードといつのは？といつよりも、現在展開可能武器一覧といつのは……」

「せつかくだから、H.U専用の武器も作つてみましたー」

「……馬鹿かお前は」

「馬鹿じやないよー天才束さんだよーーー」

「そう答える時点で馬鹿だ」

ただでさえ現存兵器を上回るスペックを持ちながら、専用の武器など持つてしまえば。

「世界征服でもするつもりか？」

「そんなの興味ないよ。束さんはただ、ちーちゃんと一緒に宇宙に

「……みたいだけ」

「……難しいだろ、それは」

田線まで上げた工事の手を見て、千冬は田を組めた。

「これが見つかれば、世間は大騒ぎになるんじゃないのか？」

「かもね。でも、どうだっていいよ、そんなの」

「……騒ぎになるのが分かつて、外に出す気にはならんよ。束」

「ちーちゃんは、煩いのが本当に嫌いなんだねえ」

「そりやな」

静かに越した事はないと言つのが、千冬の根本的な思考。少なからず、工事で外を飛べたらといつ思考は無いわけでは無いが、その誘惑も、千冬の根底を成す思考には敵わない。

だから、騒ぎになると分かつたまま、これを外に、世間に出す気は千冬には無かつた。遠くで騒ぎになるならまだしも、自分がその中心地點に持つて行かれると分かつているなら、尚更だ。

「じゃあさ、世間に認められたら、一緒に宇宙に行ってくれるの？」

「まあ、騒ぎにならないならな」

「なら、やうしよう」

初期化を終えた工事を前に、束が上機嫌に笑っていた。

その後、学校にて。千冬は不機嫌な束と共にいる。

「まさか世界がここまで馬鹿だったとは思わなかつたよ」

「私もお前がそこまで馬鹿だったとは思わなかつたな」

場所は屋上。昼休みの時間、立ち入り禁止の屋上は学校で最も静かな空間だ。ちなみに、なぜ一人が入れるのかといえば、束が力ギを開けたからに他ならない。

「認めさせて IRS で宇宙に行こうと思つただけなのに」

「現存兵器を上回る代物を、認める筈がないだろう」

「目の前に出された現実を認めないのが馬鹿だつて言つんだよ。神様は信じて天才束さんを信じないなんておかしいね。あんなに丁寧に説明してあげたのにさ」

「…………丁寧に説明したから、余計に悪かつたんじゃないのか？」

「えへ、いかに IRS のスペックが高いかを教えてあげただけだよ？」

それが悪いと言つんだ。繰り返された言葉に束は不満げに頬を膨らませるだけだった。

何があつたのかといえば、束が IRS を政府やら NASA やらに公表した。束の考えでは、ここで認めさせて堂々と千冬と宇宙に行こう、といつたものだつたのだが。

当然ながら、どちらともに束の公表した IRS を一蹴。その対応に束が不満を持ち現在に至る。

「ま、認めないなら勝手に行くけどね。白騎士にステルス機能もつけよう!」「

「…………白騎士?」

「あれ、言つてなかつたっけ?あの IRS の名前だよ」

「ふむ。白騎士というのか……」

確かに、最適化処理まで終えたあの IRS には、相応しい名前かもしれなかつた。

真っ白のその機体は、まるで中世の鎧のようなフォルムだつたか

「ステルスつけて、ついでに武器も追加しちゃおつか。宇宙は何があるか分からぬからね~」

「……頼むから、また騒ぎになるような無茶はするなよ?」

「しないよー。というより、わざわざ世間に認めさせなくても、最初からいづすればよかつたね。ぶいぶい」

「……はあ」

さっきまでの不機嫌はどこへやら。早くも思考を切り替えている束に、千冬は毎度ながら溜息を吐いた。

次に乗るとき、あのヒロ(白騎士)がどうなっているのか、僅かながら不安を抱きながら。

「 ただいま

静かに扉を開けて、千冬は暗い玄関で小さく告げた。

仕事が遅くなり、帰つてこれたのは日付が変わる直前だ。家中の電気が消えており、案の定だが一夏は既に寝た後だった。リビングに入り電気をつける。テーブルに並ぶのは、ラップのかかつた食事。

「 ……」

軽めに作られた食事なのは、千冬の食生活を考慮しての事か。ストンと椅子に座つて、千冬は冷めた食事にそのまま箸を伸ばした。

「ん……美味しいな」

誰にともなく呟く。思つのは、一階の寝室で眠る一夏の事だ。

小学生に上がった一夏は、笄と同じクラスになれたらしい。最近になって、アニメの影響か少し口が悪くなりつつある一夏だが、千冬にすれば可愛らしい甘えん坊のままだ。

千冬も笄も剣道をやっていることから、自分も一緒にになってやり始めたが、筋は良い。続けて行けば高い実力を持つことが出来るだろう。

ただ、変わらず夜や朝を一人で迎えさせることが多いのは、千冬にとって心苦しい事だった。

「…………だんだんと家事の腕が上がっているのも、複雑だな……」

料理、掃除、洗濯と。幼いうちから主夫のスキルを身に着けていく一夏に、姉として少々複雑な心持となりながら、千冬は食べ終えた食器を洗ってしまう。

それから向かったのは、一夏が眠る寝室。静かに開けた扉を、これまで静かに閉めて。千冬はベッドの傍らに膝をついて、眠る一夏に頬を緩めた。

「ただいま、一夏」

返事は無い。よく眠っているようだ。

シャワーは明日の朝にして、自分も眠りてしまおうかと。千冬は考えて、タンスから引っ張り出したシャツに着替えてベッドに潜り込んだ。

すぐ横の温もりを心地よく感じながら、そつと一夏の髪に指を通して。何度もそうしていれば、疲れなどすぐに吹っ飛んだ。

「…………」飯、美味しかったぞ。ありがとうな

聞こえてはいないだらうと思つても、口をついた感謝の言葉。明日の朝にもう一度、いう事になりそうだ。

やがて一夏の髪に触れていた手を離して、それにしても、と思つ。まさか束が、ISを公表するとは思いもしなかつた、と。

「（私のせい、か）」

束がISを開発したのは、千冬と宇宙に行きたかったから。そしてISを公表したのは、認められていなければ騒ぎになるといつた千冬の言葉から、認めさせようとしたから。

「（まあ、これ以上は無いだろ）」「

束の思考は既に、世間に認めさせんのを放棄している。今は絶賛、ステルス機能でもつてこゝそり勝手に宇宙へ行く算段だ。

千冬としてはそれもどうかと思うが、何よりも騒ぎにならなければそれで良かった。

ただ、一夏と、篠と、そして束と。一緒にいられたなら、それで満足だった。

「（……一夏が婿に行くとなると、寂しいがな）」

それはまだどれだけ先の未来か、分からぬいけれど思つてしまつて寂しくなる。妹のよつて思つてゐる篠に対しても、それは同じだつた。

「（いつも、一夏と篠がくつ付けば、寂しくないか……？）」

篠の一夏への恋心は、おそらく疑う余地も無い。いつも、このま

まづ付いてくれればここのではと、千冬は本氣で考え始めた。

「…………まあ、まだ先の話か」

思わず声に出して思考を停止せしむ、千冬は軽く目を閉じる。なんとなく、一夏と篠の事を考へると、束の事まで頭に浮かんできて。向けられた笑顔を思へ起いすと、心が落ち着いた。

「（一夏や篠とは違うな、あこつか）」

全身全霊で、千冬への好意を示す束。軽くあしらしながら、それがとても嬉しく感じるのは、どうしてか。

一夏や篠に対する感情とは別の、その感情が束に向けられているのみ、詠づいていた。

「（でも、まだ……）」

言葉にするのは恐いじへ、受け止めるだけで。

今まま、変わらず束の傍にいたいと、そつぽいのは千冬が、臆病だったからで。

「（…………束）」

求められるまま、求めても良いのかと。千冬は問いかながら、眠りに落ちた。

白騎士、既成（後書き）

ついに完全に完成したHii。いいなあ」とやうですが。
千冬と一夏は田舎せ仲良し姉弟です。

緊急非常事態は、突然に

「…………おや～？」

田曜田、秘密基地でせつせと新たな技術の開発に勤しんでいた束は、自動で表示されたディスプレイに首を傾げた。

「ん～、これは大変だね。やつぱいね。まつざいね。日本の危機だね」

というわけでちーちゃんど。束はベッドに放置されていた携帯電話に飛びついた。そのままホール、四回ほど鳴ったところで、はい、と千冬が電話に出た。

「あ、ちーちゃんちーちゃん、大変だよ～、やつぱいよ～」

『とりあえず、お前の口調から危機感が全く感じられないんだが』

「あ、そう？まあ束さん的には日本がどうなろうと関係ないからね。ちーちゃんと篠ちゃんといつくんが無事ならそれでオッケー！この際だから眞で国外に移住しちゃおうか？」

『…………よく分からんが、何があつたのか手短に説明しない』

「んーとね、まあ簡単に一言で言つちやうと～」

ベッドにダイブした体勢のまま、パタパタと足を揺らしながら束は言った。

「日本にミサイルが約一先発、発射されたみたい」

ガタツ、と落ちた音が電話口から聞こえた。それから突然の無音、束は慌てて呼びかける。

「ちーちゃんどうしたの？ どうか痛いの？ 具合悪いの？」

音の正体は驚きのあまり千冬が携帯を落としたことだったのだが、束は全く見当違ひな方向の心配をしていた。

電話の後、千冬は急いで秘密基地にやつて来た。そこでは束が椅子に座つて、六つのキー・ボードを打ち鳴らしている最中だつた。

「いらっしゃい、ちーちゃん」

「ああ……それで、いつたい何がどうなつてる？あの説明だけでは、危険だと言う事しか分からん」

「ん~、どうやらね、束さんの公表したIISを、危険だーつて思つた人がいるみたいなんだよ」

「……どういう事だ？」

大雑把すぎる説明に、千冬は顔を顰めて更に聞き返す。

「なんかね、公表した人間以外に何人かがIISの存在を知つたみたいでね。その人たちが、日本を射程圏内にするミサイルを所持する国の軍にそれぞれハッキングして、一斉にどーんと発射したみたいだよ。あれだね、テロつてやつだよ」

「……随分と大規模な……というよりも、本当に危ないな。大丈夫なのかな？」

「大丈夫じゃないね~。ほら」

ひょい、と束が軽く手を動かすと、新たに出現したディスプレイから映像と音声が流れる。

どうやら日本政府も事態に気づいているらしく、着弾地と思われる場所からの住民の避難を行っているらしい。

「親切な事に、どいつもこいつもミサイルの狙いを国益に定めてるみたいだから、避難も楽で良いね。あ、ちなみにハッキングしたどこの人たちは、みんな束さんが居場所をバラしてあげたからね。そろそろ捕まってる頃じゃないかな~」

「それでさっきから、ずっとカタカタやってたのか」

「それもあるけど、他にもね。でも、ちーちゃん、どうある?」

いつものように笑いながら、束が首を傾げて問いかける。問われて、千冬はアナウンサーの切羽詰まった声を聞きながら、頭を伏せた。

「被害無しでこの状況を開拓するには、どうすればいい?」「

「まず言つちやうと、軍隊が出ても対処できる事じゃ無いよ。一斉

に狙われちゃったんだもん、今の兵器で迎撃しきるのは無理

「なら、それ以外だつたら?」

「白騎士なら、出来るよ

既存の兵器を上回るスペックを持った、E.S.。その力を持つすれば、ミサイルの迎撃も遺つて退けるだらつ。

「やつちやう?ちーちゃん

「やるしか無いだらつ

やりなれば日本を見捨てるも同義。それはつまり、千冬たちの住む国を見捨てるということだ。

もつとも、彼女にとつてそれ以上に重要な事があるようだが。

「万が一、一夏たちに何か被害が出るような事があつたら、許せんからな」

「うんうん、そうだねそつだよね。それならさつそく、行ってみようか！」

束はディスプレイをそのままに、椅子から飛び降り待機状態の白騎士の前に立つ。新たに現れたディスプレイに表示されるのは白騎士のスペックで、千冬も束の後ろからそれを確認する。

「新たにステルス機能と、遠距離用に大型荷電粒子砲……ぶつちやけレーザー？ それも搭載してるよ。粒子砲は試作型だけど、ミサイル打ち落とすのくらい軽い軽いお茶の子さいさいだよ！」

「そうか……近接ブレードと、遠距離レーザーだな。分かった」

「直撃しても無問題だからね。シールドバリアーも絶対防御も展開されるから、ミサイル如きでちーちゃんに傷つけるのは絶対に無理」「そこは信用するぞ。さすがに、死にたくは無い」

「死なせないよ。死なせるようなものに、ちーちゃんを乗せるわけ無いもん」

エネルギー や武器の状態の確認をして、束はディスプレイを閉じる。全て良好、何の問題も無い。

千冬は白騎士に体を預ける様に寄りかかり、装着する。ステルスマード、と表示される項目が新たにあつた。

「問題は無い？ちーちゃん」

「大丈夫だ。ミサイル到達まで、あとどれくらいだ？」

「一番早いので、十五分後だよ」

「なら、急いで行った方が良いな」

腕を動かしたり、視界を確認したりと一通りの動作を確認して、千冬は言った。のんびりしていられる時間は、もう残っていないようだった。

「ふふつ、ちーちゃんつてばやつぱりす”いね！」
「私からすれば、」うも世界を騒がせるお前の方が凄い
「でも、まるでこいつくんの見るアニメみたいな展開だね。日本の未来はちーちゃんにかかるよーー！」
「……別に、日本の未来なんて大そうなものを背負つつもりは無い

頼まれつづけめんだと、千冬は首を振る。

「私が守るのは、一夏と篠だけで十分だ」「あ、あれ？ 束さんは？ 束さんを忘れてるよ～」「お前は、守らなくても勝手に助かりそうだな」「酷いよちーちゃん！？」束さんはショックで泣こちやうよ～の字書こちやうよ！？」
「……お前が私の傍から、勝手にいなくなるのは知ってるからな」

こじけはじめた束に、ポツリと呟いて。次には抱き着いてきた束が、嬉しそうな笑顔で聞いてくる。

「ねえねえちーちゃん、それつてビツつ意味！？」
「さあな」「むつ、教えて教えて教えてーーー！」
「早く行くぞ。間に合わなくなる」
「ああっ、ちーちゃんーーー！」

ステルスマードを展開して、千冬は秘密基地を飛び出した。

空中に滞空して、ステルスマードを解除する。檣うじこまでに晴れ渡った空だった。

『あと五分だよ~、ちーちゃん。カウントダウンしようか? あと三百秒~』

「せめて一分単位でしてくれ。あと、出来る限りそちらでも迎撃してくれ」

『んー、まあ誘導ミサイルでハッキング可能なのはあるけど、というよりも絶賛それ操って誘爆させてるけど、千五百くらには無傷でどーんしてくるよ?』

「……一千発以上飛んで来るよりは、ずっとマシだ」

いくらか減つて、それでも千を超える数にうなぎした気持ちになりながら、千冬はハイパーセンサーで遠距離まで見渡す。遠くに確認できるようになつたミサイルに、近接ブレードを右手に展開させた。

「一発でも漏らせば、アウトだな」

出来る限りの事はしてみせようと、息を呑み一気に加速する。

ブレードでミサイルを真つ二つに斬り捨て、爆発が起こる前に次を斬る。時にはミサイル同士を衝突させて誘爆させながら、三百六十度から襲つてくるミサイルを次々に撃破していく。

「 ツ

回避が間に合わず、ミサイルに直撃する。衝撃はあつたが痛みはない、けれど当然ながら、体中の血液が一気に凍りついたような気分になる。

「……本当に」

近接ブレードをいつたんしまい、大型荷電粒子砲を展開し持ち替える。

「束の作る物は、凄すぎるな」

呆れさえ滲ませて、放つ。そんな彼女に付き合ひ自分自身にも、呆れながら。

「おかげり、ちーちゃん！凄かつたね、かつこよかつたね、さすが束さんのちーちゃんだよ！！」

「お前のになつたつもりは無い、が……ただいま」

ミサイルを見事に迎撃し終えて、更には捕獲、または撃墜の為に向かつて来た各国の軍事兵器の相手もして、千冬は秘密基地に戻ってきた。

騒がせるだけ騒がしておきながら、束は上機嫌に帰つてきた千冬を出迎える。

「で、被害はどうなつてる？」

「被害は全く無し！ってわけじゃなくて、多少の破片とかで民家がぶつ壊れたりはしてるけど、人間に被害は無いよ。死人怪我人無しやつたぜぶい」

「……まあ、さすがに破片まではビリビリもならないしな」

疲れたように返して、千冬はEVAを解除する。そうすると、いつもなら待機状態になる筈のEVAが、千冬の首元にネックレスとなってぶら下がった。

「……束、これは？」

「あ、それね、ちーちゃん専用にしたんだし、せつかくだからいつでも持てるようにしてよっかな～って」

「……外に出す気は無いと、言つただろ？」

「もう遅いよ。だつて、いつもやって見せつけやつたんだもん。認めない事なんて、出来ないでしょ？」

笑つて束が指差したのは、一つのディスプレイで。そこには、EVAを纏つた千冬が（バイザーで顔は分からなが）、ミサイルを迎撃する様が鮮明に映されていた。

「せつかくだから、全世界に放送してみたよ。テレビはこの映像と、ハッキングした奴らの事で持ち切り状態。皆同じ事ばっかりで、芸が無いね」

「……はあ」

数えるのも馬鹿らしい何度目かの溜息。

このまま帰つて一夏の相手をしようかと思つたけれど、体は氣づけばベッドに突つ伏していた。

「あれあれ？ちーちゃん、ビツたの？」

「……疲れた」

驚くほどに体は元気だが、精神的な疲れがドツと襲つてくる。田

を閉じればすぐにでも眠れやうで、ついでに始めた視界の中で束がベッドの脇に膝をついた。

「一時間もしたら、起してくれ。帰る」

「んー、良こけど……帰つかねえの?」

「一夏が心配する……」

「そつかそつか。うん、ここよ。おやすみちーちゃん

「……おやすみ」

千冬は目を瞑じて、すぐに眠りについた。束の手が、そつと千冬の頭を撫でる。

幼さを残した寝顔を間近で見つめて、そしてから束せぱんくつと立ち上がり、浮遊して近づいてきた椅子に座った。

「わい、ちーちゃんが起きるまで、いろいろやがいやわないとな

」「

主にエスについて。それがに政府も、ミサイルを迎撃したのがエスのは分かつていいだろ?」

展開したディスプレイとキー・ボードで、束は上機嫌の笑みを浮かべて指を滑らせた。

緊急非常事態は、突然に（後書き）

白騎士事件発生。ただし犯人は束じや無いです。

騒動は駆け足で

ソファーに座つてテレビを見ていた一夏が、あ、と声をあげた。

「千冬ねえ、束さんが出てるよー。」

「またか？」

「うん。生放送だつて」

「……生放送？」

買い物袋の中身を冷蔵庫にしまっていた千冬は、一夏が続けた言葉に首を傾げる。

IIS公表からのミサイル発射、そしてIISによるミサイルや他国の軍事兵器の撃破。騒動の中心、基、騒動の切欠となつた束は、今や日本どじろか世界中から注目される存在だ。

テレビでIISについて見ないことも無ければ、同時に束を見ないことも無い。

そんな束だが、今まで生放送に出たことは一度も無かつた。だから、千冬も気になつて、一夏の隣に座りテレビを見る。

『では、篠ノ之博士はどうしてIISの開発を?』

『それって、なんで君たちに言わないといけないの?それを知つて君たちはどうする?とも無いし関係ないでしょ?なら言ひ必要無いよね』

『えつ、ええつと……』

テレビに放送されていようと、全世界の人間に見られていようと、束には全く関係が無かつたらしく、彼女は千冬や一夏の知る様に、

全くの興味を示さずに同会者の質問に言葉を返していく。

「束さん、忙しそうだなあ」

「……一夏、篠はどうな様子だ?」

「篠? んー、なんか疲れてるみたいだった」

「そうか……」

IIJが世界中から注目されると、篠ノ之家はその対応に追われるようになつた。

家には黒服の人間が何十名と訪れ、束への情報開示を求めたり面談を求めたりと、落ち着く暇も無い。篠もまた、そんな人間たちに家を囲まれ、学校に行つても開発者の妹という事で、妙に注目を集めてしまつていて。

「俺に、なんか出来る事ないのかな……」

テレビを見ながら呟くよつて言つた一夏に、千冬は視線を向けて、それからポンッと軽く頭に手を置いた。軽く撫でて、眉をハの字に下げる一夏を温かな目で見つめる。

「お前は、今まで通りにしてやれ」

「今まで通り?」

「心配してやるのは良いけれど、それでお前まで気を使つていたら、篠が本音で話せる相手がいなくなる。お前は、今まで通り一緒に遊んだりしてればいい」

「……そんなんで、良いのかな?」

「何かしてほしい時は、篠はすぐ顔に出るからな。それを見落とさない様にだけすればいい」

「……うん、分かった。俺、頑張るよ」

「ああ

意気込んで見せる一夏に、千冬は応援するように頷いた。テレビは気づけば、CMへと変わっていた。

それを見て、夕食の支度をしようと千冬が立ち上がると、一夏も手伝うと言い、一緒にキッチンへ向かう。

「今日は、カレーにするか

「俺、野菜切る！」

「なら、頼んだぞ」

材料を並べ、一夏が野菜を切る間に、千冬は肉の準備に入る。千冬がパツクから出した肉を包丁で切り始めると、一夏はジャガイモの皮を剥きながら、ふと思いついたように疑問を口にした。

「千冬ねえ、どうして束さん、IRSを作ったんだ？」

「……なんだ、突然」

「さつき、テレビで言つてたから……IRSって、本当は宇宙に行く為に作つたんだろ？」

「ああ……もつとも、そっぽ上手くいかなかつたがな」

IRSは、現行兵器をはるかに凌駕するそのスペックから、宇宙空間での活動を目的としたマルチフォーム・スーツではなく、兵器として世界に認識された。

最初から、束が目論んでいた、世界に認めさせ堂々と宇宙へ行くという考えは、成功するはずも無かつたという事だ。束が兵器として認識されたのに対し、千冬に愚痴を言つていたのは余談である。

「束さん、宇宙に行きたかったのかな？」

「そのようだ。まあ、どうしてそつ思つたかは、そのうちあいつも話すだろ？」

「千冬ねえは知ってるの？」

首を傾げて見上げる一夏に、千冬は口を閉じる。少しばかり考える様に視線を動かして、ああ、と小さく頷いた。

「でも、秘密なんだ。だから、知りたければ束に直接聞け
「ん、分かった」

何となく、千冬は一夏に言う事が出来ず、そんな答えを返した。素直に頷いた一夏に、人知れず安堵する。

けれど一夏の疑問はそれだけでは終わらず、一度目の疑問が千冬にぶつけられた。

「あの白騎士って、誰なのかな？」

束と同じように、テレビで何度も見る、HSを纏いミサイルを迎撃した張本人。

バイザーで顔は分からず、その存在は女性である事しか知られていない。何度となく束に、その存在を明らかにするようにといふ求めはあつたそうだが、束はそれに答えず正体不明のままだ。

その正体について、一夏が疑問に思うのも当然だろう。千冬は包丁を水で洗い流して、疑問に答える。

「私だ」
「……へ？」

沈黙が場に満ちた。ぽとりと一夏の手から皮を剥かれたジャガイモが落ち、目を丸々とさせた瞳が千冬を見上げている。

千冬はその瞳を気にする事も無く、人参を手に取り皮を剥き始めた。

「千冬ねえが、白騎士なの？」

「ああ」

「ミサイル、斬ったの？」

「斬ったな。レーザーも撃つたぞ」

「……え、ええええええええええ！」

飛び上がる勢いで驚愕した一夏の手から包丁がまな板に落ちた。それを見て、千冬は拳を握ると軽い拳骨を食らわした。

「あだつ！」

「危ないだろ？ 包丁を使うときは、注意しろ」

「ごめんなさい……」

軽くとはいって、小学生には痛かった。一夏は拳骨が落ちた個所を両手で押さえて身を震わせる。

その様子に、千冬は遣り過ぎたかと心配になりながら、口を開いた。

「私が白騎士だと、誰にも言つんじゃないぞ。友達にも、筈にもだ

「え、筈も駄目なの？」

「駄目といつよりも、どこで誰が聞いているか分からないからな。筈なら、束に聞けば分かるだろ？し……もしも、私が白騎士だと世間にバレると、どうなると思つ？」

「んーと……」

一夏は首を傾げて頭を悩ませる。その脳裏には、黒服の人間に詰めかけられた篠ノ之家の惨状が蘇っていた。

「……筈の家みたく、なる？」

「おそらくな。それが嫌だから、秘密にしてるんだ。一夏も、知らない人間に囮まれば嫌だらう?」

「……嫌だ」

顔を顰めて、一夏は千冬の問いに頷いた。そして、絶対に誰にも言わないと心中で誓いをたてる。

「（でも、千冬ねえが白騎士かあ）」

そうと分かると、どこか誇らしくなった。世間では、白騎士は日本を救つた英雄と呼ばれてすらいるからだ。

さつそうと現れ、死人を一切出さずにミサイルから日本を守り、そして姿を消した白騎士。それは一夏が見る、アニメのヒーローのように思えた。

「かつこいいな……」

見上げた千冬の横顔に、一夏はそう呟いた。

それから数日後、一夏は学校帰りに筈を家に連れてきた。

一足先に帰つてきた千冬に出迎えられ、筈は一夏に連れられリビングのソファーに座つている。

その表情は力無く、一夏を心配させた。

「大丈夫かよ、筈」

「平気だ……」

「無理はするなよ。疲れたなら疲れたと、はつきりと言つた方が良

い

顔を覗きこんで心配する一夏に、気丈に笑みを浮かべて首を振った簾。そこに千冬が、お茶を注いだグラスを二つ持つてやって来る。一夏と簾の前にグラスを置いて、制服のリボンを解きながらテレビをつける。

テレビでは、先日発足されたアラスカ条約、正式名称をEIS運用協定というが、それについての説明がされていた。

内容としては大きく二つであり、一つはEISの取引などの規制、そしてもう一つは、EISの技術を独占的に保有している日本に対する情報開示とその共有を定めるもの。

これに基づき、日本にEISの知識、技術を学び、操縦者を育成する機関を設置するという話も出ているらしいが、未だはつきりとした情報は千冬たちの知るところでは無い。

「EISが公表されてからというもの、世界が変わっていくな」

「そう、ですね……」

「…………こうなって、恨んでいるか？」

「え？」

未だ話し続けるアナウンサーの声を消す様に、千冬はテレビを消した。

唐突な問いかけに意味が分からず見上げてくる簾に、淡々と、感情を消し去った声音で千冬は聞く。

「世間も変わり始めているし、お前の周りも変わり始めている。知らない人間が家に押し寄せるし、友人たちだって今までと違う田で見てくる。違うか？」

「…………はい」

「そうなった原因は、言ってしまえばEISだ。更に言えば、開発し

たのは束で……開発する原因になつたのは、私とも言へる

「えつ、それつて……」

「千冬ねえ、どうこいつ」と?」

篠が思わぬ言葉に田を丸くし、一夏もまた知らぬ事実に食いつくよつに千冬を見つめる。

一方で、千冬は話しあがたと口元を抑え、それから一人を見つめてすまなそつに首を振つた。

「実際の理由は、束に聞いてくれ。私からは言えん」「なんでだよ。どうして教えてくれないんだ?」

「千冬さん……」

「……私も、はつきりと聞いた訳じや無いからだ。だから、聞くなら束からきちんと聞いてほしい」

頼むよつにして言つと、一夏と篠は渋々とだが頷き返す。それに笑みを返して、けれどすぐにその笑みは消し去り、千冬は話を戻した。

「それで、篠の周りが変わる原因是、私と束にあると言えるんだ……変えた私たちを、恨んでいるか?」

「……篠……」

「わ、たしは……」

一夏は篠を見つめて、その瞳を揺らした。友人が自分の姉を恨んでいるかもしね、その事態は一夏の心を不安にさせるには十分すぎる。

そして篠は、見つめてくる一夏の視線と、問い合わせてくる千冬の視線に膝の上に置いた手をギュッと握りしめて、緩く首を振つた。

「「」ことになつて、正直、困つてはこまなければ……姉さんと千冬さんを、恨んだりは、してません」

「……やつ、か」

内心では、言葉に出来ないくらいに気持ちが入り乱れているのだろうが、それでも篠は否定を言葉にした。

千冬は、それにひびく安心しながら、篠に笑みを向ける。篠の隣では、一夏もまた笑みを浮かべていた。

「……といひで、あの…姉さんから、聞いたんですけど」

「なんだ?」

「あの……千冬さんが白騎士つて、本当ですか?」

「ああ……」

束には、一夏に教えたと話してあつたから、篠に教えていたとしても別に問題も無いし、可笑しくも無い。

千冬は篠の疑問に頷いて、あつたりと肯定を示した。

「本当だ。束に事情を聞いてな

「……本当、なんだ?」

「凄いよなあ」

改めて真実だと言われて驚く篠に、一夏が千冬を見つめてしまう相槌を打つ。

「私では無く、あいつの作る物が凄すぎるんだ」

「でも、千冬ねえも凄いよ。だつて、ミサイル全部斬つたんだろ?」

「……どうしたら、そんなことが出来るようになるんですか?」

「どうしたら、か」

額に曲げた人差し指を当てて、千冬は目を伏せた。考えてみると、浮かぶのは三人の顔だった。

「お前たちを守りたかったから、だな」

「俺たち？」

「一夏と篠と、束をな。守りたかった、それだけだ

そう言つた千冬の顔は、とても美しく、凛々しく、かつこよく。一夏と篠は、自分たちを守りたかったと言つた千冬に、言葉にならないほどの感情を抱いた。

それは決して負の感情などではなく、ビームでも綺麗なものだった。

「千冬ねえ」

「ん？」

「ありがとう」

「…………ああ」

一夏にとつてヒーローだった姉は、やはり姉でしか無く。自分を想うその気持ちに答えるべく、一夏の口から出たのは、ありふれた感謝の言葉だった。

それが千冬には何よりも嬉しく、彼女はふわりと笑みを浮かべる。一夏と篠もまたつられたように笑みを浮かべて、とても穏やかな光景だった。

「

「…………何の、音だ？」

けれどそれは、ほんの微かな音に壊される。

ガリガリと掘り進めるような音は次第に大きくなり、初めは分か

らなかつた一夏たちにも分かるほどに大きくなる。

音の出所が織斑家の庭というのもその時にははつきりとし、リビングから大きな窓を介して抜けられるそこを、三人は警戒するようになつめた。

そして庭に突如として現れたのは、オレンジ色の大きな人参で。地面からボコリと現れたそれに、千冬は表情を消し、一夏と篠が呆気にとられた。

パカツと人参が先端から真つ一つに割れて、中から飛び出してきたのは束だった。

「やあやあちーちゃん！会いたかつたよちーちゃん！！ハグハグしようつかちーちゃん！！キスしようつかちーちゃん！！」

「とりあえず、その人参を消せ、束」

一田散に抱き着いてきた束を受け止めた千冬は、キスを迫る顔を抑え込みながら命令する。

はいはーいと束が千冬の手を逃れて、すぐさま後ろから抱き着きながら指を鳴らす。一瞬にして人参は無くなり、一夏と篠は驚いたように庭を見つめた。

「あー、ちーちゃんにやつと会えたよー。もう束さんはちーちゃんに会えなくてちーちゃん不足で餓死寸前飢餓状態。ちーちゃん不足で死んじゃうね」

「お前が自分で蒔いた種だらう。諦めるんだな」

「ちーちゃんが冷たい。いつくん、ほーきちゃん、慰めて〜」

「ね、姉さん……」

「つ束さん……」

二人揃つて庭の穴を見ていた一夏と篠に、束が飛びついて来る。篠が何を言つたらいいのか分からず困惑した顔を向け、一夏は驚い

たよつに身を避けよつとして捕まつた。

「束、一夏と篠から離れる。あと、何をしてきたお前は」

「一人から束を引き剥がしてソファーに投げながら、千冬は問う。束がソファーから起き上がり、そのまままた千冬に飛びついた。

「ちーちゃんに会いに来た！！」

「いつもの事だろ。それ以外には無いのか」

「えへへっ、ちーちゃん公認の束さんの愛だねーっと、他なんだけ
ど、篠ちゃん」

「は、はいー?」

千冬にじやれついていた束が、突然矛先を篠に向ける。向けられた篠はびっくりと体を跳ね上がらせて返事を返すが、少し上ずつてい
た。

「ごめんね～、篠ちゃん、あの黒服たち嫌がつてたでしょ？」

「あ、えと、それは……」

「あこいつらね、一度どうちに来なこよつにしたから。篠ちゃんにも
近づかない様にしたから、何の心配も無いよ～」

「え、あ……」

「……良かつたな、篠」

「つは、はい」

どうにも混乱して頭が追いついていない篠は、千冬が助け船を出
してやると大きく頷いた。束はそんな篠に嬉しそうな顔をする。

「それとね、ちーちゃん」

「今度は何だ」

「ちーちゃんは、HSの操縦者を育成する学校が出来るのは、知つてる?」

「……………テレビで言つていたが、実際にそんなものが出来るのか?」

「出来るよ。名前はHS学園、日本に出来るつて。一応は、高校の扱い。それでね」

千冬に抱き着いたまま、束は少しばかり体を離して笑みを浮かべた。

「ちーちゃん、HS学園に入る!」

明るく言われたその言葉に、千冬は抱きしめられたまま、束の頭に手を置き、力を籠めた。

雪が降り始める様になつた頃。

世間では核に代わる抑止力としてISが普及し、それぞれの国で研究、開発が続けられている。

ただし、その存在に対する認識は、宇宙での活動を想定したマルチフォームスースから兵器へと変わり、ISが公表されてから一年の間で、スポーツへとまた変わった。

これには各国の上層部の考えが色々と複雑にあるのだが、当然ながら、リビングで普段通りの日常を過ごす千冬と一夏には、関係の無い事だった。

「千冬ねえ、今日の晩御飯どうする?」

「なんでもいいが……というよりも、私が作るからお前はテレビでも見てろ」

「俺が作るよ。千冬ねえ、勉強大変だろ?」

「なに、そうでもないさ」

リビングのテーブルに広げられた参考書やノート。誕生日を迎えた十五歳となつた千冬は、現在受験勉強の真っ最中だった。

「判定もAだつたし、大丈夫だろ?」

「そつか。でも、本当にいいの? 千冬ねえ

「何がだ」

「IS学園、受けなくていいの?」

「ああ」

一夏の問いに、千冬はあっさりと頷いた。

千冬が受験しようとしているのは、私立藍越学園。学費も安く、千冬と一夏の住む家からも近い。そして、千冬が重要視したのは就職率の高さだった。今も尚、学生の身で働きながら一夏を養う彼女からすれば、卒業後に優良企業に就職できる可能性が高いこの学園はとても魅力的だった。

「エラ学園は、寮生活だからな。そうなると、お前を一人にしてしまつ」

「別に俺は平気だけど？」

「私は、お前の姉だぞ？ 弟を一人にしておけるか」

ノートに走らせていたペンを止めて、千冬はくしゃくしゃと一夏の頭を撫でた。満更でもなさそうに一夏が笑う。

そうした中、ピンポンと電子音が響いた。顔をあげて、千冬は来客を知らせるそれに立ち上がり玄関に向かつ。一夏は、リビングから顔を覗かせて様子を伺った。

「……どちら様でしょうか」

招かれざる客は、スース姿の女性だった。

女性は、警戒を露わに玄関から顔を覗かせる千冬に笑みを浮かべる。人好きしそうな笑みだった。

「初めてまして。貴女が、織斑千冬さんですか？」

「そうですが、貴女は？」

「日本政府の者です……名前は、垣根星子と申します」

「……」

「貴女に、お話をあつて来ました」

中に入れてくれませんか、言われた千冬は彼女越しに外を確認して、チラチラと視線を寄越している通行人に、彼女を家へと招き入れた。

一夏を二階の部屋に行かせて、リビングには千冬と星子。テーブルに広げたままの参考書を閉じて、お茶を彼女の前に出した千冬は、別の部屋から引つ張り出してきた座布団に座った。

「それで、話とは？」

「察しはついていると思いますが……織斑千冬さん、貴女には、IS学園に入学してもらいます」

「…………入学通知が来ていましたが、辞退した筈です。何度も来られよつと、私にその気はありません」

「申し訳ありませんが、そういうわけにはいかないんです」

星子は引かず、ペシッと背筋を伸ばして千冬を真正面から捕えて続ける。

「我々は、IS開発者の篠ノ之博士に、是非ともIS学園に入學してもらいたいんです」

「そうですか？」

「しかし博士は、今現在それを拒んでいます。なぜなら「束さんは、ちーちゃんと同じ学校に行くからだよーー」

パカッと、リビングの床が開いた。声と共に飛び出す様に現れたのは、束だった。

「し、篠ノ之博士！？」

「ハロー、ハロー。君はいったい誰かな？ビーチでちーちゃんのお家にいるのかな？」というよりもちーちゃんと一緒にりつじどりうを見？束さんとつてもじえらしーなんだけどなあ？」

「あ、えと、私は、日本政府の者で、垣根星子と申します。篠ノ之博士の」高名は常々」

「ああ、いらない。君が誰かとかどうでもいいし、長々した話も聞かないし」

「へ……？」

束の登場に驚きながらも挨拶をしようとした星子は、すぐに浴びせられた冷えた言葉に呆然とする。

それに溜息を吐いたのは千冬で、飛びついてきた束の頭に手を置いて力を籠めた。

「ちーちゃん、痛い、結構というかだいぶ痛いよーーーのままいくと確実にうぶつに束さんの惨殺死体が出来上がるちゃうよーーー。」「埋める場所は山で良いな」

「あ、束さんはちーちゃんと同じお墓でおねがいだだだだつ！！」「尋ねておいて、話を切るな。あと、さつき言っていた意味も説明しろ」

「説明するから過激な愛情だけじゃなくてぬくぬく気持ちいい柔らかい愛情も束さんにプリーズミーーー！」

「ふん」

「ふぎゅつ」

投げ捨てられた束が、リビングの床で悶絶する。それを放つて居住まいを正した千冬が、呆然としたままの星子に声をかけた。

「話を続けましょ」

「えつ、あ……はい、えつと……」

促されて、星子は千冬の横で早くも起き上がりついている束にチラチラと視線を向けながら、思わずといった風で言った。

「仲が、よろしいんですね……」

「幼稚園から一緒にですから」

「とすると、篠ノ之博士との『』関係は、えっと……『』友人という事で良いんでしょうか?」

「彼女の交友関係くらい、調べているのでは?」

「……まあ、はい。そうですねえ?」

「このこそと嗅ぎまわってたもんね~。鬱陶しそうたら無いよ。次やつたら、束さん怒っちゃうよ~」

「も、申し訳ありません!」

「……束、余計な口を挟むな」

「はーい。えへへ、怒られちつた」

「……喜ぶな」

慌てて頭を下げる星子と笑顔の束に、千冬は溜息を吐く。話がなかなか進まなかつた。

「……それで、どうして私がEIS学園に入学しなければならないんですか?」

「あ、はい……我々は、篠ノ之博士には是非とも、EIS学園に入学していただきたいのです。ですが、博士は、織斑千冬さんが入学しなければ入らないと……」

「そうなのか、束」

「んー、正確には、束さんはちーちゃんと同じ学校に行くつて言つただけだよ。こいつら、あんまりにもしつこくてさ。家に来るなつて言つたら、外で待ち構えてるんだよ?つづきよねー」

千冬の田の前で、星子が縮こまつた。あははと笑う束の笑みは、彼女からすればさぞ恐く映るのだろう。笑っているだけで、彼女に向けられる笑みに温度は存在しなかった。

星子と束の言葉で事情を理解した千冬は、お茶に手を伸ばし一口飲んで、静かに息を吐く。

「私が行くのは藍越学園だが、良いのか？」

「束さんはちーちゃんがいるなら何処でも良いよ。ちーちゃんもえいればそこは楽園だからね～」

一応、確認として聞いてみれば当然のように頷かれた。千冬としては、それならそれで問題は無かつたが、

「そ、それでは困るんです！」

彼女としては、問題でしかなかつた。

「つむ願いします、そちらの条件は可能な限り検討しますから、どうかHIS学園に『入学ください』」

「だから、私はちーちゃんと同じじゃなきゃ嫌なんだつてば。同じじーと言わせないでくれる？」

「では、織斑さん！お願いですから、HIS学園に『入学ください』。」

「……」

先ほどまでは、どこか強制を含んでいた彼女の態度だったが、束が現れてから一転して下手となつていて、束の機嫌を損ねない様にだろうか。

だが、だからといって千冬の考えも変わることはない、頭を下げる彼女に首を振った。

「お断りします」

「出来る限りの待遇をお約束します。ですからどうか、お考え直しぐださい」

「そう言われましても……調べていただければ分かりますが、うちは私と弟の一人暮らしですから。寮生活をして弟を一人にはしくありませんし、学費を払うだけの余裕もありません」

「なら、学費は免除致します。寮生活は……家からの距離を考えると、こちらからの通学は難しいですが……休日は自由に帰宅できるようになります」

「……勝手に決めて、大丈夫なんですか？」

「問題ありません」

寧ろそれで篠ノ之博士が入学するのなら、安いくらいだと。そんな言葉が聞こえてきそうで、千冬は眉尻を下げた。

どうやら彼女も、彼女の後ろにいるであろう人間たちも、本気らしい。面倒事に巻き込まれたと、千冬は隣で笑い続ける束を見た。

「あつはつは～、ちーちゃん怒んないでよ～」

「……私は、煩いのは嫌いだ」

「知ってるよ。うん、ごめんね」

「……はあ」

常に他人に興味を持たない束が、謝ることは少ない。そしてこうもあっさりと謝る時は、本当にそう思っている時で。

それが分かるくらいには千冬は束の事を知つていて、謝られるとそれ以上、責める気持ちは消えてしまつ。

「……弟とも相談したいので、返事は後日で良いですか？」

「構いません」

「では、決まりましたらこちらから連絡します。必要な場合は条件

もその際に伝えますので、今日はお引き取りを

「……分かりました。色よい返事をお待ちしています」

連絡先です、と渡された紙を受け取って、立ち上がった星子を玄関まで見送った。そうして千冬は、疲れたように頭に手をやる。後ろから抱き着いてきた束が、そんな彼女の顔を覗いて笑った。

「ちーちゃん、お疲れだね！」

「原因はお前だがな」

「「めんね～。あいつらしつこいんだもん。私はちーちゃんと同じやなきや嫌だつて言つてるのにさ」

「……それで私の所まで来られても、煩わしいだけだ」

リビングに戻つて、テーブルに置きっぱなしのお茶の入ったコップを洗う。束は引っ付いたままだ。

「最初にお前が言つて来た時にも、断つただろう」「

「言われたね～」

「それでお前も、納得しただろ？」「

「したよ。あいつらが勝手に騒いでるだけ」

最初、まだ千冬たちに「IS学園の情報がはつきりとしていなかつた頃。

既に政府から入学するようになっていた束は、それに千冬を誘つた。IS学園なら、自由に（許可など必要な物はあるだろ？が）ISに乗れる。外で乗つて騒がれるような事は無い。

だから、千冬がISに乗つて空を飛べると思ったから誘つたのだ。外で飛ぶことに魅力を感じながら、千冬は騒がれるのを嫌つて外で乗ることをしなかつたから。

IS学園に入学する事自体が騒がしいと、千冬にアイアンクロー

を喰らつたけれど。

「で、どうじょっか。ちーちゃんが望むなら、別に断るのも簡単だよ?」

「どうするんだ?」

「これ以上誘つて来たら、一切のI-Sの情報を開示しないって言ひ

「……何も考えずに、篠たちに手を出す輩が出てきそうだから、やめい」

そんなことをすれば、騒ぎになるのは一目瞭然。もれなく千冬や一夏に飛び火するのも田に見えた。

「つたく、お前はどうして私を面倒事に巻き込む

「束さんとちーちゃんは一心同体だからだよー。」

「…………とりあえず、まずは一夏に相談か」

「あれ、無視? スルーされちゃったよちーちゃん」

「その辺で大人しくしてろ。私は一夏と話していくから

「ええつ、やだやだ置いて行かないでよちーちゃんー!」

一階への階段を上り始めた千冬を騒ぎながら束が追いかける。

部屋を訪れた姉と、いつの間にやら來ていたその親友に、一夏は目を丸くするのだった。

HS or 藍越（後書き）

千冬が素直にHS学園に入學するのか、と思ひきやせんなどもな
く。

でも、思ひにこんなスロー・ペースでいいんだろつかと……。千冬と
束の学園生活を見たい人がどれだけいるのだろうと思ひつつ、今日
も彼女たちの百合は続く。

IS学園。IS操縦者の育成を目的とした教育機関であり、アラスカ条約が締結してからすぐに設立が決定され、日本に作られた正式名称を、IS操縦者育成特殊国立高等学校という、全寮制の学園である。

入学式までは生徒の立ち入りは一切許されず、四月の初め、開校日によくやく賑やかさを得た学園に向かう電車の中で、千冬は窓から見える海に考えていた。

「夏になつたら、一夏と海に行くのも良いな」
「おおっ、ならちーちゃんの水着を用意しないとねーひらひら可愛いのにしようか?すけすけせくしにしようか?」
「少なくとも、お前に選ばせることは無い」
「そんなんあーー!」

ガガーンヒショックを受けて見せる束と、気にせず外を眺め続ける千冬の周りには、満員電車にも関わらず僅かにスペースがある。ハイテンションで騒ぎ続ける束と、無表情で淡々と切り捨てる千冬の空気が原因だらつ。

「もうすぐ着くんだ。大人しくしていろ
「ちーちゃんが冷たいよ~」
「それでもないだろ」
「束さんとしては、ムギュッと抱きしめてキスしてほしいな~」

「今すぐ海に飛び込むか？」

「アーネンナセー」

「ンン、と千冬が軽く窓を叩いて視線だけを向けると、束はすぐさま謝った。頭につけた金属製のウサミミが何故だかしょんぼりと垂れている。

「……気になつたんだが、その耳は何だ？」

「これ?」「れはね、ちーちゃんレーダーだよ!」

「ええっ!!」

電車から下りるまで、束は千冬の手からウサギ///を守る為に必死の抵抗を続けることとなつた。

ウサミミを死守してIIS学園に到着した束が、機嫌よく笑っている。

三

「ん? なあに、ちーちゃん

「離れろ

「それは出来ない相談だよちーちゃん」

一年一組、それが千冬と束のクラス。

教室にて、偶然にも席が隣同士だつた千冬と東だが、それが本当に偶然なのか誰かが操作したものなのかはさておき。

二冬が席に座るなり京が打き落いたまま離れなくなり、そろそろば当然ながら、IS開発者として顔が知れている束の行動に、周りで様子を伺っていた生徒たちが騒がない筈も無く。

「誰？あの子」

「篠ノ之博士のお知り合い……？」

「綺麗な子ね」

「どうすれば博士とお近づきになれるかしら」

女子生徒たちが「そこそと会話を交える。

ISの研究が進められ発覚した重大な欠陥、女性しか操縦できないという事実。その事実によつて、IS操縦者を育成するIS学園は、意図せずして女子高となつていた。

女三人寄れば姦しい、聞こえないようにしているつもりかもしがれなが、囁きも増えれば騒がしいもので、聞こえてくる内容を鬱陶しく感じた千冬が束を引き離しにかかり、それを束が拒否した事が、冒頭での出来事。

「黙らりせよつか」

「よせ。面倒事を起すな」

「でもちーちゃん、『機嫌斜めでしょ？』

「……お前が気にする必要は無い」

「駄目だよちーちゃん。我慢は体に毒だよ……つてなわけで束さんの胸に飛び込んで癒されると良いこと思つよ…」

「黙れ」

「ハイカモン、どばかりに千冬から離れた束が両腕を広げるのを一蹴して、千冬は机に頬杖をつく。

騒がしさと好奇の視線に目を閉じて、千冬は家に残してきた一夏の事を思つた。

日本政府の女性、星子が来たあの日、千冬は一夏に相談した。そうしてあつさりと返つてきた一夏の言葉は、IS学園に入るのを勧めるものだった。

千冬がI.S学園では無く藍越学園に入ると決めた後も、頻りに確認してきた一夏である。その答えは分かり切っていたとも言える。

その結果から、千冬は抗うのを諦め、I.S学園への入学を決めた。

その際に、政府に提示した条件もあり、

- ・I.S学園にて発生する諸々（学費、食堂代、寮費等）の免除
- ・毎週土日は家へと帰宅、宿泊が可能である事
- ・生活費の支給
- ・クラス、寮部屋は篠ノ之束と同じである事

以上である。最後の一つは、束が勝手に追加したものだった。

最初は、生活費の支給では無く、放課後のバイトの許可だったが、それは政府によって却下され、代わりに提示された案である。一夏の事を考えれば、どちらにしろお金は必要となるわけで、千冬もそれに頷かざるを得なかつた。学費その他費用についても同じである。政府としては、これだけで篠ノ之束をI.S学園に留める事が出来るのだから、安いものだつたかもしぬない。

「ふんふふ～ん」

「……お前は何をしてる、束」

千冬が田を開けると、束は彼女の左手首のところをやたら弄つていた。正確には、左手首のブレスレットをである。

束の傍には空中投影された小さなディスプレイがあり、そこには様々な数値が表示されていた。

「いい感じに成長中だね。さつすが束さんのかーちゃんだよ

「馬鹿が。で、成長といつのさ？」

「暮桜の事だよ」

束の言葉にて、千冬はブレスレットに田をやる。僅かにピンク色に輝く鎖と、桜を模つた飾り一つのデザイン。

暮桜、技術提供の為に解体された白騎士に次ぐ、束が千冬の為に作った専用機。

開発されて田は浅いが、それは常に千冬と共にある。

「束さんの想像以上に成長が速いよ。ちーちゃんだからかなあ」「私だから？」

「I Sは私の子どもだからね。束さんの愛するちーちゃんを、この子が愛さないわけが無いんだよー」

「…………その説明は、よく分からん」

どちらかといづれ、納得できかねるといつたところで。

千冬と束がいつものように話し、そして周りは様子見から動けずにいるうちに、チャイムが鳴り響く。

立っていた生徒たちが席に座り終わった頃、教室の前の扉が開き長髪の女性が入ってきた。

「皆さん、揃つていいようですね。では、S H Rを始めたいと思います」

綺麗な笑みを浮かべた女性は、一度黒板を向いて名前を書くと、もう一度生徒たちに向き直る。

「私は、一年間皆さんの担任となる、橘朱莉です。よろしくお願ひします」
「よろしくお願いしますー！」

何人もの声が揃つて返事を返した。朱莉は安堵したよつて息を吐く。

「それでは、今日の予定ではこの後に入学式となりますが……まだ時間があるので、先に自己紹介をしましょ?」

では相沢さんから、と朱莉が指名する。はい、と席を立った女子

生徒の自己紹介が始まつて、次々と順番が回つた。

すぐに千冬の番となり、席を立つた彼女に視線が集中する。束と親しくする千冬に、生徒たちは興味津々であった。

「織斑千冬です。よろしくお願ひします」

最後に軽く頭を下げる、千冬は座る。瞬間、妙な沈黙が教室に満ちた。

「えっと……つ、次、お願ひね」

「…………あ、はい!」

呆気にとられたのは朱莉もだつたが、気を取り直してどつにか次を促す。一列目の一番前の席の少女が、席を立つた。

けれど自己紹介が始まつても、千冬に向けられる視線は減らず。それに小さく溜息を吐いた彼女に、束が不満げに言つ。

「ちーちゃんまた人気者だね」

「煩わしいだけだ……」

「そうだね。ちーちゃんには束さんがいればオッケーなのに、ちーちゃん人気者で束さんはじえらしい確實だよ」

「……次、お前だぞ」

「えー」

束の前の席の女子生徒が座り、千冬の言葉通り順番が回つてくる

が、束は一向に話そうとしない。

それに困惑しつつ朱莉が促すも、結果は変わらず。千冬は体ごと自分を向いている束に、早くしろと呟いた。

「むう、面倒くさいな……篠ノ之束。はい終わり」

「えつ、ええと……」「

文句を一言言つてから、一切生徒たちには顔を向けずに自己紹介を終わらせる。好奇の視線には、戸惑いや不快の感情が色濃くなりつつあった。

「で、では次、お願ひね」

「はい」

それ以降の自己紹介は、順調の一言だった。

「だるいなあ、さつさと終わらせればいいのに」「黙つてや」

一切聞く気の無い束と、とりあえずは名前を耳に入れていた千冬の一角に集められる視線だけは、減ることは無かつたが。

その後に執り行われた入学式は、特に問題も無く終わり 名前順で千冬と離れた束が常時不機嫌だったが その日は終了となつた。

すぐにでも授業を始めたいところだが、何分手探りな事も多ぐ、それぞれのクラスの状況を教師たちで話し合う為だと。

けれどこれによつて、生徒たちは学園内を見て回る時間を多く得

られた。学園は教室やI.Sの練習場ともなる複数のアリーナ、その他特別教室、施設、寮と、馬鹿みたいに広い。見学して回ることしても、時間はあるに越したことが無かつた。

しかし、生徒たちが教室を出て学園内の見学に向かつて、一年一組だけは、奇妙な静けさを保っていた。

「ちーちゃん、この後どうしようか？」

「……寮の部屋に行けばいいだろう。荷物の整理もしたいしな」

「うんうん、それじゃそうしようか！ レッジバーだよー！」

千冬と束が、原因だった。といつても、彼女たちが何かしたわけでは無く、生徒たちが様々な疑惑を抱きながら、一人の行動に注目していた為に、一組の教室は静かだつたのだ。

最も注目されているのは束であるが、それと同時に束と対等に接する千冬にも、自然と視線は集まる。寮へ向かおうと廊下を歩いていた千冬は、纏わりつぶ束を引きずりながら、その視線に辟易していた。

「（鬱陶しい……）

言葉にこだわらぬなかつたが、心中は穏やかでは無く。一切の表情を顔に出さじとなべ、千冬は歩き続けていた。

「篠ノ之博士ー！」

後ろから呼び止められたのは、束だつた。千冬は足を止めて束を見るが、当の束は千冬の首に腕を回して上機嫌に笑っている。

つまりは、呼び止められた事を一切気にしていないわけで、千冬はそれを確認すると無言で歩き出した。

「あ、こら！待ちなさい！！！」

歩き出した千尋と正まさかうられる束に、声をかけた生徒が慌てて追いかけてくる。

いつもの千冬なら、呼び止められた声
こうだつたが、何分タイミングが悪く。

今の彼女は、最高に機嫌が悪かった。

「待ちなさいって言つてるでしょー！」

けれど追いかけてきた生徒がそれを知るはずも無く、彼女は千冬たちの前に回り込んできた。

でようやく立ち止まる。気づいた東が、表情無くチラリと生徒に視線を向けた。

「篠ノ之博士、お会いできて光榮です。私は

「なんで君は私とちーちゃんの前に立つているのかな？せつかくちーちゃんと一緒に部屋に行こうとしてるのに、それを邪魔する権利って君にあるの？無いよね？ようやくちーちゃんと一人つきりになれるのに、その時間を一秒でも削る事を君が許されると思つてるの？思つてないよね？だから早く私たちの前から消えて」

一切の温度の籠らない言葉を浴びせかけられた生徒が、目を見開いて固まる。心なしか顔色が悪い。

それは、彼女たちの周りで様子を伺っていた生徒たちも同じだつた。

「やつぱつ、篠ノ之博士つて」

「テレビで見た通り？」

「他人に一切興味を持たないって言つてたけど

「え、でもあの人は？」

「博士と一緒にいる人、誰？」

沈黙の後、騒がしさを増していく廊下。向けられる視線に様々な感情が見え始めて、千冬は目の前で未だ固まる生徒を放つて歩き出す。

「あまり騒ぎを起こすな、束」

「どうでもこことよ？そんなことよつちーちゃんと束さんの愛の巣へ急ぐべきだと思つよ」

「愛の巣では無いだる」

「じゃあこれからそつすむことじよう」

「……はあ

上機嫌に言つた束に、溜息を吐き出して。変わらず向けられ続ける視線に、千冬はつんざりしながら歩き続けた。

IIS学園、入学（後書き）

千冬と束の学園生活スタート。
ただ、なんか学園ものみたいに長くなりそうな予感がひしひしと
…省略すべきなんでしょうかねえ…。

千冬の体に、衝撃が走る。

「ちーちゃん大好きー愛してるーーー！」
「知つている」

それはいつもの事で、束が千冬の体に後ろから飛びつけいだつた。

過程は分からぬがいつもの事なので、あっせりとそれを受け止めて。そうして今度は隣に現れた少年が、千冬に笑う。

「千冬姉！」
「…………一夏、か？」

少年の口から飛び出した呼び方に、思わず目を丸くして千冬はその顔をジッと見つめた。

幼い自分の弟の面影の残る少年は、疑問を持ちながら呟かれた名前にぱちくりと目を瞬かせて不思議そうに言つた。

「当たり前だろ、どうしたんだよ急に」「ああ、いや…………すまない。なんでもないんだ」

首を振つて、自分よりも高い位置にある頭を撫でる。何とも不思議な気分を千冬は味わつた。

「姉さん、じじじたんですか」

「あ、篠ちゃん…どうしたの？どうかしたの？」

「急にいなくなつたので、探してたんです。千冬さん、すみません」

「……いや、気にするな」

次に現れたのは篠で、彼女は千冬に抱き着く束を呆れた目で見ると、千冬に頭を下げる。

上げられた頭は、低いとはいえ千冬の思い描いたものよりも随分と高い位置にあって、それにもまた不思議な気分を味わう。知らぬ間に大きくなつた一人が、何だか無性に寂しくなつて。千冬は僅かに目を伏せた。

「千冬姉？」

「どうかしましたか？」

両隣で首を傾げた二人が、千冬の前に回り込んでくる。気がつけばその手がしつかりと握り合わされている事に、遂には完全に目を閉じた。

「（寂しい、ものだな）」

いつかは離れていくのだと分かつていても、目の前にすればとも寂しかつた。一夏は大切な弟で、たつた一人の家族だったから。

「（…………捨てられたわけでは、無いというのに）」

残されてしまうことが、悲観的な気持ちを持たせるのか。それとも千冬の心に根付く、小さな黒い何かのせいか。

沸いて溢れる寂しさに目を閉じて、ただ耐える事しか千冬には出来ない。

「大丈夫だよ、ちーちゃん」

そつと、束が千冬の耳元で囁いた。

「束さんは、ずっとちーちゃんと一緒にいるよ。ちーちゃんだけは絶対に離さないから」

「……」

開いた視界いつぱいに、束の顔が映りこむ。いつの間にか真正面から再度抱き着いてきた束に地面に押し倒され、彼女の言葉にほつと安堵する自分がいるのに千冬は戸惑っていた。

「……束」

「なーに？ ちーちゃん」

「私も、お前と」

何かを言おうとした千冬の言葉は、突然増した重みに息がつまり、途切れ。

「千冬姉！」

一夏が、千冬の体を起こして横から腰に手を回して抱きしめていた。

「俺は、千冬姉から離れたりしないって」

「一夏……」

「姉さんを千冬さんだけに任せたりは出来ませんから」

「等等……」

更に横、一夏と逆側から手が伸びて、筹が千冬に抱き着く。

正面を束、左右に一夏と篠。**せゅう**「つきゅう」と抱きしめられて、耐え切れず千冬の体がまた後ろへと倒れ込む。

四人揃つて一塊のまま倒れて、千冬の上に乗つた束が笑つた。

「ちーちゃん、人氣者だね」

「ああ」

「束さんと、いつくんと、篠ちゃん。ちーちゃん、嬉しい？」

「そうだな……嬉しいな」

大切な人に囲まれるのは、なかなかに悪くないと。目を閉じた千冬の体に、だんだんと重みが増していく。

「ちーちゃん、大好き」

「…………知つている」

返した言葉に、返事は無い。重みは次第に千冬の呼吸器官を圧迫し、彼女の世界は急速に崩壊を始めた。

耐えかねた重みに千冬が目を開けると、その視界に広がつたのは見慣れない天井だった。

「…………重い」

IS学園、寮部屋。寝ている千冬の体に折り重なつて目を閉じる、束の姿があつた。

「おはよう、束」

「うーんやー…？」

とりあえずは、ヒ。千冬は手始めに、束をベッドから蹴り落とした。

ノートにペンを走らせて、千冬は教師の話を聞いていた。
入学式の翌日から本格的に始まつた授業は、千冬と束にはじつに元氣を感じさせるものだつた。

なぜなら、束は授業の中心であるEISの開発者であるし、千冬は世間に知られてこそいないが、現時点ではEISの操縦時間が最も長く、その知識も束から直接教えられている。

つまり、EISの授業は一人にとつて既に知つていて当然の事ばかりだつた。

「ちーちゃんつてば真面目だね~」

「お前もノートくらいは出しておけ」

「あつはは。束さんはEISの生みの親だよ? 束さん以上にEISに詳しい人間はいないよ」

そう笑つた束の机上に展開されているのは、普段展開されるものよりも小さなディスプレイが一つ。授業中といつ事で千冬が自重させた結果だ。

EISが発表されてからというもの、束は自身の開発した物を表だつて使用することが増えた。情報開示を求められても、全て拒否しているが。

学園内であれば、直接の田は生徒と教師しか無い。使用しても、周囲で勝手に騒ぐだけで束と千冬には関わってこないと分かっているからだ。

それでも騒がしくなること、千冬は不機嫌な顔をするが、普段通り行動しても勝手に周囲が騒ぐのだから、あまり違いは無い。

「次の授業はＩＳを装備しての実践を行いますから、移動は迅速にお願いします」

授業終了のチャイムが鳴る直前、教師が次の授業の指示を出した。心なしか教室全体に張りつめた空気が満ちる。束によつて各国にコアが配られているとはいえ、開発されたＩＳは多くない。殆どの生徒が、実際にＩＳを装備するのは初めて、それ以外の数少ない生徒でさえ、一度か一度、装備したくらいだろう。緊張するのも仕方のない事と言えた。

「ちーちゃん、こんなくだらない授業はサボつてお外飛んでみよつか！」

「駄目だ」

千冬と束だけは、何一つ変わり無かつた。

ＩＳを装備しての授業は、訓練機の数に制限があることから、一度全員に向けて説明をした後に、一つの訓練機に対して五人から行わることとなつた。

「ちーちゃんと一緒じゃなきゃやだ
「我儘言つな」

その結果、千冬と束は別の組みに割り振られる。だが束はそれを頑として受け入れようとせず、千冬にくつ付いて離れない。

千冬は視界の端に、オロオロとする教師を見つけた。東相手では下手な事が出来ないのでしょう、機嫌を損ねてしまえばISに関する情報が手に入らなくなる。

当てにならない事が分かつて、千冬は抱き着いたままの束の頭に手を置いた。そのまま力を籠めて持ち上げる。

「ち、ちーちゃんの愛が過激すぎて束さん頭がああああああ…！」
「授業の間だけだ、大人しくしている」

授業の間だけだ。大人しくしていろ。

そうして放り投げた先で、束が勢いよく地面に突つ伏して痙攣した。千冬はといえば、何事も無かつたかのように自分の組みに向かつて行く。

ケラフスハイドの目が驚愕は見開かれていたが、千冬は隻せすは訓練機に手をやって、呆然としたままの班員を見回した。

「いいのが、やらないで」
「えつ、……おー」

声をかけられてようやく思い出した少女が声をあげる。それによつて教師も落ち着きを取り戻したらしく、チラチラと東と千冬に目をやつていたが、やがてE.Sの装着を開始するよつと指示を出す。少女たちが宛がわれた訓練機の前に立つ。訓練機は打鉄、ブレードを主な装備とした近接戦に特化したE.Sだ。

千冬は、同じ班の少女が打鉄を前に苦戦しているのを眺めていた。班の少女たちは全員がIS未経験者、一度でも装備した事のあるものなら何とかなるものも、全くの経験の無い少女たちでは苦戦するのも仕方が無い。

「（……いや、適性検査で乗つたことがあるのか？）」

IS学園に入学する前に、少女たちはISとの適性を計る検査を受けている筈だ。生憎と千冬はその検査を受けていないが、だとしてもたつたの一度きり。苦戦することに変わりは無い。

教師が順番に班を周つてゐるようだが、千冬たちの所に来るのはまだ先になりそうだった。

「ね、ねえ、織斑さん」

「……なんだ？」

班員の一人が控えめに声をかけてきた。

「織斑さんって、篠ノ之博士と仲が良いん、だよね？」

「まあ、そうだな」

「ならさ、ISの装着の仕方とか、教えてもらえない？なんか、上手くできなくて……」

「あと、篠ノ之博士の事、いろいろ教えてほしいなあ、なんて」

束と親しいという事から、千冬もまたISには詳しいと判断されたらしい。判断こそ間違えてはいないが、千冬としては面倒極まりなかつた。

「（ただ眺めていようと思つたんだがな……）」

この様子では、授業内で班員全員が装着するのは難しいだらうと考えていただけに、矛先が自分に向けられて溜息を吐きそうになるのを堪えた。あまり露骨に態度を出すと、相手に与える心象は悪くなる。

束は他人を全く気にせずにいるが、千冬は少なからず、円滑な人間関係の為にそれを気にかけていた。

「……IHSに背を向けて、身を預けるんだ。あとは勝手に装着される」

「えっと、やつてみるんだけど……」

「緊張しなくていい。落ち着いて、ただ身を任せているだけで十分だ」

「うん」

IHSを装着できずにいた少女が、深呼吸を繰り返してゆっくりと体をIHSに預ける。

IHSから発せられた光が少女を包み、それはゆっくりとだがやがて収束していった。少女がIHSを身に纏つて現れる。驚いた顔をした少女が千冬を見て、笑みを浮かべて足を一步踏み出した。

「ありがとう、織斑があつ！？」

ぐりりと傾く少女の体。IHSを装着するのに苦戦するみたいな少女が、装着した状態でどれくらい動けるのか。

答えとしては、まともに動けるわけもなく。踏み出した足は上手く動かず、そのまま重力に従つて地面に向かつて倒れようとした。

IHSを装着している限り、ただ転んだだけで装着者が怪我をする事は無い。だが問題だったのは、その転んだ先に他の少女がいた事だった。

班員の少女は倒れ込んでくる少女に驚き、咄嗟の事で判断が下せず固まってしまった。このままIHSを装着した少女が倒れれば、下敷きとなり怪我をするだらう。

千冬は、そう判断した瞬間に、束が自分に与えたIHS、暮桜を展開し装着した。瞬き一つにも満たない速さでの装着に気づけた少女はおらず、ただIHSを装着した千冬が倒れかけた少女を支えているのを見て、初めてその事実に気づいた。

「織斑さん……？」

「ん、そのE-Sは？」

「……私の専用機だ」

言葉少なに答えて、千冬は少女がきちゃんと立つたのを確認して手を離す。

暮桜を解除して地面に下りると、E-Sを装着したまま皿を見開いて固まる少女を見上げた。

「次が待っているや」

「あ、はっ、はいーー！」

慌ててE-Sを解除する少女と、自分を見つめる少女たちから数歩分の距離を取つて。

左手で光を反射するブレスレットに指を這わせると、千冬は聞こえてくる囁きに深く溜息を吐いた。

「（煩い、な）」

専用気持ちは、まだ世界でも入手で足りる数しかおらず。ましてや千冬が持つのは、国では無く束から与えられた機体。

束との関係から注目されるだけでは無く、これからは千冬の持つE-Sでも注目されるだろうことは容易に予想がついた。

「無視しちゃえば良かつたのに」

ギュッと抱き着いてきた束が、千冬の耳元で囁く。千冬に強制的に追いやられた束だったが、再度戻ってきたようだ。

「わざわざちーちゃんが助けなくたっていいの？」

「一応は班員だ。それに、田の前で怪我をされるのも鬱陶しい」

「気にしなくて良いよそんなの～」

束は拗ねたように言葉を紡いだ。

「優しくちーちゃんに、束さんはお餅を焼いちやうよ。焼きまくつ
ちやうよ」

「……別に焼かなくてもいい」

「うう、ちーちゃんが愛を受け取ってくれない……」

バッサリと切った千冬に、束は毎度ながらしょんぼりとした風に
千冬の首に顔を埋める。くすぐったさに僅かに千冬は身動きした。

「（こじても、本当）……」

抱き留めた束の体に手を回しながら、千冬はクラスメイトの視線
に田を開じる。

「（謹がしくなりそうだ）」

千冬の前途多難な学園生活は、幕を開けたばかりだった。

厄介な人気者

IS学園に入学した生徒は、日本人だけでは無い。当然のように、黒髪の中には金髪といった日本人とは違つ色が混ざる。

日本人の少女たちはISに興味を持つただけで入学した者が多数いるが、外国から入学した者たちにそれだけが理由なのは少数だ。少数では無い多数派は、それぞれの国からISの技術を多く取得していくこと、また篠ノ之束に近づき、懇意にすることを目的に加えられる。既にISがその国の國防力に繋がるといえる程になつてゐる今、開発者たる篠ノ之束とどれだけ良好な関係を築けるかはとても重要だった。

「あの、篠ノ之博士。よろしければ私たちとお食事でも」

「邪魔。ちーちゃん、束さんはお腹がすいたよ！」

「分かつたから耳元で騒ぐな」

話しかけられたのを一蹴した束が、千冬に抱き着いて笑う。弁当箱を一つ持った千冬は、歩きづらそうに束を引き剥がしにかかりながら教室を出て行つた。

いくら少女たちが束に近づこうとしても、当の束は少女たちに一切の興味も抱かず。それどころか心底鬱陶しそうに、視線すら向けてゐるのだから、少女たちは焦りを抱き、同時に

「なんなんですか！」

「私たちがこんなにもお誘いしているといつのに」

自尊心の高い少女は、そんな対応に憤慨する。けれど、国から頼

まれて居る束の束に怒りをぶつけるなどとこう懸かんな行為は、出来る筈も無い。

やつすると、その怒りの矛先は自然と、束の身近にあつて自分たちにとって邪魔な存在へと向けられた。

「織斑千冬、篠ノ之博士といつも一緒にいて……」

「あの子さえいなければ、博士だつて私たちの話を聞いて下さるわ」「そりよ。あの子が博士を無理矢理引き留めているんだわ」

向けた怒りを正面化するより少女たちは口々に言ひ、千冬への怒りを高める。

それは、入学式から一週間が経過した日。生徒たちもよひやく、ISに慣れ始めた頃の事だった。

騒がしさから離れた場所を求めて千冬と束がやつて来たのは、学園の屋上だった。

「ちーちゃん、あーん」

束の手に握られた箸に摘まれた唐揚げが、千冬の口元に差し出される。

それを、いつもの事かと千冬は口を開けて受け入れ、飲み込んでからお返しどばかりに自分の弁当箱の唐揚げを束に差し出した。

「ん~、ちーちゃんの愛情満天だね!~」

「良かつたな」

「うん~はい、ちーちゃん。あーん」

束の持つ弁当箱の中身は、殆どを千冬が食べてしまっている。対して、千冬の持つ弁当箱の中身は、同量だけ束が食べてしまっていた。

一人が持つ弁当を作ったのは千冬であり、中身は同じだ。そして千冬は、束が差し出してくるおかずを返す様に、自分の弁当箱からおかずを差し出す。

それを繰り返すうちに、一人の昼食は終わってしまうのだった。空になつた弁当箱を仕舞い、千冬は座つたまま柵に寄りかかり空を見上げる。雲が流れる青空が広がっていた。

「ちーちゃん、眠そうだね

投げ出す様に伸ばされた千冬の片足に寝転んだ束が、千冬を見上げて言った。

千冬の表情に変化は見られなかつたが、その無表情から束は確かにそう読み取つていた。

「少しな

そのこと、千冬は小さく頷いて返した。

「寝る?」

「……束はどうするんだ?」

「どうしようかな~。天才束さんの頭脳は、寝てる時もフルスロットル! 休む暇なんて無いからね~」

寝るに寝られない束の目の下から隈が消える事は無い。千冬はそれを知つている。

こんな会話をしたのも、一度や一度では無かつた。軽く目を閉じた千冬は、柵に頭を預けて体から力を抜いていくと、静かに息を吐

を出した。

「予鈴が鳴つたら、起こしてくれ」

「はいはーい。ゆっくりおやすみ、ちーちゃん

「……おやすみ」

しばらくして、千冬の口から寝息が聞こえ始めると、束は見上げたその寝顔に笑みを浮かべる。

「かわいいなー、ちーちゃん」

鋭い目は閉じられて、引き結ばれた唇は少しだけ開いて。あどけない寝顔を見られるのは、この世界で束と、一夏と篠だけだ。騒がしいのを嫌い、建前はともかく根本は束同様の千冬がこうも安らかに眠るのは、自分にとつて大切な人間の前だけ。つまり、この寝顔を見られるのは、千冬の大切な人間だけなのだ。

「ちーちゃんは愛情を、言葉じゃなくて態度で示してくれるもんね」

束さん感激、と。『ロロ』と猫が懐くよつて千冬の腰に抱き着いて束は笑う。

しつこく自分に話しかけようとする人間がいるのは鬱陶しかったが、四六時中千冬と一緒にいられるのは、束にとつて嬉しい事だった。それこそ、大人しく三年間をここで過ごしても良いと思つくらいに。

朝起きてから夜寝るまで一緒にいられる。それは誰よりも千冬との時間を共有できている事に他ならない。それは、千冬の弟の一夏よりも長い時間かもしぬなかつた。

「……まあでも、ここでもちーちゃんが人気者なのはジョラシーだ

けどね「

千冬に向けられるクラメイトの視線は変わりつつある。

これまでが、IS開発者の束と共にいる正体不明の一生徒に向かわれる妬みや疑念、不審だつたものが、授業にISの実技が入るようになつてからは、誰よりも上手くISを操縦し、またISについて教えてくれる頼りになる生徒に向けられる尊敬、敬慕、と。

もちろん、誰よりも早く専用機を持つ人間として妬みを向かられるのも事実だが、それでもクラスの多数の生徒から、千冬は慕われ始めている。

それは幼稚園から中学校まで、束が見続けてきた光景と変わりなかつた。

「ちーちゃんは束さんだけのものなのに…………あ、いっくんと籌ち
ゃんは別枠ね」

誰にともなく言つて、束は千冬を見上げる。変わらぬ寝顔がそこにあつた。

「……興味ないなら、ちーちゃんも無視しちゃえばいいのになあ

どこに行つても人気者な千冬に少しの嫉妬を抱きながら、束は千冬の寝顔を眺め続けた。

午後の授業が始まり、千冬はいつものようにノートを広げる。隣の束は、教壇に立つ教師である朱莉に一切の視線を向けずに、空中投影した小さなディスプレイを眺めていた。

「えー、それでは。今日は授業の前に、このクラスの代表を決めたいと思います」

「クラスの代表？」

「先生、それってなんですか？」

ほんやりとノートを眺めていた千冬は、顔をあげて質問される朱莉を見る。

「クラス代表は、文字通りそのクラスの代表です。各クラスの代表で行われる対抗戦などがあり、対抗戦を通して全体の実力を測ります。実力が分かり、競い合えば向上心も生まれるでしょう。ちなみに、クラス代表は一年間変更が出来ませんから、その辺りも踏まえて考えるようにしてください。自薦、他薦は問いませんから、手早く決めてしまいましょう」

そう言いつつも、朱莉はなかなか決まらないだろうと考えていた。一週間が経ち、IRSの操縦に慣れてきたとはいえ殆どが未だ初心者、経験者も初心者とさほど変わらないレベルでしかも、そんな中で立候補する者がいるとは思えない。

一人だけ実力的に飛びぬけている生徒はいたが、自ら立候補するような人間とは朱莉には思えず、また誰かが推薦する可能性も低く思えた。

「それでは、誰か立候補、推薦をする人はいますか？」

「はい！」

けれど朱莉の予想を裏切つて、何人の手が一度に上げられた。

「織斑さんを推薦します！」

「私も、織斑さんを」

「織斑さんが良いと思こまわ」

次々上がる同じ名前に、千冬は訝しげな顔をし、束はちからつとイスプレイから視線をあげた。

どうにも面倒事に巻き込まれそうな気がして、それを確信へと変えたのは朱莉の一言。

「他にはいないみたいだし……では、織斑さんを一年一組の代表とします。効率化の為にも、本人の辞退は認められないでの、織斑さんもよろしくお願ひしますね」

「…………分かりました」

先回りするように付け足された言葉に、千冬は溜息を飲み込んで頷いた。

それに生徒たちは笑みを浮かべて喜び始め、千冬はうんざりとした気持ちを抱えて椅子の背もたれに寄りかかる。束が睨むようにして静かに生徒たちを一瞥した。

「ちーちゃん、本当にやるの？」
「辞退は出来ないらしいからな……仕方ないさ」「でも」「土日に帰る条件に影響が無いなら、どうでもいい」「……ん、分かったよ」

既に興味をなくしている千冬に、束も納得したように頷いて、仮想キーボードに手を伸ばす。

「（ちーちゃんが嫌がつたら、潰しちゃお）」

至極当然のようにそんなことを思って、キーボードに手を滑らせる

る。始まつた授業には、一度も顔をあげなかつた。

ある休日の予兆

千冬と束が工大学園に入学してから、一度目の土曜日。寮生活から解放される、一度目の休日。

週明け早々にクラスの代表という面倒な立場に祭り上げられた千冬だったが、最初に提示した条件であるこの帰宅だけは、どんな理由があるうつと貫くつもりだ。

「（束の事を言えないな）」

工の土日は千冬に便乗して勝手に帰宅している束が、妹の筹へその溢れすぎで止まらない愛情を注いでいるのは分かり切っている。それほど露骨では無いが、千冬は千冬で一夏への並々ならぬ愛情を抱いているのは確かであった。

そんな一夏と、千冬は今少し遅い昼食を共にしている。起き抜けに寮を出発して、つい先ほどよつやく帰宅したのだ。

「なあ、千冬姉。学校は？どんな勉強するんだ？」

「基本は工大に関する授業ばかりだ。一夏はどうなんだ？難しいか

？」

「平気だつて」

「分からないとこがあるなら、私がいる間に聞いておく事だ。教えてやる」

「んー……じゃあ、後で宿題手伝つてほしい、かな

「いいだ」

五日ぶりの姉の帰宅である事から、一夏としてはもう少しあ遊びを

中心としたい気持ちはあったが、姉が騒がしいのを嫌うのは十分に承知していた為。

とりあえずは今日一日をゆっくりと過ごしてもらおうと、天気のいい外には田を向けて家で過ごすことを決めた。

「そういうや、IS学園って女人ばっかりなんだよな」

「ああ」

「千冬姉のクラスも?」

「そうだ」

「……千冬姉、クラスの人とどんな話してるんだ?」

純粋な疑問から、一夏はそう問い合わせた。

どういうわけか、千冬は学園の事を話そうとしない。一夏が問い合わせれば隠さず答えてくれるのだが、自分から言わないのだ。

そして、自発的に千冬の口から束以外の学園の人間の名前が出来る事も無い。それはIS学園に入学する前から変わっていない事だつたが、だからこそ余計に、一夏は千冬の人間関係、基友人関係に興味が沸いて仕方が無かつた。

「……」

「……千冬姉?」

しかし、その問い合わせに千冬はなぜか無言を返す。その初めての答えに、一夏は不思議そうに瞬きして名前を呼んだ。

「どうかしたのか?」

「……ああ、いや。すまない…考えてはみたんだが……」

何とも不安を感じさせる前置きをして、千冬は眉尻を下げる口を開く。

「特に話していないな」

「……話して、ない?」

「授業で必要なら話すが、それ以外はな。束と一緒にいるから、話す必要が無いんだ」

「……千冬姉、束さん以外に友達、いる?」

「あれを友人と呼べるのか、正直分からんな」

千冬は考えるように箸を置くと顎に指をあてて、同じクラスの少女たちの事を思い出す。といっても、思い出せる事は存外多くは無かった。

「遠巻きに見ているばかりで、話しかけては来ても一言一言で離れていく。名前を知っているだけで、他は何も知らんな

「じゃあ、話すのは束さんとだけ……?」

「静かでいいわ」

離れたところで騒いでいて煩いが、と最後につけたして、千冬は温くなつたお茶を啜る。

一夏はそんな姉の学園での姿に幼いながらに頭を抱えくなつた。長年、千冬の態度が一夏と笄たちに対するものと、束に対するもので違うのは分かつていたし、さらに言えばそれ以外に対する態度が一貫している事も分かり始めていた。

束は他人に興味を持つていらない事を露骨にするが、千冬は他人に興味を持つていらない事を露骨にしない。話しかけられれば答えるし、その答えも束のように全力で拒否するものでは無い。

けれど、自分から関わろうとしないのは束と同じ。千冬は束と一夏と笄にしか、自発的な行動を取らない。それが、一夏が千冬への理解を深めた結果得た答えだった。

「一夏はどうだ？友達は出来たか？」

「あ、うん。面白い奴がいてさ」

「ほひ。それは良かつたな」

「…………うん」

自分の事以上に姉の学園での事で心配になりながら、一夏は自分の学校での出来事を話し始めた。

千冬と束がIIS学園の寮に戻ったのは、日曜日の夜遅く。エントランスで確認した時計の短針は九を指していた。

帰宅していくよといなかろうと関係なしに千冬を求める束が、日曜日の朝から笄を引き連れて織斑家を訪れ、四人で思い思いに過ごした結果。千冬は一夏と笄が変わらず仲のいい友人である事に安堵した。笄の恋心は、未だ一方通行であるらしかったが。

受付にて戻ってきた手続きを終えた千冬が、束と共に寮の廊下を歩く。とうに夕飯もシャワーも終えたらしい少女たちが、女子しかいない事から来る警戒心の薄さが分かる服装で歩き回っていた。

「あ！」

「織斑さん……」

ちりほりと耳に届く少女たちに囁き声に気づきながら、千冬はそれを無視して歩く。わざわざ囁きに反応して振り向いてやる性格では無かった。

「篠ノ之博士……」

そして千冬の隣を歩く束は、堂々と名前を呼ばれても立ち止まら

なければ、一切の反応をしなかった。

呼ばれたのが束である事から千冬の足は止まらず、また束の足も止まらず、後ろからそれに慌てたらしい足音が近づいてくる。足音は一つでは無く、複数であった。

「待つてください、篠ノ之博士！」

三人の少女が、千冬と束の前に回り込んでくる。いくら寮の廊下が広くても、三人横並びになられては残る通路もなく。一人は強制的にその足を止めざるを得なかつた。

「お探ししましたのよ、篠ノ之博士。どうらく行つてらしたのですか？」

「私たち、是非とも博士とお話ししたいことがあつたんですね」「どうでしょう？私たちの部屋でお茶を飲みながらゆっくりお話ししませんか？」

少女たちの目當ではあくまで束一人だつた。

国からEVA開発者である束と懇意にするように言われたのか、はたまたより多くの技術を得るために策か。

どちらにしろ、三人の少女の言葉に千冬は自身が必要であると考え、狭くなつた通路を通り抜けてその場から立ち去ろうとした。

「ちーちゃん、どこ行くの？」

一步、横にずれたところで背中にのしかかる重み。首に束の腕が回され、その体重の殆どは千冬の体に預けられていた。

一人離れていく千冬を束が許す筈も無く、また束を引き連れた千冬を少女たちが逃がす筈も無く、道は現れた邪魔者に忌々しげに顔を歪めた少女たちによつて閉ざされた。

「あなた、なんなんですか？」

「ずいぶんと博士と親しいようですね。どうにうつもりかしぃ」

「私たち、これから博士をお訪しするの。貴女はお呼びじゃないのよ、わざわざ消えてくれないかしら」

「（……煩いな）」

理不尽の一言に呑まれる少女たちの物言いに、千冬は心中で細かいことも、束と共にいる千冬は田の敵にされるらしかった。

チラリと視線だけで束を見れば、肩のあたりにある顔は無表情になっていて、その瞳は冷め切っている。見つめる先にいる少女たちを、人間と捉えているかも怪しいと思えた。

「道を開けてくれれば、すぐに立ち去る」

「その前に、貴女が捕まえている篠ノ之博士を離してあげたりどうなの？」

「……」

千冬の手は、下げられたまま一度も上がっていない。千冬と束の状況は、どう見ても束が千冬を捕まえているといつていい。

しかし、それぞれの思考に囚われている少女たちの目には、そんな風には見えず。少女たちにとって都合の良い様にしか、一人の事を捕えていなかつた。

「貴女みたいな一生徒といふより、私たちと話した方が博士にとても十分な利益になるわ」

「なんたって、私たちは三人ともI.S適正Aランクですのよー」

「A判定は十人にも満たないわ。貴女なんて、Cランクが精々でしょう？」

「よくてBかしら？ ふふつ、どちらにせよ、これで分かつたでしょ

う？貴女なんかが博士と一緒にいて良い筈が無いのよー。」

そして少女たちは氣づけば千冬を完全なる敵と見做し、言葉による攻撃を開始する。

現在のIIS学園において、入学前に行われたIIS適正検査を元に割り当てられたランクは殆どがCまたはB。Aは少女たちの言葉通り十人にも満たず、それを超える適正の少女もまたいない。

「……そういえば、貴女専用機を持っているんですって？」

「篠ノ之博士が貴女に作つたって噂だけぞ」

「有り得ないわよね。大方、貴女が言いふらしたデマなんでしょう？」

？

少女たちの言葉は止まらない。千冬と束もまた、口を開かない束の表情は一貫して無のままであり、そしていつしか、千冬の表情もまた束のものと近くなつてしまつた。

「何とか言つたらどうなの？」

そうして『えられた機会に、けれど千冬は口を開かず。興味を示さない瞳を少女たちに向けた後、束の体を引き連れたまま少女たちに背を向けた。

「ちよ、ちよっとー？」

無言で立ち去ろうとする千冬に、逆に慌てた少女たちが走り出す。最初に廊下で呼び止めたとき同様、またも進行方向に回り込んでいた少女たちにが、顔に怒りを浮かべて千冬を睨んだ。

「何処へ行くつもり？」

「……それを君たちに言つ必要は無いだらう」

「いいえ、私たちは博士に用があるのよ。貴女がどうで何をこつけと勝手だけれど、博士は置いて行つてくれないと」

「…………束」

千冬は、背中に引つ付いた束に声をかけた。無表情の束が一瞬にして、名前を呼ばれたことにに対する喜びに染まる。

「お前に用事があるそうだね」

「束さんはそんなことよつちーちゃんとお部屋でのんびりお茶しながら愛を育みたいなー！」

「…………」

束の返したずれた回答にて、千冬は面倒くさがつな溜息を一つ吐き出した。きちんと答えると言わんばかりに、首に回された腕を外して束の体を廊下に落とす。

「う～、ちーちゃん酷い」

「お前が原因だらう。部屋に戻りたいなら、自分で何とかしろ」

「えー、でも束さんはこんなと話すよりもちーちゃんの声を聞きたいんだけど」

「部屋で少しふりこななら付け合つてやる」

「あ、ほんと?」

「ああ」

それなら、じばかりにぴょんと立ち上がった束がまたも千冬の体に腕を回して、少女たちを見やる。

「篠ノ之博士ーどうか私たちと……」

「煩いよ。とりあえず今すぐその口閉じて呼吸止めといつか?」

「え……」

浴びせかけられた冷水にも似た言葉は、視線を向けられた事に喜んだ少女たちを一瞬にして困惑と混乱へと落とした。

束の表情は千冬に向けられた笑みを一切残してはおらず、無いと言。唯一、その瞳だけが珍しくも、どことなく怒りを湛えているのが伺えた。

「正直、ちーちゃんを馬鹿にした君たちに言葉の一つも視線の一つもあげたくないなんてないんだけどさ、これ以上邪魔するなら仕方ないよね。君たちさ、なんで束さんとちーちゃんの邪魔をするのかな？君たちが邪魔する権利なんて塵ほども無いんだけど。束さんはこれからちーちゃんと一緒に一人っきりでゆっくりと夜を過ごそうとしてるんだよ、それを邪魔されるのはとっても不愉快なんだよね。それになんか好き放題言つてるけど、△ランク？それがどうしたのさ？」

束は片手で千冬の左手を取り、持ち上げたその左手首に唇を寄せた。

「ちーちゃんは△ランクで言つたら△だよ。それに、暮桜は束さんが一から十まで全部作つたちーちゃん専用の、ちーちゃんの為だけの専用機。ちーちゃん以上に△に愛されてる子はないよ？」

前半の言葉は、千冬にとつても初耳であり、そして言葉全体は少女たちに大きな衝撃を与えた。

少女たちは、数少ない最高位のランクである事にそのプライドを更に高くしていたのだ。だからこそ、正体の知れぬ千冬相手にあとも強気でいられた。

しかし、束から齎された情報はそのプライドを打ち崩す弾丸であり、少女たちが驚きに目を見開き唇を戦慄かせるには十分であった。

「そ、そんな……」

「Uランク？本当にいるなんて」

田の前で謫言の様に呴く少女たちだけでは無く、衝撃の事実は密かに聞き耳を立てていた周りの少女たちにも伝染する。

俄かに騒がしくなった周囲を視線で一瞥してから、千冬は束に言った。

「私のランクがSだなんて、知らなかつたぞ」

「言つてなかつたからね～。でも、当然だよ？ ちーちゃんは私に愛されてて、私の子どもにも愛されてるんだから」

「……答えになつていない」

「んー、そもそもUはちーちゃんの為に作ったんだよ？ なら、ちーちゃんが一番使いこなせて当たり前だよ」

何も不思議な事は無いと、束は千冬に笑顔を見せる。千冬は静かに溜息を吐いた。

未だ咳き続ける少女たちには再び背を向けて、今度こそ足早にその場から立ち去る。衝撃の事実は、明日にまたもつ学園全体に広まっている事だろう。

騒がしい事を嫌う千冬は、基本は静かな学園生活を送りつつと考えていたのだが、それはどう頑張ろうとも無理な事なのだと悟られるを得なかつた。

「ああ、今日もベッドで愛を語り合おうかーちーちゃんーー。
「寝るだけだわ！」

それでも、騒がしさの原因である彼女を手放さうと思わない事が、千冬の真実だった。

衝撃の事実、広まる

千冬と束の食費は無料と言つていい。ただし、それは食堂を使った場合に限る。

政府は一人がIIS学園に入学するにわたり、一人の諸々の費用についてにはほぼ免除することを条件として受け入れている。

束は、当然ながら政府にとつては日の届く場所で、それも自分たちが容易に監視できる場所にいてほしかったから。そして千冬は、そんな束を自分たちにとつて都合の良いIIS学園に入学させる為に。たつた一人分の費用を免除するだけで束という爆弾を一か所に留めておけるのだから、政府にとつては非常に安い買い物だつただろう。

なので、そういうた理由から免除された食費のおかげで、千冬たちは無料で美味しい食事を食べる事が出来る。千冬自身が弁当を作るとなると、その材料費ばかりは別途で支給される生活費から出されるので、無料というわけでは無くなるが、時折、束のたつての希望で作ることもある。

けれど基本は、一人の食事はIIS学園内の食堂で済まされた。無料ならば使わない手は無いからだ。

「……ふむ」

やつて来た食堂は、千冬と束同様に昼食を食べに来た制服姿の少女でいっぱいだった。

午前の授業が終わり、早々に教室を出たもののやはり混み合ひの事に変わりは無かつたらしく、千冬は空いた席が無いかと食堂をぐるりと見回した。束は、千冬の分の食券を持って注文の列に並んでい

る。当然ながら嫌がっていたが、一人揃つて並ぶよりも一人は席を確保するべきだと千冬に言われて、取り残されるようにして並ばされていた。

そうして席を確保するべく動き出した千冬は、四人掛けの空いている席を見つける。他に空いている席も無い事から、とりあえずは席の一つの椅子を引いて座った。

「（やはり、煩いな）」

何度も訪れた食堂とはいって、その騒がしさに千冬は辟易する。出来るなら静かな空間で食事をしたいと何度も思つたが、食費免除はやはり魅力的であった。

注文を待つ列から離れた席で、千冬は束を探す。列の前の方にその姿があり、無表情ながらその表情は酷く苛立つているのがよく分かつた。といっても、周りはそれに気づいていないだろう。それでも遠巻きに、束に視線を寄越してはこよこよと話していた。

「あの人だよ、Uランクの……」

「篠ノ之博士が専用機を作つたんでしょう？いいなあ」

「でも、それならテレビで紹介されたりするんじゃないの？」

「織斑さん、だつけ？」

「博士と仲が良いみたいだけど……なにか知つてる？」

「さあ……」

そしてそれは、千冬も同じ事であった。

遠巻きに眺める少女たちは、興味深げに千冬を見ては小声で会話を交わす。聞こえてきた会話に千冬は煩いとは感じるも、それ以外は特に思ひことも無かつた。

ただ、騒がしい空間で、自ら置いてきた束が早くやつて来るのを待ち続ける。

「君、織斑千冬さんだよね？」

そうしていたところ、「唐突に後ろから声をかけられて千冬は振り向いた。

眼鏡をかけた少女が一人、何が楽しいのか笑みを浮かべて立っている。首には、小さなデジタルカメラを提げていた。

「そうだが、私に何か用か？」

「取材させてほしいんだよね。織斑さんについて」

「私を、取材？」

千冬は驚いたとばかりに僅かに目を見開いて見せた。そう、と頷いた少女はメモ帳とボールペンを取り出すと、きらりと目を光らせる。

「IIS開発者である篠ノ之博士と共に一緒にいる謎の美少女、その真実はIIS適正ランクの専用機持ち。これだけでも、私たち生徒からすれば興味を惹かれて仕方ないのに、君も篠ノ之博士も誰とも必要以上に距離を詰めようとしない。遠目から観察するのも終わり、これからはどんどん攻めて攻めて攻めて、君たちの事を明らかにさせてもらひつよ…………あ、ちなみに私は文野新菜。気軽に文ちゃん」と呼んでくれていいいから

文ちゃん、文野はようやく言葉を止めると軽くウイinkをして、断りもなしに千冬の隣に座った。瞬間、千冬の目が細められ文野を睨むように見るが、文野は、

「取材が終わったらすぐ戻るよ。だから、お願ひー・協力して」

ペンを片手にそう言つだけだつた。

そんな彼女と、彼女と自分に視線を向ける周りの少女たちを鬱陶しく思いながら、千冬は溜息を飲み込む。ちらりと視線をやつた注文待ちの列には、束が未だ並んでいた。

「……答えられることには答える。だから、早くしてくれ」

「『』協力感謝します！では早速……」

早々に立ち去つてほしい千冬が了承すると、文野はかちりとペンを鳴らして質問を始める。

「篠ノ之博士との関係は？」

「幼馴染だ。それ以外の答えは無い」

「それはいつから？」

「幼稚園の頃からだな。小中も一緒にだった」

「……にしては、仲が良すぎる気もするんだけど、その辺は？」

「知らん」

にべも無く言い放つ千冬に、文野は少しばかり物足りない顔をしたが気を取り直したように笑みを浮かべた。

「君の持つ『』は、博士が君の為に作ったって言つけど、それって本当？」

「束が言つなら、本当なんじゃないのか？」

「君は何も知らないの？」

「入学直前に突然渡されたからな。詳しい事は、私もあいつに聞かなければ分からんさ」

「ふむふむ……ところで、『』の操縦技術や知識がズバ抜けてるつて話があるんだけど」

「それが？」

「 I.S の操縦技術や知識は、博士直伝？」
「多少はな」

知識については束直伝ではあるが、操縦技術については千冬の経験が大きい。

I.S 開発当初から、実際に装着し使用していたのは千冬ただ一人。調整の為に何度も装着していたので、稼働時間は百時間近くと言つても良い。

現時点の I.S 学園における I.S の実技は、装着から歩行、低速度での低空飛行を行つてゐる段階であり、基礎の基礎といつても過言では無い程度で千冬が躊躇はずも無く、慣れてしまつてゐるが故に完璧に行われる動作は、少女たちの尊敬を集めた。

ただ、そんなことまで話すつもりも無い千冬は、この質問にこれ以上答えるつもりが無かつたので口を閉ざし、それに文野はまたも物足りない顔をしながら次の質問へと切り替える。

強引に取材を取り付けたわりに、この辺りの空気は随分と読めるらしかった。

「次は、君の適正ランクなんだけど」

「Sランクらしいな。私にそれ以上、話せる事は無い」

と、うよりもランクについて、何を話せと言つのか。文野はふむ、と考える様子を見せたが、すぐに次の質問をする。

「家族構成は？」

「……なに？」

一転して、ガラリと変わつた質問の方向性。千冬は訝しげに文野を見た。

対して文野は、メモ帳をあらわらと左右に揺らして、にんまりと

笑つて見せる。

「やつぱり、織斑さんについてもつと掘り下げたいしや。せつかも
での質問は、噂が事実かどうか確かめたかったってのもあるの」
「そうか。なら、もう良いだろ？」

「いやいやいや、是非とも答えてもらいたいんだけど。皆だつて聞
きたがつてるからや」

お願い、と言つて文野は質問の答えを待つた。けれどそれに、千
冬はただ一言だけを返す。

「答えるつもりは無い」

冷めた視線が文野を射抜き、また聞き耳を立てて遠巻きに見てい
た少女たちを射抜いた。

淡々とした様子は先ほどまでと変わりなかつたが、新たに加わつ
た冷たさが、好奇心で高まつていた少女たちの心を一気に冷やす。
けれど、それは一瞬の後に消え去り、千冬は興味ないとばかりに
文野から視線を背け何も無いテーブルを眺め出した。

「……えつと、織斑さん」

「なんだ？」

「あー、その、質問なんだけど、や」

千冬の周りで異常なほどに静まり返つた少女たちの中、文野だけ
は立ち直り、また質問を繰り返す。

「趣味、とかは？」

「無いな」

「あー、じゃあ、好きなもの……」

「答えるつもりは無い」

それ以降の、千冬を掘り下げるとした文野の質問は、全て無いか答えるつもりは無いといつ回答しか得られなかつた。

機嫌が悪いのかどうかも分からぬ表情の千冬に、文野は困り始める。そして諦めたとばかりに、最後の質問を口にした。

「一年一組のクラス代表として、一言お願い」

質問では無く、お願いであつた。

「……精いっぱい頑張りつゝ想ひ」

「んー、出来ればもう少しはあると良いんだけど」

「悪いが、これ以上言える事は無い」

「なら、適当にそれっぽく脚色しても良い?」

「……好きにしろ」

その辺りについて、千冬は特に興味も無く。駄目だと言つてもされるだらうことを思つて、何かを言つのも面倒になつていた。

「ちーちゃんーーー！」

最後の最後に写真でも、と文野が言おうとしたところで、声が割つて入る。一人分のトレイを持った束が、見事なバランス感覚のもと千冬の元へ走つて来ていた。

やつて来た束がトレイをテーブルに置いて、我慢できないとばかりに千冬に抱き着く。隣の文野は目に入つていらないらしかつた。

「一人で寂しかつたよちーちゃんー！束さん思わず周りの全部を石ころに変えたくなつちやつたよー！」

「やめろ。ありがとな、束」

「そのちーちゃんの一皿で束さん幸せでお腹いっぱい...」

ぐりぐりと座つてこむ千冬の首筋に顔を埋めた束に、千冬は適当に置かれたトレイを引き寄せて言ひ。

「早く食べるぞ。昼休みが終わる」

「はいはーい.....で、瓶はこつまでもそこそこあるのかな?」

「へ?」

上機嫌が打つて変わつて無表情に、けれどその瞳に敵意を宿して、束は千冬の隣に座る文野を睨んだ。

「話聞いてたよね? これからちーちゃんと束さんばい飯なんだけど。そこに君が座つてる理由は無いんだよ。しかも誰の許可を持つてちーちゃんの隣に座つてるの? そこは束さんの席であつて君のじやないよ、邪魔だよ」

「ひしめんなさい」

一から十まで拒絕を言われて、文野は体を震わせて席を立つ。とてもではないが、これ以上は千冬に取材など出来ようも無かつた。もちろんそれは、束にも同じことであり。上手くすれば一人どちらにも取材が出来るかもしないと、抱いていた甘い考えは儘く消えた。

「ちーちゃん、漬物あげるー」

「.....こちらにあるんだが」

「じゃあ、それちょーだい」

「仕方ないな」

「一並んだ焼き魚定食を食べさせ合つ千冬と束は、ただの幼馴染
というには異様すぎる。

けれど、それを聞けるような少女はその場におらず、デジタル力
メラを握りしめた文野の存在は、既に一人の意識の外に追いやられ
ていた。

翌日の朝、教室の並ぶ廊下に設置された掲示板の前は、少女たち
で賑わっていた。

教室にやつて来た千冬と束は、その騒がしさに顔を見合わせる。

「煩いね。何を騒いでるんだか」

「私たちには関係ない事だらけ。行くぞ」

大した興味を抱くわけでも無く、千冬は一組の教室の扉に手をかけた。

「あ、織斑さん！」

珍しく、千冬を呼び止める声が少女たちの中から飛んで、千冬は扉にかけていた手をそのままに顔だけを振り返る。

随分と慌てているらしい少女は、千冬たちと同じ一組の生徒だ。
少女は落ち着きない動作で千冬と束に駆け寄り、必要以上に大きな
声で話し出す。

「あの知らせ、もう見た？」
「知らせ？」

千冬は不思議そうに単語を繰り返した。

少女が指差した先を辿ると、少女たちの団体と目が合ひ。その頭の向こうに、掲示板に貼られた大きな紙の上部分が僅かに見えて、それの事を言つて居るのだろうかと考えて首を振る。

「いや。知らせといふのは?」

「見た方が早いよ。こっち」

少女に連れられるままに、千冬は少女たちの団体へと深入する。当然ながら、千冬のすぐ後ろを束がくつ付いてきた。

千冬が進もうとすると、少女たちの団体は一斉に真っ二つに割れ、掲示板へと一直線に道が出来る。それは大そう楽でよかつたが、千冬はあまりいい気にならなかつた。

辿り着いた掲示板に貼られた紙を見上げる。紙は一枚貼つてあり、右側の紙はびづやり新聞らしかつた。

『謎のランク少女、織斑千冬に迫る――』

千冬は沈黙した。

新聞には束が千冬におかずを差し出している写真が大きく載せられ、見出しの通り、内容は千冬についてのものばかり書かれている。書き手は文野だったようで、昨日の千冬への質問と、その回答も一緒に載せられていた。

「……」

「ちーちゃん、恐い顔してん」

顔を覗きこんだ束が、むつとした表情で呟く。千冬の事がいつも広められるのは、束も嬉しくなかつた。

「織斑さん、そつちじやなくてこちー」

千冬と束の意識を引き寄せたのは、少女の声。

その声に従つて、二人は新聞の横の紙を見る。そちらは新聞に比べて小さく、A4程度のサイズだった。

『クラス代表対抗戦について』

真っ白の紙に黒の太文字で書かれた題名は、来月の中「」、五月中旬にクラス代表を行う事を知らせる為のもの。

その下に書かれた日程や多数の要項にサッと目を通して、千冬はそれらが自分に関係するものであることに、心底から溜息を吐き出した。

「面倒だな……」

束以外には聞き取れない小声で呟いた千冬の表情は、いつもと変わらず無表情。ただ、その目だけは田の前の面倒事に対する疲れを見せていた。

「ちーちゃん、大丈夫?なんなら束さんが潰しちゃつてもいいよ?」
「……それはそれで、騒ぎになるだろ?からな。遠慮しておく」
「むう。ちーちゃんが嫌ならやうなくてもいいのに」
「そういうわけにもいかない」

嫌な事から逃げ続けられると、千冬は考えておらず、その辺りはまた束と違う思考である。

ただ、やると言つても面倒であることは絶対に変わりず、千冬はどうやって穢便に済ませるかを考えた。

「織斑千冬さん!」

真つ一つに割れたまま千冬たちを囲んでいた少女たちの団体の外から、声が飛んだ。

「ふふつ、こんなに早く貴女と決着をつけられるなんて、学園も粋な計らいをしてくれるわ！」

言いながら、少女たちの団体を搔き分けてきたのは三人の少女。見覚えのあるその三人は、寮にて千冬を貶し、束に一切の慈悲を与えられずに言い捨てられた少女たちだった。

「聞いたわよ。貴女、一組の代表なんですか？私は三組の代表よ！」この意味、分かるわよね？

「……対抗戦で戦うという事か？」

「ええ、そうよ。あんなふざけた事を言つておいて、まさか棄権や辞退なんてしないでしょ？」

「ふざけた事……？」

少女の言葉に、千冬は思い当たらず僅かに顔を顰めた。

すると、少女はそれよ、と新聞を指差す。正確には指を辿った先、新聞のある一角を指しており、そこを確かめた千冬は目を瞬かせた。

『クラス代表として、他クラスに絶対に負けるような事はしません』

質問コーナーの最後、一年一組の代表としての一言として書かれた千冬の言葉だった。

喧嘩を売っているともとれる過激な言葉は、千冬が実際に言った言葉とはかけ離れている。つまり、多大な脚色、純粹な脚色しかなかつた。

「私に負けるつもりが無いなんて、そんな大口をよく叩けたわね。
後悔させてあげるから」

睨みをきかせる少女に対し、千冬は何も言わない。
そうして、もういいかと、掲示板に背を向けて少女たちの団体から抜け出そうと歩き出す。

「ちょ、ちょっとー?」

突然の行動に呆気にとられた少女が呼び止めたが、千冬は振り返らず教室へと入り、扉を閉める。

そうして自分の席に座ると、瞬間、向けられたクラスの少女たちの視線に目を閉じた。

「束……」
「なに?ちーちゃん」「あとで屋上に行くが、お前も来るか?」「行くー!」

周りの騒がしさに、唯一の安らぎを求めた。

衝撃の事実、広まる（後書き）

更新速度がちょっと遅くなつたようです。あと、学園生活が長そうな二人……。

勘違いの少女たち

顔をあげて見た空は高く、けれど確かに、いつもよりも近くにある。

雲の無い快晴の空。見えないシールドで風を感じられないのは少し残念であったが、久しぶりに飛んだ高い空に千冬は静かに目を閉じた。

『ちーちゃん、どんな感じ?』

「いい感じだ」

IISのプライベートチャネルの機能を使って飛ばされた通信にて、つい唇を動かして答えながら、目を開けて見下ろした先に束を見る。肉眼では随分と小さく見えるだろう姿も、IISを装着した今なら何の問題も無く見る事が出来た。束は、三枚の仮想ディスプレイとキーボードを展開している。

『うんうん、そうだね。それじゃ、思いつきつかつちやつといいからね!』

「ああ」

短く答えて、千冬は向かつて飛んで来る小型ミニサイルに、剣を構えた。

IIS学園で、授業以外で生徒がIISを使用する機会は少ない。

使用を禁止されているわけでは無いが、訓練機である打鉄の使用申請の手続きが面倒なのだ。

必要な書類を書いて提出するだけだが、訓練機とはいえISを使用させて何かあれば問題となる為、使用する理由、それに対する教師たちによる許可を出すための場所の指定や時間の指定と、どうにも手間と時間がかかる。

そして生徒たちは、提出する書類の使用する理由の欄でいつも手を止めてしまうのだ。何を書けばいいのか、考え過ぎてペンが進まない。そして時間だけが過ぎていく。

だから、生徒たちは授業以外でISを使用しない。だから、授業以外でISを使用する際に練習場所として提供される各アリーナには、まずもつて人がいない。

ISに比べれば楽に申請が通るアリーナの使用許可がおりたのは、千冬がアリーナの使用許可を申請してから翌日の事だった。
未だ他に使用者のいないアリーナだからこそその早さだったのだろう。

「はっ！」

飛んで来る小型ミサイルを叩き斬る。次々と真つ一つに斬り捨てられ、爆発があちこちで起こった。

四方八方から数多く飛んで来るミサイルは、白騎士事件を彷彿とさせる。実際に比べると随分とミサイルは小さいが。

「おー、いいね。さっすぐひーちゃん！」

好調な千冬に束も笑みを浮かべ、最後のミサイルを飛ばす。綺麗に縦に斬られたそれが爆発して、度重なる爆発に乱れた髪を千冬は乱雑に払った。

もうすぐ行われるクラス代表対抗戦に向けて、そして何より、外

で高く飛ばしと宣言出したのは束だ。前者は必要の無い口実に過ぎない。

空中においても、これまで培つてきた剣道の成果を存分に發揮して剣を振るう千冬の姿を見て、束は満足そうだった。

むりくつと地上に下りてきた千冬に駆け寄る。暮桜にバイザーは無く、そつとして見えた表情は無表情ながらどこか楽しそうで、束は飛びついた。

「ちーちゃんが一番は確実だね！ 敵なしだよー」

「別に一番じゃなくとも構わないがな」

「普通にやつても、あつたりぱつたつじゅじゅ落ちるよ？ ちーちゃん」と暮桜が負けるわけ無いしね！」

負けるよつなのものを渡す筈が無いでしょ、と言つた束に、千冬はだらうな、と頷く。束が開発したものが、他の誰かが開発したものより優れているのは、近くで見続けてきた千冬がよく知つていた。

「束」

「お？」

不意に、千冬は束を抱き上げると空へ飛んだ。突然の行動に驚いて束が瞬きを繰り返すが、すぐにギュウッと千冬の首に腕を回す。

「ひひっ時は、束さんお姫様抱っこがいいな～

「また今度な

「わーい！」

千冬の左腕に座るよつなの形で抱かれたことに、少しだけ不満を零して笑う。

シールドギリギリ、アリーナを眼下に見るよつな高さまで飛んで

止まつた千冬が、田尻を緩ませた。

見渡す限りの青空の向こうに、海が見える。工芸学園は海に囲まれているので、見回せば陸も空も青色だった。

「ねえ、ちーちゃん？」

「なんだ？」

「今の世界は、楽しい？」

一人揃つて青を眺めていたら、束がポツリと齒くちづき尋ねた。
その聞いかけに千冬はふむ、と考える様に田を細めると、

「面倒事は多いし、煩い事も多くて楽しくない時もあるな」

「そつか

「だが」

束が千冬を見る。同じよつて束を見上げていた千冬と田が合つた。

「一夏と篠がいるし、何よりお前はどうなんだ、と束に聞つ。嫌いじやないし……楽しい事の方が、多いと思つぞ」

言つて、千冬はお前はどうなんだ、と束に聞つ。

千冬を見つめていた束が、いつもと違つた静かな笑みを浮かべた。

「私も、ちーちゃんがいるから、大満足」

下りてきた唇は軽く重なるだけで、いつもと違つ静かに、けれど確かに向けられた束の感情に、千冬は田を閉じた。

間近に迫ったクラス代表選の話が、少女たちの間で飛び交いつゝになつた頃。

特に何かが変わることも無く過いじてきた千冬と束は、担任である朱莉に呼び出された。

「ごめんなさいね、呼び出して」

「いえ」

朱莉は困つたように笑つて、自分と向かい合ひて座る千冬と束に話し出す。

「実は、クラス代表対抗戦の事なんだけど……織斑さんは、篠ノ之さんから専用機を貰つてるのよね？」

「はい」

千冬の専用機の事が少女たちの間で話されるようになつてしまふ。千冬は一度、朱莉に呼び出されていた。

専用機があるということは、国に配分されたI.S.コア以外のコアがあることとなり、その扱いについて、つまりは所属などを確認する必要がある。

本来ならば勝手に作りだされた物とされ没収される可能性もあるが、製作者は篠ノ之束。I.S.開発者本人であり、その彼女が千冬の持つ専用機に関しては不干涉を提示した為に、下手に手出しできなくなつた状態だ。

現時点での千冬の専用機、暮桜は束所有の物という考えになつてゐる。関わつてこなければそれで良いと、千冬も束もその考えには何も言つていない。

「その専用機なんだけれど……」

朱莉がチラリと千冬の左手首のブレスレット、暮桜に目をやる。

それに束が、何か文句でもあるのかと言つよつに朱莉を睨み、千冬は静かに言葉の続きを待つた。

束の視線に押された様子を見せた朱莉が、それでもはつきりと言葉を続ける。

「対抗戦では、他の参加者同様に打鉄を使用してほしいの。今回は初の対抗戦で、ISの性能では無く、操縦者自身の実力を測りたいし、一人だけ専用機だと、生徒たちにも不満を持つ子が出て来ると思うから」

朱莉の言い分はもつともだつた。実力差を明確にするならば、基本条件は同じにした方が良い。

上としては千冬の持つ専用機がどのようなものかデータが欲しいといつ考へもあつただろうが、今回それは見送りとされたようだ。

「構いません」

千冬としても、わざわざ大衆の前で敢えて披露しようと思ひはずも無く、言われた言葉に頷いて返す。

多少は文句を言われるかと考えていた朱莉は、あつさつと頷いた千冬に思わず、いいのと再度問い合わせた。

「困ることもあつませんので」

別の機体で勝負をしろと言われたところで、千冬はそれほど問題に思つていなかつた。

束もまた、千冬がそれで良いなら良いと考えていた。

「話は終わりですか？」

「え、ええ」

「それなら、私たちはこれで失礼します」

呼び止められることも無く、一人は部屋を後にする。クラス代表対抗戦まで、一週間を切った日だった。

クラス代表対抗戦はトーナメント方式で行われる。総当たり戦よりも、優劣が目に見えてはつきりするからだ。

「貴女を倒して、私の方が篠ノ之博士に相応しい事を教えてあげる！」

「……」

一気に時は流れ、トーナメント決勝戦。

千冬は歓声に満ちるアリーナの上空で、対戦相手である二組の少女と相対していた。対抗戦の発表があった日に、千冬に宣戦布告をした少女である。

「にしても、やはり専用機の噂は嘘だったのかしら？訓練機で試合に参加するだなんて」

「学園側の意向だ。こちらの方がフェアだからな」

「…………あらそつ」

機嫌を悪くしたように吐き捨てた相手の少女に、千冬は試合開始の笛を待つ。

実のところ、千冬と少女の実力の差はこれまでの試合を見れば一目瞭然であった。片や世界初のIS操縦者にして唯一の専用機持ち、片やISに対しては未だ素人同然の少女。肩書だけでも実力の差は

分かり切つている。

『やつちちやえ、ちーちゃん!』

『……ああ』

個人間秘匿通信で、上機嫌の束がそう声をかけてきた。千冬側のピットの出口、アリーナギリギリにその姿がある。

危ないだろう、ヒ一瞬思うも、束ならば危険は無いかとすぐに思い直した。

試合開始の笛が鳴る。笛と同時に三組の少女がブレードをその手に展開しようとしたし、けれどそれよりも早く、一瞬にしてその右手にブレードを持った千冬が、少女に猛攻をしかけた。

「つああああーー！」

悲鳴があがる。勝負は十秒と必要が無かつた。

シールドエネルギーを削られ、尽きた打鉄がアリーナの地面へと落ちて行く。それは、この対抗戦で何度も千冬が眺めた光景。千冬の相手として、このI.S学園の生徒たち、生徒どころか教師ですら、役不足であった。

「優勝、一年一組代表、織斑千冬」

聞こえた声に、大きな歓声があがるのを後ろに聞きながら、千冬は束の待つピットに戻った。

「お疲れ様、ちーちゃん」

「言ひ程、疲れていないさ」

「ふふふ、さすが束さんのちーちゃんだね。まあ最初から分かり切っていた結果だけどね！」「

誰よりも千冬の勝利を信じていた束が笑う。展開を解除した千冬が床に降り立つ瞬間に飛びついて、受け止められた瞬間にその唇に口づけた。

「つん」

幸いにもピットに一人以外の人はおらず、また観客たちからも一人の姿は見えない。

すぐに離れた唇に呆れたような溜息を吐いて、千冬は束が満足するまで、その体を抱きしめていた。

「千冬様！」

翌日、教室へと向かう廊下を歩いていた一人は、唐突に呼び止められた。

クラス代表対抗戦が終わり、初めて見るIAS同士の試合の余韻に浮足立つ少女たちが目立つ廊下は騒がしく、また千冬はそんな少女たちの注目的である。

圧倒的な実力を持ち、他人に興味を持たない束が執着する少女。加えて、少女たちから見ても美人な容姿というのが相俟つて、十人が十人振り返る勢いだ。

そんな廊下の、注目の中で、それも普通では無い呼び止められ方をして、千冬は少しばかり目を細めて振り返る。

振り返った先にいたのは、頬を赤く染めた三組の少女と、少女の友人の二人だった。

「おはようございます、千冬様！」

「おはよう」「やあまあー。」

「…………おはよう」

挨拶には挨拶で返す礼儀を持ち合わせていた千冬が訝しみながらも答えると、少女たちは途端に顔を見合わせてキャッキャと騒ぎ出した。

「返してくれたわ！」

「なんてお優しいのかしら」

「（……なんなんだ）」

昨日まで、束の傍にいる千冬を田の敵にしていた少女たちと同一人物と思えない身の変わりよう。

騒ぐばかりで呼び止めた理由を話しそうの無い少女たちに、千冬の腕に抱き着いていた束の力が強まつた。それにも溜息を吐く。

「何の用だ」

聞けば、少女たちはははつと我に返つたように千冬たちに視線を戻して口を開いた。

「私、昨日の千冬様との戦いで田が覚めたんですね」

胸に手を当てて、大げさとも思える様に少女は高らかに話す。

「あれだけの実力を持ちながら、むやみやたらに誇示しない。威張るでもなく、ただ淡々と私たちを見守つて下さる。そのお心に、感動しましたの」

「…………見守る？」

「こつも一步、離れた場所から私たちを見守つておいででしょう？」

「私たちは千冬様をずっと見ていたのですよ、『さうして当然ですわ』

どうにも勘違いをしているようだ、と千冬は困り果てた。彼女が少女たちから離れた場所にいるのは、単に躊躇に近づきたくないからでしかない。

「そんな千冬様にあんな」ことをいつなんて、私は心いかしてしまったわ」

1

「そのお詫びに、これからは誠心誠意貰へさせてほしいんです。お許しくださいませんか?」

「駄目に決まってるでしょ」

敵意を通り越して殺意すら抱いた声が、千冬の隣から飛び出した。

「ちーちゃんは東さんのかーちゃんなんだよ? 必要以上に近寄つたら消すから」

ですが、篠ノ之博士……

束が千冬の手を取って歩き出す。けれど、千冬はその場から足を動かさず、束の手を握り返して少女たちを見た。

「私に何を細おつが勝手でやれども」が、勿論煙草へゆき

それははつきりとした拒絕だった。そうして千冬は束に手を引か

れぬままに逃れ王女、少女たちの前から立ち去る。

残された少女たちは、そんな一人の後ろ姿を見届けて、やがて

「この気持ちを捨てられないなんて、お優しいわ……」

ただこれ以上、関わりたくなかつた千冬の態度は、またも勘違かんちゆういされてしまつっていた。

恋は眞田、恋とは違ちがつかもしれないこれもまた、眞田であること変わりは無い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0576z/>

千冬と束は似た者同士

2012年1月8日22時51分発行